生きる

第3号

～東日本大震災と地域青年の記録～

編集・発行:『生きる～東日本大震災と地域青年の記録～』第3号編集委員会

生きる ～東日本大震災と地域青年の記録～ 第3号

はじめに

『生きる～東日本大震災と地域青年の記録～』第３号をお届けします。

私たちはこの間、第１号（2012 年３月）、第２号（2013 年３月）を発行してきました。『生きる～東日本大震災と地域青年の記録～』は、2011 年３月 11 日に発生した地震・津波・原子力発電所事故とその後を、青年たちが各地域でどのように生きぬいているか、その事実を記録として残すことを目的としています。

第３号の発行にあたっても、このことを基本的な視座とし、特に、地域（被災地域含む）での学習や実践の記録に力点を置いて編集しました。そして、編集委員会では手記や原稿の募集に際し、次のように呼びかけました。

私たちは、あの３．１１から間もなく３年をむかえようとしています。未曾有の大震災での被害にお見舞い申し上げるとともに、癒えぬ苦しみや悲しみをこらえ、復興に向けて力を尽くしている仲間たちや先輩をはじめ多くの皆様に、改めて心から敬意を表します。私たちは現在、「生きる第３号」の発刊をめざして動き始めています。この間、地域の青年たちは第１号、第２号に寄せられた手記を元にした語り合いを少しずつ広めていきました。第３号ではこれまで同様に３．１１後、各地域で青年たちがどのように生き抜いているか、その事実を記録として残すことを目的に、震災から３年をむかえる中で、地域や青年たちの暮らしの現状と課題を浮き彫りにしていきます。私たちの暮らしや地域を見つめ直すきっかけにつなげていきたいと思います。それは、被災地域に暮らし明日の地域を担う私たちだからこそ、取り組まなければならないことだと確信します。（原稿募集のチラシより）

今号の構成は次のようになっています。

第１章「暮らす」では、震災から３年が経過した今の地域や青年たちの暮らしの現状を伝える記録を掲載しました。

第２章「学ぶ・伝える・つながる」では、地域青年団がこの一年間に取り組んできた復興支援活動や学習活動の実践の一部を紹介し、地域をこえた青年たちの相互交流を記録しました。日本青年団協議会（日青協）と加盟道府県青年団役員によるフィールドワーク（福島県いわき市訪問、福島県連合青年会の協力）の様子や参加者の感想も収録しました。

第３章「広がる・広げる」では、青年や地域青年団への意見や提言、応援メッセージを、異なる立場の方からいろいろな形でお寄せいただきました。また 2013 年 12 月に日青協が実施した中国青年代表団による宮城県石巻市他の訪問の記録とその時の感想も収めました。

今号の編集・発行の作業にかかわる中で強く感じたことは次のようなことでした。

一つは、時間の経過とともに一人ひとりの立場や状況が個別化・多様化し、ひとくくりには見ることができないという、あたりまえのことです。記録の意義は、そうした様々な声を拾いあげること、多様な声を受けとめることにあると考えます。異なる立場や見解も排除せず、それを交し合うことを土台にしながら、孤立や分断に抗っていきたいと感じました。

二つに、今も続いている震災――具体的には東京電力福島第一原子力発電所事故とその放

射能汚染に伴う災害と避難の継続――から目を離さずにいることの大事さです。その事実が持つ意味を考え、各自の置かれた状況の中に生かしていくこと、これは言うは易く行うは難しです。とりわけ、原子力発電所および放射性廃棄物処理の問題をめぐっては、関連施設立地地域だけでなく周辺地域、そしてそこで生み出される電力の消費地においても、差し迫った問いを私たちに突きつけています。

三つに、復興や創造への歩みを共有するいとなみが持つ学習としての意味です。復興がなぜ進まないのか、前に進みたいのに進めないのはなぜなのか、何かそれを妨げているのか、それを共に考えることは、私たちが生きている社会を知る貴重な手がかりになるように思われます。その真っ只中で、模索し、迷い、新手の問題と立ち向かい、試行錯誤する過程を、できることならそこにある希望と一緒に分かち持つ機会を与えてもらえたらと考えます。それを受けとめ、そこから想像し、考える力量が読み手の側に求められるとも言えましょう。

『生きる』１、２号とあわせて３号も、じわじわと読み継がれてゆくことを予感させるものになりました。体験の継承や語り部活動が求められ広がるなか、これらの記録は今後さらに活かされるものになってゆくのではないかと思います。

震災から３年が経ち、状況そのものが変わってゆく中で、今号に限らずこれまで１、２号に手記を寄せていただいた方々、または団体を取り巻く環境も変わっていきます。だからこそ、私たちは改めて震災の記憶を失うことなく、私たちの暮らしや地域、そしてこれからの日本の姿を見つめ、一人ひとり考えていくことを大切にしていきたいと思います。

2014年３月

『生きる～東日本大震災と地域青年の記録～』第３号編集委員会

＜付記＞

・手記は各章ごとに執筆者名五十音順に並べた。

・編集作業においては、誤字・脱字の修正、漢字と平仮名との変換、必要と思われる改行などを行った。

・各手記の作成経緯を各々の手記の冒頭または末尾に記した。特に付記のないものは、編集委員会からの呼びかけや依頼に応えて寄せていただいた記録である。

・文体等は各手記ごとに統一することとした。

・『生きる』1号（2012年3月）、2号（2013年3月）とあわせてお読みいいただければ幸いである。

― 目　次 ―

■はじめに

■目次

■東日本大震災に関する青年団関係の動き
―2013 年３月 12 日～2014 年３月 11 日―　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　6

■第１章　暮らす

・町がかわっていく　・・・・・・・・・・・・・・・・泉田　将治（岩手県陸前高田市）　10
・震災復興に伴う企業再編の動き　・・・・・・・・・岩崎　大輔（宮城県登米市）　12
・故郷・陸前高田に戻って・・・・・・・・・・・・・岡本　翔馬（岩手県陸前高田市）　17

・それぞれの震災―３年経って―・・・・・・・・・齋藤　緑（宮城県山元町）　40
・今、複雑化する地域の思い・・・・・・・・・・・佐久間祥平（宮城県角田市）　42

・未来の陸前高田を考える・・・・・・・・・・・・松田恵美子（岩手県陸前高田市）　60
・青年団の一人として・・・・・・・・・・・・・・山田絵美子（福井県鯖江市）　65
・私の「生きる」・・・・・・・・・・・・・・・・・湯浅　直樹（群馬県高崎市）　67

■第２章　まなぶ・つたえる・つながる

・「あいちから」活動報告・・・・・・・・・・・・「あいちから」実行委員会　80
・青森県の支援や避難者受け入れ・・・・・・・・工藤晶信（青森県青森市）　84

・山形県と東日本大震災・・・・・・・・・・・・・小関新太郎（山形県山形市）　85
・それぞれが何をすべきか考えていく・・・・・・齋藤　和彦（秋田県大仙市）　87
・いわて復興スタディツアー・・・・・・・・・・静岡県青年団連絡協議会　88
・自主制作映画「Message」の取り組み・・・・・　3.loveline 岡山→東日本実行委員会　92

・忘れてはいけないあの日のこと・・・・・・・・・田村　芳克　99
（北海道夕張郡長沼町）

・県団旅行 in 宮城・・・・・・・・・・・・・・・福井県連合青年団　101
・私のまわりの支援活動・・・・・・・・・・・・・細川　由貴　103
（山形県西置賜郡飯豊町）
・北海道・東北ブロック研修会・・・・・・・・・・北海道・東北青年団連絡協議会　104
・「福島で学ぶフィールドワーク」の記録　108
大震災直後の福島県に派遣されて・・・・・・・・石井　昌志（石川県羽咋市）　109

頑張る人の笑顔あふれる～浜風商店街の訪問～　114
参加者から寄せられた感想　115

テレビだけでは分からなかったこと　・・・・・・・・松田　恵美子（岩手県）
我々はもう歩みはじめている　・・・・佐久間　祥平・武藤　順子（宮城県）

もっと早く行けばよかった　・・・・・・・・・・・・天笠　荘一（群馬県）
大切なのはこれから　・・　・・・・・・・・・・・宮　義一（石川県）
「キッカケ」つくり発信し　・・・・・・・・・・片桐　充弘（岐阜県）
あらためて地震の備えを　・・・・・・・・・・・・朝原　桂子（静岡県）
逆にこちらが元気をもらっ　・・・・・・・・・・・神谷　幸典（愛知県）
つながる想い　・・・・・　・・・・・・・・・・・藤原　麻美（滋賀県）
押しつぶされるかと思った　・・・・・・・・・・中早　洋行（和歌山県）
あの時感じたことは絶対に忘れない　・・・・・・・・・中村　美香（鳥取県）
自然の力の脅威　・・・・・・・・・・・・渡邊　誠・青井　麻由美（岡山県）
精一杯、生きていく　・・・・・・・・・・・・・・・・・十河　由人（香川県）
参加者が主体者となる活動を　・・・・・・・・・・・・大﨑　博士（高知県）
寒い海辺と温かいコーヒー　・・・・・・・・・・・・梅川　美沙乃（長崎県）
人はそんなに弱くない　・・・・・・・・・・・・・・・阿南　貴詞（大分県）
なんでもっと早く行かなかったのか　・・・・・・・・・松田　裕明（宮崎県）

地域でも伝え続けていく　・・・・・　桐野貴行・山下真奈美（鹿児島県）

福島でもらった「お土産」　・・・・・・・・・・・・照喜名　朝尚（沖縄県）
・私たちの誓い　128

■第３章　広がる・広げる—今後に向けて

・青年が地域を元気にする・・・・・・・・・・・・池上　洋通（東京都国野市）　130

・震災に学ぶ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・澤田　康文　143
（北海道夕張郡栗山町）
・中国青年との学習交流　145
・「生きる」そして生きていく・・・・・・・・・・山中ちあき（北海道遠軽町）　149

■あとがき

東日本大震災に関する青年団関係の動き
―２０１３年3月１２日～２０１４年3月１１日―

２０１３年

３月３１日　青森県東北町青年協議会が集めた救援物資と支度金を宮城県南三陸町に届けた。

４月１７日　東京都三宅島近海でＭ６・震度５強の地震発生

４月１７日　宮城県などでＭ５・震度５弱の地震発生

５月　３日　１月の静岡県青研に参加した静岡県清水青年団連絡協議会の有志が、岩手県陸前高田市を視察。

５月１８日　福島県などでＭ６・震度５強の地震発生

５月２６日　宮城県青年団連絡協議会が県青年文化祭を開催。

６月　８日　「おおいた青年交流祭」実行委員会と臼杵市「気仙沼復興支援」実行委員会が共催で第２回災害に負けない地域づくり「知活フォーラム」を開催。

６月１５日　北海道青年団体協議会が北海道青年祭交歓会の飲料として、被災地（青森県）の飲料を購入し使用した。

６月２９日　北海道・東北青年団連絡協議会が福島県で「平成25年度　北東ブロック研修会」を開催。「生きる～東日本大震災と地域青年の記録～第２号」の合評会と原発を考えるシンポジウムを実施。

７月１９日　石川県団の役員４名がスタディツアーを実施し、岩手県陸前高田市、宮城県石巻市内などを視察。

８月　４日　宮城県などでＭ６・震度５強の地震発生

８月３０日　宮城県青年団連絡協議会が法政大学の学生５名を受け入れ、石巻地区を視察。

９月１３日　福井県連合青年団が宮城県山元町を視察。その後地域で展示会を実施。

９月２０日　福島県などでＭ５・震度５強の地震発生

１０月１２日　岡山県「3.loveline（スリーラブライン）岡山→東日本実行委員会」が座談会を開き３月11日に向けた企画会議を実施。

１０月１１日　静岡県青年団連絡協議会が「いわて復興スタディツアー」を岩手県陸前高田市で実施。陸前高田市青年団体協議会主催の「第57回青年芸能祭」を鑑賞した。

１０月１３日　岩手県陸前高田市青年団体協議会が「第57回青年芸能祭」を開催。
宮城県黒川郡連合青年団合唱部が合唱、岩切青年団が神楽を披露。

１０月１９日　日青協が第２回理事会を福島県内で開催。それにあわせ、「福島で学ぶフィールドワーク」を福島県いわき市内で実施。

１１月　８日　第62回全国青年大会に被災地から多くのチームや個人が参加。

１１月１０日　茨城県などでＭ５・震度５弱の地震発生

１２月　７日　日青協が実施した中国青年代表団受入事業で宮城県を訪問し、石巻市内などを視察。

１２月３１日　茨城県などでＭ５・震度５弱の地震発生

２０１４年

１月１７日　岡山県「3.loveline（スリーラブライン）岡山→東日本実行委員会」が自主制作映画のため岩手県陸前高田市を訪問し収録を実施。

１月２５日　宮崎県高原町青年団が新燃岳の火山灰販売益金を宮城県団に贈呈。

２月　９日　香川県連合青年会が神戸で防災研修を実施。

２月２０日　東京都大田区の生き方・働き方講座で日青協の田中潮事務局長が「地域に仕事を生み出す～震災から立ち上がる人たち～」と題して講演。

３月　８日　沖縄県南部地区青年団連絡協議会が岩手県陸前高田市を訪問。「桜ライン311」に寄付金と手づくりのシーサーを手渡した。

３月　９日　沖縄県の沖縄市園田青年会と胡園青年会が北谷町内で東日本大震災を支援するエイサー演舞を披露。

３月１１日　岡山県「3.loveline（スリーラブライン）岡山→東日本実行委員会」が自主制作映画「Message」の上映会を開催。

第1章　暮らす

町がかわっていく

岩手県陸前高田市・泉田　将治

だんだんとおぼろげになってきていますが、今でも震災翌日早朝に見た光景を思い出すことがあります。街中に立つと震災以前の光景を思い出すことがあります。何もなくなってしまったわけではなく、微かに残る土台の跡や手向けられた花束を見るたびに、心が切なくなる時もあります。

陸前高田市の復興の現状をお話いたします。つい先日（2014年２月１日時点）陸前高田市で出ました震災瓦礫の東京都での焼却分およそ 90 万トンの搬出が終了したとニュースになりました。しかし、全ての瓦礫処理が終了したわけではなく、現在でも処理は続いています。仮置き場からの撤去は終わっていますが、土砂の分別処理が続いています。平成25年度内での処理終了を目標としていますが、年度内での終了が難しくなってきています。並行して、高台移転用の土地造成も進んでいますが、用地の確保に時間がかかっています。いくら復興予算が配られても、用途が限定されていたり、執行する人員が不足しているために使いこなせていないようです。

復旧・復興作業に従事する人も不足しています。大手と呼ばれている企業も入っていますが、有資格者（管理職・オペレーター等）が不足しています。これから2020年の東京オリンピックが決定したことにより、大手の企業や作業員もそちらに取られるのでは、という懸念も出てきています。

高台移転用地の整備も進んできていますが、災害公営住宅の入居希望が予定よりも少なくなってきているようです。完成するまで待てない、高くても自分で土地を見つける、そのために市外や県外に出て行く人たちが増えてきているようです。

仮設住宅の使用期限は当初２年となっていましたが、１年延長になりました。しかし使用期限が延長になっても、住宅の耐用年数は考慮されていません。緊急に建設しなければならなかったために、しっかりと基礎をコンクリートで建設した仮設住宅は市内で２ヶ所しかなく、それ以外の仮設住宅の基礎は木の杭でした。その上に鉄骨をのせて建設したために、腐って落ちてしまうと１棟全てを作り直す必要があります。未だに災害公営住宅の基礎すら完成していない中で、来年度からは、公共施設に建てられている仮設住宅から撤去する方針らしいです。

震災後、出て行く人たちも多いですが、帰ってくる人・新しく住む人も増えました。岩手県の被災地の中でも陸前高田市は被害の大きさもありましたが、市長のメディアへの露出が多いおかげで有名になりました。他の街から陸前高田の再生のために入ってきたり、離れた場所からでも支援の行動をおこしてくれている人たちが多いことに感謝しています。特に若い人たちが任意団体を立ち上げたり、祭りを企画・実行している姿を見ていると、この街に住み続けている人たちよりも行動力があることに驚かされます。それとともに、本当の地元の若い世代が何もしていないのではないかとも見受けられます。大学や就職で街を一度でも離れると、考え方や行動力も違ってくるものなのかと考えてしまいます。

一方では、帰ってきたくても就職先が少ないことが難点のようです。現状では復興に伴う作業員の求人は多いですが、それ以外の求人は少ないです。被災した企業の多くが再建を断念したり、再建しても規模が縮小しています。被災以前の職業から替わらざるを得ない人も多く見受けられます。そのような現状ですので、若い人たちが安心して帰ってこられるような町をつくることも重要な課題になってきています。

被災地でも震災関連の情報は少なくなってきて、復興関連のニュースが多くなってきています。しかし毎月 11 日近くになると身元不明者の情報や捜索の記事が掲載されます。未だに多くの人が帰ってこられていない状況は、被災地以外の地域に住んでいる人には理解しがたい状況なのかもしれません。

私は復興関連の仕事を続けていますが、いつ終わるかも見当がつかない程膨大な量の瓦礫を処理しています。震災翌日の光景を見て途方に暮れるほどでしたが、処理が進むにつれてどんどん更地になっていく街並みを見慣れてしまっている自分がいます。慌ただしく過ぎてきた３年間でしたが、様々な人たちに被災地を訪れていただきました。案内をしながら当時のことに想いを馳せていますが、後悔ばかりが目立ってしまいます。過ぎた時間は戻って来ませんが、現状出来ることを精一杯していくことが大事なのだと自分に言い聞かせて生活しています。「現実は小説や映画よりも残酷で無慈悲である」そんなことを実感する今日この頃です。

座談会で発言する泉田さん

泉田　将治　（いずみだ・まさはる）
岩手県陸前高田市在住　職業：運送業
1975 年生まれ　岩手県陸前高田市出身
岩手県青年団体協議会会長

これは、座談会（2014 年２月１日）の報告（テープ起し）を元に本人によって文章化された記録である。

震災復興に伴う企業再編の動き

～防潮堤建設に伴う造船所移転・集約化～

宮城県登米市・岩崎　大輔

（１）震災から徐々に再建し始めた企業ですが・・・

私は宮城県石巻市内の企業（造船所）に勤務しています。震災による弊社の被害は甚大で、生産設備がほぼ全滅状態になりました。一時は企業倒産も懸念しましたが公的支援での会社再建が決定。それに伴い賃金カットを含む労働条件の切り下げや希望退職の実施など合理化も経験しましたが、ようやく新造船建造や修繕事業の再開など、徐々に震災前の操業を取り戻すようになってきました。

しかし、一度引き下げられた労働条件を回復させることは容易なことではありません。復興まで一時的に会社側に預けている労働条件との認識に立ち、震災前の業績に早期回復するなら問題ないと思われそうですが、自宅や家族を失った者、未だに仮設住宅から通勤している従業員も数多い中、その仲間たちからは「生活再建にはお金も必要である。働きなれた職場で働きたいが生活が苦しいと正直、転職も考える」といった声も聞こえます。

事実、震災復興に伴う建設業・建築業関連の求人が増加しており、それに伴い関連業種の平均賃金や高校生の新卒内定率も年々増加傾向であります。

しかし、ようやく企業再建に動き出した地元基幹産業である水産加工業等は厳しい経営状況であり、操業度も完全に復旧していない状況下では、従業員を雇いたくても賃金を上げることは難しく、要員の確保が困難な状況であります。

そういった理由もあり、私の職場でも合理化で 54 名の人員整理を行なった後も 15 名が職場を去りました。退職者の多くが「生活（再建）のため、今の給料では厳しい」ことを理由に掲げ、少しでも条件の良い（賃金面含む）業種へ転職を選択している・選択せざる得ない現実であります。

しかし、どんなに人員が減っても、厳しい経営状況では補充も行なわれません。補充しようにも抑えられた労働条件では希望者を募ることも難しいのです。

個人個人への労働密度や責任感だけが増加するものの、先の見えない地域の復興状況や企業の経営状況の先行き、そして震災前と大きく変わった生活環境や、引き下げられた労働条件の中で中々上がらない、働くことに対するモチベーション・・個人個人が感じる様子は確かに違いますが、私自身が今、この環境で感じている現実であります。

その状況下で私が取り組んでいる、石巻市の造船業社が直面している問題を紹介したいと思います。

（２）復興計画に伴う企業問題（石巻の事例紹介）

東日本大震災で石巻地域の造船業社は甚大な被害を受けました。多くの企業が再建を決定して事業再開に向けて動き出した時、石巻市内の北上川河口流域の防潮堤建設計画によって、複数の企業が移転を強いられるという噂が聞こえてきました。その状況下、地方紙に突如「造船所移転集約構想浮上・防潮堤建設に伴う移転問題」といった

内容が掲載されました。内容を整理すると、

防潮堤建設で北上川流域造船所４社の業務が出来なくなる可能性がある。

移転の場合、多額の移転費用と設備新設費用が必要になる。

公的助成を含む資金の工面が必要。国などへ要請を行う計画である。

震災以降、多くの企業が自己・公的補助を受けながらようやく企業再建を進めて来た中、突如発生した問題に対し、働く仲間たちはみな驚きました。企業自体は存続の意思はあるものの、移転費用が莫大な場合、最悪廃業もあり得ます。特に海に面した造船所が海との窓口を失うことは正に死活問題であります。

私の勤務する企業ではありませんが、造船というのは様々な関連職種が多く、一企業の存続問題だけでなく、地域の中の雇用問題にも直結する問題です。

また、水産業とも密接な関係もあり、漁船の修繕等が行なえない地域では水産業は衰退します。新しい石巻魚市場も 2015 年度には再開する見込みとなり、本格的な水産業の復興のためにも、地域の中の同業者の共通問題として捉えて、仲間たちとともに防潮堤計画を見直して防潮堤を回避して欲しいといった内容や、移転が生じる場合には費用負担や代替地確保など支援策が必要である事を、関係機関へ働きかけを進めて参りました。その結果、企業は国が進める「造船業等復興支援事業費補助金制度」を活用して企業の集約化を行い、代替地を確保して移転計画を進めるという方向性が見えてきました。

この「造船業等復興支援事業費補助金制度」とは、震災で被災した造船関連事業者などが事業形態を集約化・協業化することに対して助成を行なう制度で、現在のところ気仙沼市内の造船事業者等がこの制度を活用して協同組合を設立して事業再建に向けて動き出しております。しかし、この制度にも補助金額に上限があるため、移転費用が莫大になった場合には企業負担も増大します。そのため、市としても新たな助成制度を設立するなどの動きがあります。

今後、移転先となる代替地の確保と移転費用の捻出、更に期限内までの完全移転に伴う企業の休業期間の発生も懸念されたり、この問題はまだまだ長期化する様子が伺えます。しかし、この問題は震災に伴う復興計画から発生しているという点を理解して頂きたいと思います。こういう震災問題もあることを理解して頂きたいと思います。

岩崎　大輔　（いわさき・だいすけ）
宮城県登米市在住　職業：会社員
1975 年生まれ
宮城県登米郡豊里町（現登米市）出身
宮城県青年団連絡協議会参与
全日本造船機械労働組合ヤマニシ分会書記長

資料

造船所移転集約構想浮上　旧北上川河口で
堤防計画４社と関係機関が対応検討

2012.8/7　石巻かほく

東日本大震災の復興策として河川堤防の建設が計画されている石巻市の旧北上川河口域で、造船所の移転集約構想が浮上している。堤防が完成すると船揚げや進水が事実上できず、現地での業務継続が困難になるためだ。漁船の石巻港誘致にも影響する問題だけに、直接関係する造船４社だけでなく、国土交通省北上川下流河川事務所、調整に当たる石巻市、石巻商工会議所は、それぞれ造船所の移転、集約を視野に入れた対応を検討している。

【造船所】河口周辺には４造船所があり、築堤によって業務を継続できなくなる会社も出てくる。このうち最も規模の大きいＡ造船所は、津波で４基の船台全てと大型クレーン、船舶を陸揚げするウインチ、電気関係設備などが甚大な被害を受けたが、全国の造船関係者や顧客らの支援を受け、昨年７月に 99 トンのタンカーが上架するまでにこぎ着けた。経営側は「堤防ができると船舶の揚げ降ろしができなくなり、仕事を続けるのは不可能」と指摘。費用については「移転する場合は設備は大半が新設になるだろう。費用も多額であり、公的な助成を含めて資金の工面が課題になる」と話している。

【河川事務所】旧北上川河口域は藩制時代から無堤状態だったが、震災を契機にようやく堤防建設の動きが具体化。国土交通省北上川下流工事事務所は、河口から上流１・５キロまでを高さ７・２メートル、内海橋までを４・５メートル、それより上流を４・１メートルとする計画を固めた（いずれも両岸）。

河川事務所長は「４社と協議している。どうしても移転が難しければ、船舶を揚げ降ろしする部分に水門を建設する方法もある。さまざまな角度から解決策を見いだし、治水、利水、環境に配慮しながら堤防の建設を進めていきたい」と理解を求めている。

【石巻商工会議所】石巻商工会議所も善後策を練る。効率的に対応するには造船所の集約と移転が必要だ。問題は用地と費用。造船は設備産業で広い敷地を要する。費用も膨大になると語る。用地については「漁業との関係で石巻漁港に近い場所が望ましいという意見もある。石巻工業港周辺を含めて探している」と状況を説明。費用に関しては「漁船建造が大幅に減っている中で津波に見舞われ、経営的に盤石な企業は少ない。公的な支援制度を時限立法で設けるなど新たな対策が必要」と指摘する。移転集約を実施した場合の費用算出は関係機関に依頼し、８月中にまとまる見通しという。

【石巻市】石巻市は産業支援の面から、財団などの各種団体に造船所移転の際の資金援助などを呼び掛けている。移転対象は旧北上川沿いの４社と半島部４社の計８社を見込んでいる。市産業推進課は「総額数十億円の支援枠を持つ財団もあるが、足りるかどうか」と頭を痛める。気仙沼市の業界が構想した造船専用工業団地のケースでは 100 億～200 億円の事業費が見込まれてい

るからだ。国の補助を得ても、業者側の負担は数十億円規模になると予測するが、それでも「水揚げする港の近くに造船所があれば、そこで漁船の補修などもできる。造船所は漁船を呼び込む力になる」として支援を継続する方針だ。

中小造船所再建へ　　石巻市移転補助制度創設　来年度施行　水産業復興をサポート

2013.12/6　石巻かほく

石巻市は、東日本大震災の影響で移転を余儀なくされる中小造船所の再建を支援する方針を決めた。移転事業費を助成する補助制度を創設し、来年度に施行する。すそ野の広い造船業の再建を後押しし、水産都市・石巻を支える造船関連産業の再生を図る。

石巻市によると、市内には14の中小造船所があるが、旧市内は津波防御の築堤工事に伴い移転が必要なほか、半島部は地盤沈下で現地再建ができない状況にある。造船所の移転に関する支援制度がないことから、市は昨年、国に助成制度をつくるよう要望活動を展開し、移転事業費の３分の２を補助する造船業等復興支援事業費補助金の制度が本年度に創設された。

しかし、３分の１は自己負担。水産業の復興を目的につくられた国の水産加工業再生支援事業は事業費の８分の７と補助率が高いのに比べ、被災した造船事業者には依然として重い負担がのしかかる。

市は造船業の再建は水産業の復興に結びつくと判断し、３分の１の自己負担分を水産加工業再生支援事業の補助率並みに支援する「かさ上げ補助」制度を導入することに決めた。市独自の補助制度は、国の助成制度の要件に該当し、対象は組合、合同出資会社などのグループとなる。今後、補助率を精査し、制度設計を進める。

中小造船所の移転問題は沿岸漁業や養殖業にも大きな影響を及ぼす。市は「造船業イコール水産業という認識で、中小造船所の再建をサポートしていく」と話している。

造船４社集約・移転へ　　堤防整備で業務に影響　石巻

2014.1/21　河北新報

東日本大震災で旧北上川河口部に整備される堤防で業務に影響が出る宮城県石巻市の造船会社４社が、移転する方針を固めた。集約化を条件とする国土交通省の補助金などを活用し２社ずつのグループで再建を目指す。

国は2015年度までに、河口部に最大で高さ７．２メートルの堤防を建設する。造船所各社は築堤で船揚げなどの作業が難しくなるため、移転を迫られている。市などによると、４社は当初、１カ所に集約する方向で協議していた。事業内容が異なることから昨年12月に２グループに分かれ、それぞれ候補地を選定する方針で一致。現在、用地確保の準備を進めている。用地費を除き、80億円を上限に最大３分の２が補助される国の造船業等復興支援事業費補助金を活用する。移転時期は未定だが、16年度までに造船施設を完成させることが要件。残る事業費の一部は、市が新年度に中小造船所の再建支援で創設する助成制度の適用も想定している。市内の造船業は漁船の修理も手掛けるなど、基幹産業の水産業を支え

る重要な役割を担っている。新たな石巻魚市場は15年度に完成する見通しで、石巻商工会議所や市は移転に向けた調整を急いでいた。石巻商議所業務課は「造船業界は裾野が広く、水産業への影響が特に大きい。漁船の誘致には造船会社の早期再建が欠かせない」と強調した。

気仙沼・朝日町に造船団地　国事業活用、１６年操業

2014.1/28　河北新報

宮城県気仙沼市と気仙沼造船団地協同組合は、市内に計画している造船団地を同市朝日町に整備する方針を固め、27日に市役所であった会合で漁業者や水産加工業者などに示した。2016年１１月の操業を目指している。

市が国の津波復興拠点整備事業を活用して造成する４．１ヘクタールの敷地に、組合が国の補助金を使って造船施設を建設する。リフトを使って船を防潮堤内に引き入れる「シップリフト方式」を導入するなど、津波対応型の造船施設を目指す。施設建設に合わせて、市内の複数の造船会社が15年に新会社を設立し、共同で資材購入したり建造船を受注したりする仕組みも整える。市内の水産加工業者から出ている環境悪化などの懸念に関しては、「最新の設備で粉じんや排水処理を行うなど、環境マネジメントを徹底する」と強調した。

東日本大震災では、地盤沈下により造船会社が点在する同市浪板地区で海岸線が約10メートル後退。作業エリアが減少するなどの影響が出ていることなどから、昨年４月に組合を設立し、新たな団地造成を検討していた。造船団地の隣接地には、津波で流失した漁業用燃油施設を再建する。市が容量7000キロリットルの貯蔵タンク８基を建設し民間に管理を委託する。市は造船団地と燃油施設の用地測量などを行うための復興交付金を28日に国に申請する。

故郷・陸前高田に戻って
岩手県陸前高田市・岡本 翔馬

岩手県陸前高田市青年団体連絡協議会が震災から約半年後に立ち上げた「桜ライン 311」。初代代表の橋詰琢見さんから引き継いで新代表となったのが岡本翔馬さんである。岡本さんは東京で暮らしていたが震災後、支援活動へのかかわりを機に陸前高田に戻った。現在の思いを、そこに至るまでの足跡とあわせてお話しいただいた。(2013 年 10 月、陸前高田大隅つどいの丘商店街「桜ライン 311」事務所にて、きき手・まとめ：辻智子)

■出身地・陸前高田

――陸前高田のご出身ですよね？

そうです。僕は陸前高田市の高田町川原地区という高田高校のあった地区の出身です。山沿いの小学校に上ってゆく途中に実家がありました。ちょうど高田高校と浄土寺の真ん中くらいの 150～200 世帯の地区です。

――高田にはいつまで？

地元の高校を卒業して仙台の大学に進学しました。そして大学卒業後に就職で東京へ。

――高校を出る時、高田にはもう戻ってこないと思っていた？

いや、高校卒業時はそういう意識はなかったですね。大学は仙台だったので比較的帰ってきやすかったですし。150 キロしかありませんので。

――大学では何を？

経済です。マーケティングや流通を専門にしていました。卒業して就職っていう時に、やっぱり高田に戻る／戻らないっていうのは一瞬だけ考えました。一瞬、考えて、すぐ辞めましたけど。僕、デザインが好きで、それを仕事にしたかったので、東京へ。デザインっていう仕事の集積地は、やっぱり東京が基本なんです。

――その頃、陸前高田という町についてはどんな印象でした？

好きか／嫌いかで言えば、やっぱり好きでしたね。うん、もちろん、好きでした。でも、高校くらいまでの時は、正直、好きも嫌いもわかってなかった。

――地元の同級生も皆、高校卒業時に町を出た？

僕らの学年で言うと３割残らないですね、地元に。高校卒業時点で地元に残るって決めてるのは２割切るくらいですね。こっち(高田)に大学はありませんし。僕自身、仙台で初めて地元を離れた生活を経験して、陸前高田がどういう性格を持っているところなのかを意識しました。もちろんいいところもあるし、仙台の方がいいところもあったりするわけです。都市の持っているよさだったり、ダメなところだったり、逆に地域が持っているよさやダメなところを初めて対比できるようになりました。陸前高田のことが好きか嫌いかといえば好きですが、生きて行けるか行けないかで言えば、僕にとっては生きて行けないっていうのが大学卒業時点での僕の判断だったんですよね。

■東京で

――東京には何年くらい？

８年近くです。とにかく楽しかった。デザインをやる人間にしてみれば、あんなに刺激的な町はないです。毎週どこかでデザ

イン系のイベントや美術展もありますし、ワークショップもたくさんやっていて、良くも悪くも刺激的な町ですね。嫌いか好きかで言ったら、僕は好きです、その部分だけは。でも、それ以外のところは、とてもじゃないけどお薦めしません。正直言って、東京で子どもを育てたいとか全然思わない。生きるって意味で考えた時、その人の満足感や自己の目的達成度みたいなところで考えると、東京は、自己達成度的なところは比較的満たしやすい。享楽的に何か好きなことをやるとか、それを仕事につなげていくとか、同時多発的にいろいろなことが起きていて多様性が受け入れられる地域という特徴があるので、そういったところはすごくいい。でも、リアルな住環境、実環境的な、純粋に人間が生態として生きる、生き物として生きるっていうのを考えると、ちょっとねぇって感じ。田舎って言うか、陸前高田に 18 年間くらい生きていたわけですから、それを考えると、「ああ、高田、いいところだな」っていうのは、都市部に行けば行くだけ、住環境の部分については、高田はいいところっていうのはありましたよね。

――2011 年３月 11 日の地震の時は仕事中？

はい、建築の職場にいました。ただ、実は、僕は震災の４ヶ月前くらいから転職活動をしていて、その採用の内定をいただいた日だったんです。地震の時は千代田区のビルの６階にいました。揺れましたね。免震のビルだったので、すっごい、ぐにゃん、ぐにゃんに揺れました。

――地震の後は？

２時間半くらい歩いて家に帰りました。勤務先の会社は全国に店舗があったのでお客さんのところの被害の確認のために災害対策室が自動的に立ち上がるしくみになっていました。そこで津波の映像が流れて「帰れるやつは帰れ」となった。僕は熱帯魚と猫を飼っていたので、会社に泊まるって選択肢はありませんでした。登山が趣味で、その頃、毎週、山に登っていたので体力はすごくあったからすぐ歩いて帰りました。家では食器がいくつか割れていたのとテレビがバーンと倒れてガラステーブルが粉々になっていました。

――陸前高田のご家族とは？

もちろん連絡つかなくて。東京はインターネットが使えていたけど、こっち（高田）が全部停電しているとか、あの時は全然わかりませんでしたから。ただ、東北全体と連絡がつかないっていうのはわかっていた。だから、東京にいる陸前高田出身の同級生や、僕らに近い世代でつながっているやつが何人もいるので、誰か、何か、知らないかな？って、お互いに連絡を取り始めたのが最初です。結局、誰も情報を持っていないのが分かって、埒があかないねえって。じゃどこかで一回集まろうとなった。いろんなところで線でつながってても仕方ないので、皆で集まって情報を共有したり、今後どういうふうに対応していこうか話してみようとなった。その時に集まったメンバーが、その後、SAVE TAKATA っていう団体を立ち上げました。最初に集まった時は 10 人くらいでした。そのうちメディアでも何か流れてくるでしょうし、一週間もすればある程度の情報は把握できるんじゃないかって言ってたんですけど、家族や友人や知人がこっち（高田）にいるわけですから、一

週間も待てるかっていうと、ちょっとそれもまたすごいきついなっていうのがありました。

――翌朝（３月 12 日）、テレビで陸前高田の映像が流れていました。

僕が高田の映像を見たのはもっと後。気仙沼と釜石と仙台空港付近の映像はよく見た記憶があるんですけど、高田の映像はほとんど見なかった。でも、釜石や気仙沼の光景を見て高田も似たような状況だろうなというのは想像がつきました。とはいえ、実家が結構山の近く、山のちょっと手前なので、一階は浸水しているかもしれないけど、上階は大丈夫かなと、今から思えばおかしなことを考えていた。

■SAVE　TAKATA のスタート

とにかく高田がどうなっているのか把握したいっていうのがあったので、そのまま待っているより自分たちで情報を取りに行こうと考えました。実際取りに行けるか具体的に考えようと。ただ東北新幹線が駄目、もちろん飛行機もアウト、高速道路も駄目、福島では原発が水素爆発していて行ったら帰ってこれないかもしれないとか、そもそも行けるかどうかも分からないとか、二次災害にならないかとか、自己責任で行かなきゃとか、そういうことを考えたら、まず、行けるっていうことをちゃんと確認することから始めなきゃいけないってことになって、いろいろ情報を集めていった。

僕らが確認できた情報を、最初は仲間内でシェアしようって言ってたんですけど、他の人と共有できるようにしようっていうことで、その時にいたメンバーの一人が、「ホームページをつくればいいじゃん、そしたらいろんな人に、必要としている人に届けられる」って、「じゃ、やろう」っていう感じになりました。

――それが 12 日。

立ち上げが決まったのが 12 日の夜です。その夜、集まって何かやろうっていう雰囲気になって、そこからがスタートですね。その後、僕は、その日の翌日に東京を出発しました。

■東京から陸前高田へ

――どうやって？

その時、車を所有していたので、道さえ続いていれば行けるって。登山でテント泊や車中泊はしょっちゅうやっていましたし、調理器具や山の道具をそのまま転用できるので、一人だったら 10 日間くらいは死なないだろう、寒くても行けるっていうのは分かっていた。最悪の場合、往復のガソリンだけ確保すれば行けそうだってわかって、それでこっち（高田）に入った。

――結局、どれくらいかかりました？

１日で来ました。16 時間くらいかな。途中で仮眠４時間くらい挟みましたけど。ただひたすら４号線を北上するルートで。一関からの 343 号線が通行止めっていうのをツイッターで見ていたので、奥州市の方から世田米（住田町）の方を抜けて高田に入るルート 357 号を使って。

――連絡をとったり情報を集めながら。

関東圏なら、どこかの市を抜ける頃に、ガソリンはどれくらい使ったとか、コンビニにどれくらい物があったっていうのを東京のメンバーに送って、東京がそれを「今の宇都宮の状況です」って形で情報発信しました。その時は福島の国見までは信号が

動いていて、国見から北が一切駄目でしたね。国見から北は完全に麻痺してて、コンビニに物もなかったし、売ってても生鮮食品じゃないもので、しかもそれはもう瞬間的に売り切れるので、ごくごく少し何か残ってるみたいな感じでした。煙草はいっぱい余ってたのでたくさん買いました。

――その時もまだご家族とは…

連絡とれてなかったですね。安否もわかってない中でこっち(高田)に向かっていました。

――生きた心地がしなかったでしょう。

そうですね、現実感なかったですね、今、考えれば。どうなっているかわからないし、意図的に考えたくなかったのかもしれないし、でも、あんまりそういところは考えていませんでしたね。水沢江刺を過ぎたあたりに、「あー、帰ってきた」って感じが出てきて、そこで初めて、どうなんだろう、ほんとにどうなんだろうって突き詰めて考えるようになっちゃった。そこまでは結構グレーな感じですね。

――早く行かなきゃっていう思いと、向き合うのが怖いような思いと。

そうです、そうです、それはやっぱりありましたね。

■震災直後の陸前高田

――初めに知りあいに会ったのは。

避難所です。市の仮の防災対策室が今の給食センターのところにあって避難者リストみたいなものが並んでいた。夜の８時半～９時頃に着いて家族や知人の名前を探したけど、どうやらなさそうだって分かった。夜だったので（内陸の陸前高田市）横田町にまで津波が来ていたって知らなかったですよ。川沿いに遡上したのが見えなかった。廻舘橋のところで初めてがれきを認識しました。竹駒でこの状況なら、うち(実家)ももう駄目かなって思いました。車で走っていると暗闇からヘッドライトに照らされてバッと出てくるんです、がれきが。今の栃ヶ沢ベースあたりに、流された家が３軒ドンって並んでいて、「あ、道、ない」って。それで鳴石の方に廻った。最初に会った知りあいは、実家の近所の僕の先輩のお父さんとお母さんと、同級生のお父さんとお母さんです。町の下の方(海の方)はあのような様子なので、夜も遅かったし、避難所に行くのもちょっと厳しいねということで、鳴石地区にある同級生の自宅に行ったんです。その同級生は盛岡にいて、家族への伝言「盛岡のおじさんちに来てね」っていうのを預かっていたので、「こんばんは。覚えてます？岡本です」って。

――いろいろな人の言伝や思いを持って入ったんですね。

ある程度状況が分かってきて、避難所のボランティアをやろうって高田一中(陸前高田市立高田第一中学校)の避難所ボランティアに10日間くらい入りました。避難所の運営のボランティア。避難所にいろんな情報が入ってくるので、それを東京に送って、それを東京でサイト更新してというようなことをしました。それからはもう、ほんとに、ありとあらゆる緊急支援っていうのをやりましたね。それこそ、明日の水は？明日のご飯どうする？っていう時だったので。

――みんな、必死だったでしょう。

僕の場合は幸いなことに、高田に入って２日目に家族と再会できた。「生きてた！生

きてた！」と。そういう意味では、他の言伝や他の確認したいことが確認できれば帰る／帰らないって話になるわけですけど、帰るのはちょっと無理だな、やれることがあるうちはこっちにいようって思った。といっても、会社に連絡しなきゃいけないなっていうのもありました。上司も僕が陸前高田出身っていうのを知っていたので、行く前に「これからちょっと被災地に入るので、死ぬことはないと思いますけど、２週間くらい、連絡がつかないかもしれません」って言いました。それに対して上司はもう特に何も言いませんでした。理解してくれたんだなと思っています。だから２週間の期限つきで入った感じです、とりあえずのところは。

■東京へ戻る

――それで一度、東京に戻った。

はい。仕事ももちろんありましたし。その時に高田に入ったのが僕含め３人、全員同級生です。他の２人も仕事がありますし、一回戻ろうということになって戻りました。今でも忘れないです、あの時の環七（環状七号線）の渋滞っぷりが。あの時の違和感はすごかった。それまで、僕、都内で車をしょっちゅう使っていたので、環八の渋滞とか、首都高の渋滞とか、ごくごく自然のものとして受け入れてたんですけど、こっち（高田）に２週間くらいいて東京に戻った、あの時の朝の普通のラッシュに、めちゃくちゃ違和感があった。スーパーには普通に食品もありますし、ガソリンも普通に入れられるし、それにも違和感。

――「うーん、何なんだ、これは」と。

「なんかすごいな、これ」って思った。あたりまえなんですけどね。530 キロ離れていて、東京も陸前高田も同じ状況だったら、もう日本は終わってるので。距離が離れてて、普通の生活と、そうじゃない場所があるって、当たり前のことなんですけど、こと自分の故郷が、明日の水がどうなっているかわからないっていう生活をしている時に、ごくごく普通の生活して動いているって、なんかこう、なんかこう、もやっ、もやっ、するなって。

――愕然としますよね。

でも、２週間ぶりくらいに入ったお風呂は気持ちよかった。それも覚えています。お風呂が気持ちよかったのと、なんか変な感じがするなっていうのと、それは覚えてますね、その直後は。

――その後は？

情報を扱うサイト運営をしていて、「現地の状況を調べて欲しい」「支援の必要なところがないか」と問い合わせの数がすごく多くて、いったん始めた以上、「すみません、もう調べられません」っていうのもおかしな話ですし、できるだけ高田には入りたいっていうのはあったので、やれる範囲で続けようということになって。

――問い合わせの内容が変化していくわけですね。

最初は安否確認です。震災から２週間くらいたって少し落ち着いてきて、この人を捜して欲しいっていうのは相変わらずありましたけど、岩手日報に避難者リストが載ったりしたので、それに載っていない人たちがどうなっているか調べて欲しいっていうのは継続的にありました。

高田とか被災地に支援したいんだけど何が必要なのかという問い合わせが多かった。

でも、それは一件一件、コーディネートしないと進まない案件で、それがすごく多い。平日の夜とか、仕事中も結構やりました。メールの対応だったりとか、サイトの更新だったり、情報のとりまとめみたいなことをして、土日になったら有給を一日くっつけてこっち(高田)に入るっていうのを、東京に戻ってきてからすぐやり始めました。それが結局、２ヶ月弱くらい続くことになった。

４月上旬かな、最初に高田から帰ってきて１ヶ月くらいしか勤務していない時に、この活動をできるだけ極限のところまでやれるだけやりたいって思いも出てきて、上司に「４月末で辞められないですか」って話をした。でも、ゴールデンウィークもあるのに次の人に引き継ぎができるのかっていう話になって、「じゃ５月末でお願いしてもいいですか」って。上司の方も、僕がどんな活動をしているのか見てくれていたんでしょうし、正直、仕事も結構、上の空だったところもたぶん多々あったんだと思います。だから、止められませんでしたし、やれるだけやりたいっていうのであればそれでいいんじゃないかって言ってくれて、５月末に退職して、それからこっち(高田)に戻ってきました。

■陸前高田での活動を再開

５月 29 日に戻ってきて、それからは住田町基地にいました。ボランティアの宿泊拠点が住田町にあって、その運営をやっていた人が、ここを好きに使っていいよって言ってくれて、そこにちょっと身をよせた。夜は事務所みたいに使って。僕、深夜番だったので、深夜の事務所を自由に使っていいよって形で。

朝４時くらいに寝て、起きたら高田に行って活動して、戻ってきて、夜もまたいろいろ活動してっていうのを、３ヶ月から４ヶ月くらい続けましたね。最終的にそこを出たのは８月の真ん中くらいかな。SAVE TAKATA の初めての事務所ができたので。もちろんプレハブです。昔、会社でお世話になっていた人がプレハブを用意してくれた。「欲しいんだって？」って電話をくれて。そこからずーっと事務所生活です。

――SAVE TAKATA 宛ての寄付金もかなり？

もちろん。でも、そんなに金額は多くなかったです。その時、お金のことなんてどうでもよくて、どうにかなるよねって思ってました。貯蓄を崩していけば、まぁ、一年くらいやっていけるっていうのもありましたし。だからあんまり意識はなかったですね。それも今考えれば、よくない。大いに反省です。だいぶ使い込みましたから。

――その時は、水があってありがたい、生きててありがたいっていう時期だったし。

最初にプレハブ一戸の事務所が出来た時、水道も電気もひけなかったけど、でも最初だから、ありがたくてしょうがなかったです。うん。その頃、避難所も、仮設住宅にやっと入れるようになってきたってタイミングだった。陸前高田は、お盆には全員が仮設住宅に入ったんですよね。ちょうど僕らが事務所を置いたのとほぼ同時期に。だから家の大切さみたいなのを感じた。

■支援の橋渡し

最初に避難所で 10 日間くらい活動した時、問い合わせがすごく多くて、僕がいた一中の避難所は最大時で 1800 人くらいが

避難していたところだったので、「支援だったら、掛ける1800の倍数でお願いします」っていうような形だったんですよね。

――1770じゃ困る。

そうそう。30どっからか持って来て1800にして配るわけですけど、何か配布するには、すごく大きい母数が必要になってしまっていた。でも支援者の皆さんは、どうかっていったら、そうじゃなかった。僕らに問い合わせが来る支援者さんたちは、どちらかというと小さい支援者さんが多くて、例えば、「水200本くらいしか用意できないんだけど、用意したから持って行ってくれないか」とか、「炊き出しをやるんだけど50人分くらいしか用意できないんだけど、どっかやれるところあるか」みたいな。その頃は、そういう細かい支援を組み合わせて300にするのが、すごい手間で煩雑で。

――1800は膨大な数ですものね。

1800はそもそも不可能じゃない？みたいな感じでした。200を9件集めて1800をつくるなんてどれだけ調整が必要なの？みたいな状況でしたし。小さい避難所もすごく多かったんですよね。直後は73だったかな、避難所の数。30人以下の小さいところから1800人までなので規模がバラバラで、なおかつ個人のお宅だったり、大きい建物っていうだけで避難所になった時期だったので、支援者の皆さんが物を持って来たり何かしたいって言った時、そもそも土地勘がないので、「じゃ、そこの避難所に行ってください」って言っても行けるわけでもないし、そこの避難所に知り合いがいるわけではないので、物を持って来ましたって言っても、あたりまえだけど、あやしいですよ。いただいていいのか？という思いも、もちろんあるし。それを受けていいのかというのもありますし、そもそも、この人たち大丈夫なの？っていうのも、もちろんありますし。だから、そこの橋渡しっていうのをやってたんですよね。それがもう半年くらい。ずっとそれでしたね。結局やっぱり、それがあったから僕も仕事を辞めているんですけど。

一中の避難所の時、トラック10トンが一日４台とか届いていたんですよ。支援物資が一日40トン分ずつ入って来て、食事なんかは一日一回の食事で200キロくらい消費するみたいな状態。大量に入ってきて、大量に消費する、でも余る物はたくさん余るっていう状態。この余ってるものを小さい避難所に持って行けるようにしたらいいなと。持ってくる人たちも分かりやすいところに持ってくるので、一中のような大きいところに集まるんですよね。支援物資は市が管轄していたんですけど、市に受け入れを断られたので避難所に直接来ましたとかね、そういう支援もたくさんありました。支援する方からすれば、せっかく持って行ったのにって。本来なら、受け入れられないような物は持って行っちゃ駄目だし、受け入れられなかったら素直に帰ればいいんですけど、そこは人間心理的に難しいところもあるし、必要は必要だけど、そこの調整がつかないから受け入れられないのがものすごく多かった。例えば、全体として物資量がどこにあるのかとか、どのくらいの人たちが来たいって言っているのかとか、ある程度、そういった情報を精査して、コーディネーションして、この人はここに行ってくださいとかっていうようなのをつくらなきゃ、これはやばいなっていうのが10

日間くらいでわかるわけです。じゃ、それ、誰がやれるの？ってなった。

一中の避難所は、その時、運営にかかわる人が 40 人くらいいたんですけど、全員、被災されていた。僕の同級生も何人も入ってて、それで一中に決めたんですけど、やっぱり外から入ってくる人たちの思いや価値観とか物事の進め方と、地元のその時の思いとか価値観、物事の進め方が、ぶつけると、だいたいケンカするんですよ。だいたいかみあわない。表現はよくないけど、「おしかけ支援」とか、そういったものも散見されていて、じゃ、その部分を仲介できる人が誰なのかなっていうのを考えた時に、U ターンしている俺たちじゃない？って思ったんです。都市部に 10 年くらい生活しているので、あっち(外)の人たちから見た今の陸前高田についての感覚もわかりますし、逆に出身者なので地元の方からの感覚、地元の連中が頑張ってやっているみたいなのも理解しやすいですし、こっち(高田)の物事の進め方も、ある程度わかっているわけですから、その調整役としては U ターン、地元出身で、一回都市圏で生活したことあるやつが、今、これをやるべきなんじゃないかって。こうして情報や物資のコーディネーションからスタートして、だんだんイベントやいろんなもののコーディネーションをずっとやっていく形になった。

■仮設住宅へ

――避難所の状況も変わっていきました。

はじめは緊急支援。一番大きい転換点は、皆さん仮設住宅に入られたことですよね。そこで一気に支援の性格が変わった。それまでは物資支援がメインだったんですけど、一言で言えばコミュニティ支援に移った。

――仮設では？

一番やったのは炊き出しのコーディネーションですね。避難所は避難所で皆、仲良くなったんですよ、3ヶ月間。かなり極限の状況から皆一緒にいたので。人と人との距離は良くも悪くも近くて、それはそれで成立してたんですけど、それが崩れた。仮設住宅に入ると、それこそ家から出ようと思わなければ一日も出なくて大丈夫っていう状況になって、避難所だったら無理矢理コミュニケーションをとらされていたので大丈夫な人も、それで急に落ち込んじゃったりして。また、(陸前高田の中でも)高田町の人たちの場合は、バラバラに仮設に入った。だからもう発災直後の状況に巻き戻しみたいなことになった。それで仮設住宅の皆さんがどうやってコミュニケーションをとりやすいようにしていくか、コミュニティを再生していけるかってことで、慰問コンサートみたいなものから炊き出しまで、皆が家の外に出てくるようなアクションをしようって、そういう支援がすごく多かったです。子どもにかかわることもすごく大きかった。その後、初年度の夏から冬にかけては、それを取捨択一するようになっていきました。

――外からの援助に対して、これは入れる／入れないとか？

うん。その当時は、支援する側にもする責任があるって意識がすごく強くなってきた時期でもあって、だから支援者さんの毛色も少し変わったんですよ。「僕たちが行って迷惑にならないか？」っていうようなのを最初の時期よりもっと考えるようになってくれた。だから、「こういうニーズありま

すか？」っていう問い合わせが多くなった。それで、僕たちの方で、例えば自治会長さんや保育園とかコミュニティのリーダー的なポジションの人に連絡とって、「こういう話が来てるんですけど、実際、どうっすか？」みたいなことを持ちかける。そしたら、「これはいらない」とか、「これは欲しい」とか、「こうだったら、ここ、喜ぶと思う」っていうようなのを支援者さんとやりとりをしながら決めていくようになった。

■震災前のこと

――唐突ですが、昔、高田にいる頃、自治会とか地域活動とかボランティアって？

興味ないっすよ。なかったですね、全然意識なかったです。

――それが今や自治会長さんと頻繁に連絡をとるなんて…

こんなことになろうとは…って、その通りです。地域の祭りには昔はまっていて、ずっと参加していたんですけど、ただ、そこにコミュニティ的なものを意識していたかっていうと全然違って、「太鼓、叩けりゃいいや」って感覚で参加していた。だから、この地域の人たちがどんな人たちなのかとか、どういう価値観で動くのかとか、どういうパワーバランスがあるかとか…

――これをやるために裏でどんなことやってくれてたのかとか。

そこで初めて、ですね。

――地域にはこういう人たちがいたんだ、今までこんなふうに生きてた人達がいたんだって、初めて出会ったわけだ。

そうです、そうです。そうでしたね。同級生が保育園に?!っていうか、子どもがいるの?!みたいなことも含めて。

――じゃ、昔の岡本さんを知っている人には驚かれたのでは？「君、何？今、こんなことしてるの？」って。

そうそう、びっくりしてましたよ。うん。「え？何やってるの？支援活動？え？お前、高田のやつやん」って。こっち（高田）の人たちからすれば、支援活動は外の人たちがすべきことなので、「なんでお前がそんなことやってるの？」っていう人ももちろんいらっしゃいました。皆、びっくりしてましたね。「仕事は？」「やめた」「は？」「だって、これ、やりたいと思ってるからさ」「へー」みたいな会話。

――変わったやつだって？

うーん、見られてたでしょうね。

――これまでの生活経験の中でもボランティアとかNPO・NGOって全然接点なかった？

なかったですね。献血に定期的に行くくらい。ほんとに意識なかったです、市民活動とかボランティアとかNGOとか。

――でも新潟の中越地震や、災害は国内でも国外でも山のように起きてきたわけで。

災害やそういったものが自分の中でリアルじゃなかったからだと思います。神戸の震災も、中越の時も、テレビで見てたけど、それに対して自分が何かアクションできるかっていったら、できなかった。というか、どんなものだか、わかってなかった。結局、メディアを通しての災害っていうものが僕の中ではリアリティに乏しかった。

――今回は。

現地の肌感っていうか、それは圧倒的に強かった。

――援助団体についてはどう思ってた？

いや、あの、なんにも思ってなかったです、興味がなかったので。社会問題に対し

ての意識は全然なかったですね。デザインで食っていくつもり満々だったので。デザイナーって、結構、社会と隔絶された連中が多いんです。好きなことさえ触っていれば幸せだし、周りはどうでもいいって感じで、僕も、例に漏れずそういうタイプだったので。だから、情けない話だけど興味がない。プラスでもないしマイナスでもない。

――青年団は知ってました？

知りませんでしたね。

――じゃ、震災後に初めて出会った？

「青年団？え？JCとは違うの？」っていうのが琢見さん(桜ライン311初代代表、当時・陸前高田市青年団体協議会会長)との最初の出会いです。

■桜ライン311との出会い

――なぜ桜ラインにかかわるように？

一男さん(佐藤一男さん、桜ライン311事務局長、青年団OB)から、一男さんと琢見さんが、桜ラインの原型について「やれたらいいね、でも、うちらだけじゃたいへんだね」って話をしていた。その時、僕は一男さんと仮設住宅の支援でお付き合いがあったので、一男さんから、「翔馬さん、こういうことやりたいんだけど、一緒にやんない？アドバイスもらえない？」って琢見さんと引き合わせてくれたのが最初です。2011年9月頃ですね。そこで初めて「シセイキョウ（市青協＝陸前高田市青年団体協議会）って何？JCと違うんっすか？」「青年団って何やってるの？あんま、名前、聞かないよね」って。NPO的な活動をしていると地元で支援や活動している団体にはイヤでもいろんなところで会うし情報もガンガン入ってくる。でも、その中で「シセイキョウ」って入ってこないなぁと思ってたから、「あ、シセイキョウって支援団体じゃないんだ」って。

――付き合ってみて青年団の印象は変わりました？

大いに変わりました。大いに変わりましたね、それは。それはやっぱりこう、何て言えばいいのかな、最初は桜ライン自体の位置づけや法人格がどうこうっていうのがあやふやだったんです。一男さんは市青協の一つの事業で出来ればやらせたいと思ってたけど、正直とても厳しいと思うと。だから手を貸してくれる団体がいるんじゃないかっていう話になった。それで、僕らのSAVE TAKATAと難民支援協会と板橋区災害ネットワークとが共催になって、市青協とその3団体の共催でやろうということになったんですよ。

――その時、桜ラインという構想には興味を持った？

もちろん。すごいいいなと思った。いいねっていうものは、さっさと形にしようぜっていう感じの雰囲気があったので、その時は。今ももちろんありますけど、今より全然何も考えてなかったから、その時は。僕、最初に桜ラインの話を聞いた時、プロジェクト自体ももちろんいいなとは思いましたけど、地元の人が声を挙げてくれたことが、すごい嬉しかったんですよ。

――ということは、それまで地元からの声があまりなかった？

ほとんどなかった。状況を考えれば当たり前っちゃ当たり前なんですけど。仮設住宅に入ってまだ2ヶ月たたないくらいのタイミングだったので。でも、外の支援団体はどんどん入ってくるし、地元の人はどん

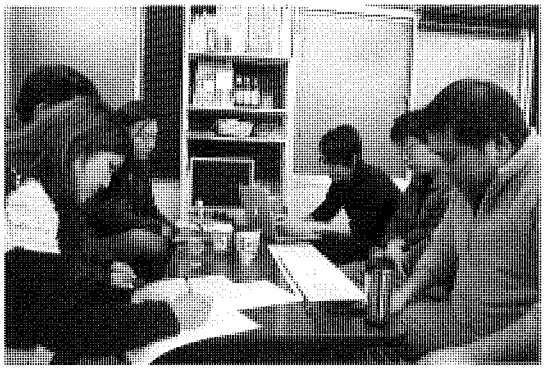
どん支援慣れしていくし、「なんか、この町、何なんだろう」って思っていた。「(地元の)お前ら、やらなきゃいけないこといっぱいあるだろ」みたいな感じ。僕は地元住民でもあるので、なんか、結構、ふつふつとあって。地元から見てると、受身的な姿勢がすごいイヤでした。最終的には自分たちで何とかしてかなきゃいけないわけじゃないですか。だから、外の団体がすごいたくさん入ってきて、すごいいろいろやっていたんだけど、この人たちが帰ったらどうするのかなって思って。いつまでっていうのが、その時、目処として全然たってなかったし。

――明日いなくなるかもしれないし、ずっといるかもしれないし。

当時、予算立ててちゃんと来ている団体はあんまりいなかったような気がしますし、ほんとにボランタリーな精神で入って来ては出て行って、入っては出てっていう時期でした。町の人たちが自分たちで何かやっていくことを皆、考えられていない状況でしたし。それを僕は微妙な感じで見ていた。

――じゃ、桜の話を聞いて「おおっ！」と。

「おお！来た！やるね！」と思いました、正直。「これでしょ！」って。「やりましょ、やりましょ、一緒にやりましょ」って。支援とかどうこうじゃなくて自分たちで何か新しいことをやるって、それが復旧のためであったり、高田の未来のためであったりとか、何でもいいです、仮設住宅の自治のために自分たちは組織をつくりたいとかでもいいんですけど、住民の人が今の状況を打破しようっていう動きが当時すごく少なくって、それがイヤだった。そういう時に桜の話、こういうことやれたらいいと思ってるんだよって聞いて、それはもう嬉しかったですよ。



桜ライン311事務所風景

■桜ラインでの自分の役割

――桜ラインには全国各地に支援者がいますね。

とにかく寄付がたくさん集まった。それは一つに、「津波の到達地点に桜を植えます」っていう、やることが明確だったこと。当時、がれきの撤去や仮設住宅支援とか、どっちかっていうと起きたことに対してのリアクション的なプロジェクトはたくさんあったけど、そういうところではなくて「この町の未来」っていうようなところにフォーカスしたプロジェクトが他にほぼゼロに近かったこと。あとはやっぱり桜っていうものを選んだのが日本人にとってすごく特別っていうことと、地元の出身者がほとんどを構成しているっていうこと、その４点でしょうね。うん。秀逸さがあったんだったと思いますよ。

その時、地元の人は仕事どうしようとか、雇用保険がおりまくって皆、仕事しないでグダグダしてて、被災地はこれからどうなる？保険は１月に切れるぞとか、２月に切れる人がこれくらいいるとか、そういう時期でした。支援する側から見ると必要なことがいっぱいあるんだけど、どうも、どん

よりしているというか、明るさを感じにくいプロジェクトが多かった。必要なんですけどね、必要なことに明るさなんて必要ないんですけど、やっぱりお金を入れる、自分のお金を役立ててもらおうというのは未来につながってた方が分かりやすいし、自分のお金がどうやって使われるかが見えた方が出しやすいし。

それで日に日にどんどん金額が大きくなってきた。確か1500～2000万円くらい、活動を開始して8ヶ月で4000万円くらい、いただいているんです、全国から。だから法人化した方がいいと思いました。任意団体でこの金額を誰かの責任で持つのは厳しいし、逆に寄付する方も任意団体だと出せないっていう人もたくさんいましたし。それでNPO法人つくろうって話になりました。

――橋詰さんから岡本さんに代表が代わったことについては？

僕は黒子がよかったので、正直、代表をやるのはイヤでした。Uターンで何かやってると目立つんです。こっちでいろいろ活動してて、取材や講演の話をたくさん受けていた。桜ライン311の代表に求められる色と、SAVE TAKATAに求められる色は違うわけです、事業型NPOのSAVEに対して、桜ラインは賛同型の純粋なNPOですから。SAVEの方でそういう立ち位置でやってきて、それで桜の方に入った時に、その色が桜にとってプラスになるかって、正直、自信を持てませんでしたし、地元の人たちが地元でやっている団体に、ましてや琢見さんみたいに、はえぬきのっていうか、結構、プロパーな地元民がやってこられているのにUターンが混じるのは、僕はイヤだった。最初に桜ラインとかかわる時点で、僕は地元出身だけど黒子でいたいっていうのがあった。だから、琢見さんの後は一男さんがやればいいって正直思った。でも、一男さんもその時いろいろな状況があったし、「桜ラインは若い人たちがやってるものだから、若い人が代表で居つづけてくれ。だから、翔馬さん、やらない？」って言ってくれた。一男さんが、やれって言ってくれるなら引き受けなきゃいけないなと思って、それで代表を引き受けることにしました。

――桜ライン311新代表としての今後の抱負を。

外の人たちと地元の人たちをつなげるバランサーとしての代表になろうって思います。僕はこの桜ラインを、陸前高田にいろんな人がつながるための一つの装置だと思っているところがある。もちろん、僕だって悔しい思いをしましたし、桜ラインがあることで、それより上に逃げるセーフティラインになるとか、人的被害がゼロに近づくとかっていうのは根本としてありますけど、桜ラインの性格というか役割が、前より複雑になっているし、多面的になった、他の面をいくつか持つようになったんですね。基本的なコンセプトは変わらないけど、事務局はもっとプロフェッショナルになって行かなきゃいけない。そうならないと1万7000本なんてとても植えられない。僕は、どんなことをしてもっていうと極端ですけど、どんな形になっても1万7000本を達成することが桜ラインのミッションを実現することになるし、琢見さんの意志を受け継ぐことになるし、支援者の皆さんに対する責任を果たすことになると思っているので、結果を残すこと、目標をちゃんと実行しきることが僕の代表かなと思っています。

僕、たぶん地元では浮くんですよ。地元っぽくないんです。でも根底にもっているのはやっぱり地元の人と一緒なんですよ。僕の場合、すごく仲のいい後輩が今回の震災で死んじゃったんですけど、僕が死んで、そいつが残ればよかったのにっていう気持ちがやっぱりあって、地元を捨てて好き勝手やっているやつが生き残って、地元に残って頑張ってたやつが死んでるなんて、すごいあほくさい、めっちゃ不条理だなって思ってた。でも、彼らが死んじゃって、彼らが町づくりできなくなった時、残ったやつがやればいい。僕の中の目標は、もし僕が死んで天国みたいなところでやつに会えたら、「いい町になったでしょ」って言ってあげることなんですよ。それで、「いい町になりましたね」って言ってもらうのが、僕の本当の根底的なモチベーション。他のメンバーもやっぱりそういう同じような思いがあって、生き残ったからには亡くなった人たちの思いとか、そういったものを引き継いで歩いていかなきゃいけないわけです。ただ僕の場合、地元の人たちとアプローチの仕方とか価値観がぜんぜん違うから、時々、同じ思いを持っているのかどうかすら怪しく思われることも、もちろんたくさんあります。それが町の外の人たちと話す時はプラスに働くんですけど、地元の人たちと話す時は、これはだいたいマイナスに働く。地元の人からすると僕は意味が分からないこと言っていたりする。だから僕自身、地元の人たちにも伝えられるようにならなきゃいけませんけど、外へ向けた役割を大いに発揮して、地元に対しては他の理事の皆に助けて欲しいなと思っています。

岡本　翔馬　（おかもと・しょうま）
岩手県陸前高田市在住
1983 年生まれ　岩手県陸前高田市出身
NPO 法人桜ライン 311 代表

はじめて植樹をした桜の前に集まる
桜ライン 311 のメンバー

（昭和31年2月4日第3種郵便物認可561号）

悲しみ、繰り返させない

『あの街に桜が咲けば』25日に高田で上映

陸前高田を舞台とするドキュメンタリー『あの街に桜が咲けば』が完成し、25日に同市内2カ所で上映会が行われる。同市のNPO法人「桜ライン311」（岡本翔馬代表）の活動を取り上げた映像の中には、防災・減災のメッセージが浮かび上がる。

監督を務めた小川光一さん（東京都在住）は若干26歳で、国際協力のNGOなどに所属。東日本大震災後は、東北のNPO支援等を行う中で桜ラインの活動に共感を寄せ、現在は理事としても在籍する。

ドキュメント映画制作は今作で2本目。22歳のときカンボジアのHIV感染者を題材に撮るまでは映像の素人だったが、自分が見聞きしたこと・感じたことを記録したいと考えるようになり、3カ月間で約200本の記録映画を見るなどしてノウハウを構築したという。

今作は、岡本代表や佐藤一男副代表、同市の戸羽太市長、ジャーナリストの津田大介さん、危機管理アドバイザーの国崎信江さんらへのインタビューを中心に構成。津波到達地点に桜を植える活動を通して伝えたいのは、「自然災害による犠牲を二度と出すまい」というメッセージだ。

「この作品を通じ、『身近に災害が起きたとき、果たして自分は大切な人を守れるだろうか』と自身に問いかけてほしい」と小川さん。岡本代表も「大事な人を『必ず守る』と断言するのはおよそ不可能なこと。だが、あらかじめ何をすべきか考え、アクションを起こすことはできる」といい、日ごろの防災意識こそ肝心と訴える。

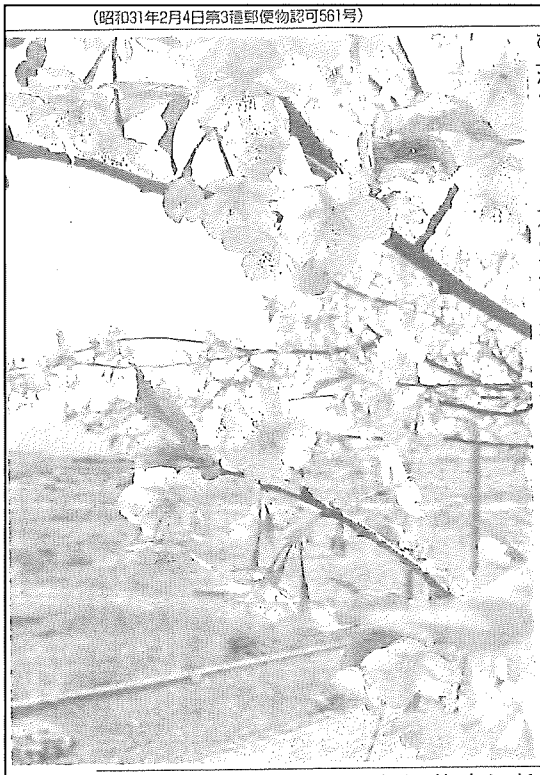
岡本代表は完成作を試写し、「光一くんの中にも、桜は咲いているんだな」という感想を抱いた。「同じ悲劇は繰り返させない」という決意が小川さんの中にも根を張り、芽を伸ばし…自分たちの思いを、映画の中にしっかり花開かせてくれたと感じたという。

主題歌に選ばれたのは、アジアンカンフージェネレーションのボーカル・後藤正文さんのソロ曲『LOST』。後藤さんは『THE FUTURE TIMES』編集長として気仙地方を何度も取材しており、楽曲提供も快諾してくれた。小川さんは「『LOST』は生と死のコントラストを描きながら、命の尊さを歌っている。僕たちが桜に託す思いに似ていると思った」と説明する。

市内での上映会は25日の午前10時30分から小友コミセン、午後2時30分から竹駒コミセンで行われる。事前予約不要で入場無料だ（上映時間40分）。

本編には津波襲来のシーンも登場する。いまだ「津波の映像は見られない」という市民も多い中、地元上映にはためらいもあった。

監督の小川さん㊧と桜ライン311の岡本代表



高田町に植樹された桜（写真は昨年の様子）

一方でやはり、伝え残す意義を強く感じている。3月からは12都道府県19会場で公開が決まっており、小川さんたちは「上映のお申し出があればどこへでも伺いたい」としている。

問い合わせは桜ライン311事務局（TEL 47・3339）へ。

思い出写真館
大船渡市・陸前高田市
こころの情景
お店にて絵葉書発売中

2014年1月23日付け　東海新報（写真右：岡本さん）

それぞれの震災 ～３年経って～

宮城県山元町・齋藤　緑

2011．３．11あの日から３年経とうとしています。私は震災当時の会社を辞め、被災した以前勤めていた幼稚園に戻り１年以上過ぎました。そして土・日は以前同様、りんごラジオでお手伝いをさせて頂いています。被災地の中で24時間365日過ごしてみると、それまでとはまた違った様々な面が見えてきていました。

被災地では震災で傷ついた方が多くいますが、震災の直接的な傷だけではなく、その当時やその後の人々との関わりの中で傷ついた方が多くいることに気づきました。「話を聞いてもらえなかった」「目を背けられた」「邪険にされた（と感じている）」など、今にして客観的に考えれば本当に些細なことが多いと思われます。しかし、その傷の方が根深く、そして癒すのが難しいのです。誰もが大変だった当時にされた態度やたった一言が心の奥深くに突き刺さっていて、それが元で人に心を開けずにいる方、当時支えてくれたごく一部の人にだけしか心を開けない方が多くいます。このように対自然だけでなく、人に対して何らかの思いを持っている方たちにとって、いくら物質面で復興しても、精神面では立ち直りづらい方がかなり多くいると思われます。このような方々への心のケアは置き去りになっているというか、注目もされていないように思われます。

震災当時から一年ほどは心理カウンセラーなども多く入っていましたが、どんどん支援が減り、このまま心のしこりがどんどん固くなっていってしまうのではないかと心配です。

子どもたちの心の中にも、震災はしっかり刻み込まれています。「おばあちゃんが津波で流されて顔がぐちゃぐちゃになっちゃったんだよ」でも、その子の家に行くと祖母が迎えに出ています。別のおばあちゃんのことなのか、他の家のおばあちゃんのことなのか、大人の話を聞いて、記憶が曖昧になっているのか定かではありません。「僕んちは７人家族だったけど、今は６人家族。おばあちゃんが犬を置いてきたんだ。だから犬は死んじゃったんだ」と強い口調で言う子。「お父さんに新しい積み木買ってもらったんだ～。でももうないよ。流されちゃったから」とぽつりぽつりとつぶやく子。驚くのは当時１才前後であったと思う子どもの口からも「大きな地震怖かったね・・・」「津波が来たんだよね」などの言葉が出ることです。本人に当時の記憶は無いと思われますが、周りの大人の会話がどんどん刷り込まれているのです。避難訓練用のサイレンがなっただけで泣く子や顔が青ざめる子もいます。子どもたちは人の心を感じる天才です。特に親の不安などを敏感に感じ取ります。実際に震災で恐怖を感じた子どもだけでなく、二次的に不安感を刷り込まれている子どもたちの心も同時にケアを考えて、何かあったときに足がすくんで動けなくなるのでは無く、自分で自分の命を守れる自立した子どもに育てていくことが大事だと思います。

また、３年経った今、家を新築して町を出て行ったり、町にとどまっても新居に引っ越す人がバタバタと出始めました。それ

は尋常じゃない目を見張る数です。我が家は家は流されずに済みましたので、以前と変わらないような生活を送れていますが、そんな私でも時々置き去りにされるような不安感を感じる時があります。その中で家や家族を失った方々の中には、経済的な理由等でなかなか次の一歩を踏み出せずにいる方も多くいるわけで、その方たちは私なんか想像もつかないくらい置いてきぼりにされているような寂しさや不安、憤りを感じています。これは山元町だけの話ではなく、沿岸部の地方の町はどこも人口の流出が止まりません。山元町は昨年の夏頃から、毎月 10 家族ずつ 30 人以上ずつ減っています。震災当時１万７千人程いた人口は、現在１万３千人程まで減ってしまいました。

なんだか、ここまでマイナス的なことばかりを羅列してきましたが、もちろんこの大きなピンチを生かした新たな希望の火も灯りつつあります。

山元町は宮城県の中でも知名度が低く、観光客が来ることは皆無に近かったですが、こんな町に定期的に関東と関西から「アミー号」というボランティアバスが来てくれています。「語り部の会」などの新たな組織も次々に生まれて来ています。震災で９割流されたいちごハウスが次々様々な支援のおかげで再生して来ています。また、そのいちごを使った化粧品も売り出されました。カフェがなかった町に、今二つの新しいカフェがオープンしました。キャンドルアーティストのキャンドル・ジュンさんやシンガーソングライターの平松愛理さんなどの有名な方もコンスタントに町に来てくださり、支援をしてくれています。全く注目されていない町に来てくださるだけで、心から感謝せずにはいられません。

まだまだやるべきことが山積みの町ですが、自分なりに感謝の気持ちを忘れずに出来ることをやっていきたいと思います。

りんごラジオでの齋藤さん

齋藤　緑　（さいとう・みどり）
宮城県山元町在住　職業：幼稚園教諭
1967 年宮城県旧古川市生まれ、
旧築館町・旧志津川町育ち
元日本青年団協議会副会長
（日青協経歴：98～02 年度・常任理事、
03～04 年度・副会長）

今、複雑化する地域の思い

宮城県角田市・佐久間　祥平

この記録は宮城県青年団協議会会長として北海道・東北の青年団員の座談会（2014 年２月１日）で行われた報告を元に文章化されたものである。

はじめに

私の住んでいる地域は、被災があまりなかった内陸部にあります。隣町では非常に厳しい状況になったところもありました。震災から３年がたち、みなさんが宮城へ視察にいらっしゃる回数が年々増えてきています。2011 年の震災直後、いろんな方から何とか受け入れてくれないかとたくさん言われました。我々県団役員も仙台にも行けない状況だった時に比べると、今では県団含めいろんな地域の方々から来ていただき、案内できる状況にはなりました。

家をめぐる問題

現在も一部では復旧が進んでいない場所がまだまだあります。被災している中心部は徐々にみなさんの努力もあって、普段の生活まであと少しだというところまで復旧しているところもたくさんあります。気仙沼や石巻、山元、北、真ん中、南などが代表的な被災している地域ですが、石巻は瓦礫処理場をつくり、そこで働く地域の方々もいらっしゃいますし、他の地域から入ってこられる方々も宮城県内で大勢いらっしゃいます。もちろん、お年の召した方、特に漁業をされてきた方々は、そこを離れて私たちは何ができるんだという考えもあって、少し離れた高台に移るのも本当はイヤなわけです。すぐそばに、すぐそこに海があるから住んでいたわけで、なかなか移動するのも厳しいところにはいるものの、それを続けるためには移動しなくてはいけないので、高いところから今までよりも時間をかけて来て仕事をされている方もいらっしゃいます。

私は内陸の会社に勤めており、沿岸の方から会社に来ている仲間に話を聞くと、今のところはまだ今いるところに住んでいるけど、内陸の方に新たに家を買ったという人もいます。海から離れて、もう一度来るのは怖いという意識は若者の方が非常に強いです。自分の子どもが小さい若者世代では、なるべく被害が少ない内陸に引っ越す人が私の周りでは増えています。

仮設住宅については、ほぼ宮城も（岩手と）一緒です。入るところは抽選で決まっているという人にお会いしますが、どこに建つかもある程度決まっているというのに着工できない。宮城の中では、大工さんやこれまで来てくれていた関東の人たちがオリンピックの方に持って行かれてしまうのではないかという話になっています。どうしても 2020 年までに仕上げなくてはいけないと決まっているオリンピックに対して、本当は一刻も早く終わらなくてはいけない震災の復興は、実際のところ期限が決まっているようで決まっていません。どちらを優先するのかということになると、国としてはやはりオリンピックの方を優先するのではないかと、漠然とではありますが、人々の中にそんな気持ちがあるのではと感じます。そんな不安の中、自分で家を建ててしまった方がいいと、二重ローンになってで

も、お父さんやお母さんに協力も得ながら行動している若い人の話もよく聞きます。

廃棄物処分場をめぐる問題

指定廃棄物最終処分場の候補地に県内の大和町と栗原市と加美町の３つがあがりました。当然のことながら反発はするわけです。実際、まだ放射能が多くあって、瓦礫も持って行っていただけないといった話も、ここまで繰り返しては来ているのですが、いつまでもそんなことを言っていられないので、何とかどれか一つのところにまとめられないかという話で、いずれも山側にある大和町、加美町、栗原市を候補地としたようです。しかし、大和町は自衛隊が近くにありますし、冬の間雪道で作業できるのかなども加美町の方では話されています。栗原市が候補地になるということはいろんなところで話題となり、私が住む角田市に隣接する丸森町は、福島に近いということから候補地の一つに上がりました。丸森町は宮城と福島の県境ということで、県外では初めて会議が開かれ東電が来て説明しました。丸森町まで来るなら隣町の私が住んでいる角田市でも、いや、丸森町と角田市なんてほとんど同じじゃないかといった具合にきりがないですよね。それらは放射能の影響が正直分からない時期の話でもありましたので、今でも定かではありません。

放射能の影響

今、私は元気にやっておりますが、直ちに影響はないと国から紹介されたところではあります。確かに「直ちに影響はない」のですが、福島の方では子どもたちの間でも甲状腺がんが聞かれる状況を考えると、そういう補償の問題はこれからどんどん大きくなっていくのではないかと思います。子どものいる同級生に話を聞きますと、正直気が気でないという声も当初から聞かれてはおりました。福島県連合青年会の渡辺会長が農家をされているので、どれほど厳しい検査をクリアして農産物が市場に出ているかなどを聞く機会があり、当然安全な商品が流通しているんだろうと思っています。どうしても、最初に国からの情報が錯綜した事態が、未だに大きく陰を落としているのは事実です。それらに対して、小さい子どもがいる我々世代の親たちは敏感だなと常に感じています。

受け入れを通して

宮城県団では、ここ２年から３年間に渡って受け入れもしております。12月７日から８日で中国青年代表団も受け入れ、被災地をご覧になりたいとの話もありましたので、石巻市の大川小学校にお連れしました（本誌第３章参照）。とにかく代表団のみなさんの心に残る対応ができればと考えていました。大川小学校は、全校児童の７割、112名中70名以上の方が津波で亡くなってしまいました。今、裁判にもなっていますが、もっと何とかならなかったのかと、やり場のない怒りが父兄の方々には当然あるわけです。大川小学校に行ってみると、先生方の判断は非常に難しかったのだろうなと思います。裏山に登れば助かったんじゃないかという声はずっと聞かれていますが、震災当時は雪が側面に積もっていた時期でもありました。そこを１年生から３年生などに登れと言ったところでどこまで登れたのか。５回ほど私もみなさんをお連れしな

がら行ったのですが、説明する度に、どちらの気持ちも分かるなと思いました。

また、法政大学の学生の方を３年連続で受け入れをしましたが、あそこに行くとみなさん言葉が出なくなってしまいます。学生のみなさんからは、「現場に来て初めてわかることが多い」「報道されていないような話も多くて衝撃を受けた」といった様々な感想をいただきました。

今後起きるであろう南海トラフなどの他の地震をはじめ、他の地域で災害が起きた時に、我々が東日本大震災で被災した状況は必ず教訓になり、いろんな材料となって、次に生かされるのではないかと思っております。そういった意味でも、この「生きる」第１号・第２号は、現状、その時の心境などもいろいろ書かれていて、どのように復旧していくかというのも書いてある、一つの材料になっていると思います。今後も日青協として、あと１つや２つ、そういった後世に残るプロジェクトのようなものを何かやっていければなと、声をあげていきたいと日々考えています。

座談会で発言する佐久間さん

佐久間　祥平　（さくま・しょうへい）
宮城県角田市在住　職業：会社員
1976年生まれ　宮城県角田市出身
宮城県青年団連絡協議会会長

地震发生后10天的记忆

宮城县角田市・佐久间　祥平

これは『生きる』第２号に掲載された佐久間祥平さんの手記「震災から10日間の記憶」を、中国青年代表団の受け入れにあたり中国語に翻訳したものである。翻訳した手記は、代表団に配布した。

就在写这篇文章的时候（2012年12月7日傍晚5点18分）在东日本感到了久未发生的5级以下的摇动。而且还发布了1米的海啸警报。我住在宫城县角田市，与海仅一山之隔，因为重新勾起了我的记忆，所以想把自己和周围的人们在地震后的对话和想法写出来。

1.　3月11日（周五）

我的单位是三班倒，那周是上正常班（早8点上班），所以和以往一样正在工作。而且那天要在藏王町的文化会馆召开2月末仙南青年文化祭的反省会，所以我在工作的时候就已经期待着在反省会上为了下个年度大家会提出些怎样的意见了。

下午2点46分一位同事大喊："要来大地震!!!"紧接着看到手机上发来的紧急地震速报另外几位同事也同样喊叫起来。他们刚喊完，我就感到了从未体会过的摇晃。我凭着直觉一边大喊："这家伙可厉害!!!"一边跑出了场房。第一次摇晃结束后不久，又来了一次强烈的，结果造成了停电，有的女同事失声哭了起来。我还是比较乐观，觉得肯定会没事的，所以就笑着说："没事的。这下宫城县海域地震也来了，大家可以安心盖房子了！"宫城县海域地震30年内的发生概率被预测为99%。我们这代人老说"地震不来的话，吓得咱们不

敢盖房子。”所以地震一来我就顺口说了刚才那句话。然而当时有谁能想到山的那边会发生那样的惨剧。

地震总算告了一个段落（稍微有些余震），我们在单位的停车场（指定避难场所）集合起来，领导说了 3 点事项，①今天可以回家了，②由于停电了所以晚班和夜班休息，③周一一定要来单位，传达完注意事项后大家就各自回家了。

虽说单位附近没有遭到什么破坏，但是我还是担心县内青年会成员们的情况，给县团干部和团员们发确认安全与否的邮件（当时需要发几次才能成功发送一次），在开车回家的路上时不时看到沥青地上下或左右裂开，告诉人们这是一次比较大的地震，但是当时的我还很轻松地想“虽说震级不小，但是受灾情况并不严重。什么时候能来电呀。”

回到家看见母亲正站在屋门口和邻居说话，于是我也走过去聊起了刚才的地震。邻居说当时在家里想往外跑可是站都站不住。但是家里的东西没掉落多少。我母亲说她当时正开车从大河原往回走，在过桥的时候地震来了，信号灯，广告牌，标识都剧烈地摇晃起来，当时她觉得这下可完了。我也把单位的情况说了说，接着说起当天要开的反省会，可电话打不通也不知道是不是改天等等。现在回想起来，当时的我把事情想得太乐观了。

“先进屋里看看吧”也就是查看一下受灾的情况。那之前家里的人谁都没进屋，所以战战兢兢地进屋一看，从碗柜里掉出 2 个杯子，2 楼我的房间里电脑的驱动器倒了，除此之外一切完好。我担心一直在家里呆着如果又来余震会不安全，所以 5 点左右我开着自己的车带着母亲到附近的弹珠店的停车场避难。那儿非常宽阔，即使路灯倒了也没危险，原本打算在那儿等到余震结束，可一直等到天黑也不见余震有丝毫停止的迹象，母亲说不敢回家，所以我们 8 点左右时决定在车里过一夜。很庆幸的是头一天刚加满油，所以我们能很快做了决定住在车里，从车载电视里得知汽油可能会供应紧张，我记得当时就希望早一点恢复供电。

因为有车载电视，人是呆在能够看到图像信息的环境里，老实说这种环境好坏参半。首先得到的消息是“仙台市若林区打捞上来 300 具尸体”。另外一条消息是县团事务局长所在的造船公司有近 200 名工作人员在没有完工的船上作业时被冲走。听到这个消息的时候我确认无疑，局长肯定是被冲走了，得知他安然无恙的消息是 4 天以后的事情。我还从车载电视上得知正在发生海啸，之前我们对海啸的印象不过是 50cm 的小儿科，所以当时感到事态变得越发不可收拾了。

也是在那天，我还目击到了令人感动的场面。在我们避难的弹珠店和稻田之间有一家便利店，一位女性大概是那家便利店的店长和一位年轻的男性店员，在停了电的黑暗的店里一直留到深夜 24 点，接待着每一位来客。那天角田虽然没有下雪，但是相当寒冷。事后我有机会听店长说当天的事情，她告诉我“那种情况下客人们会有困扰，停电后商品会变质，所以想着尽自己的所能多为客人提供一些服务”，我被她的职业意识所感动了。

2.　3 月 12 日（周六）～13 日（周日）

不时关掉发动机（是节约更是为了防止事故），我迎来了第二天的清晨。头一天夜晚虽然一直有强烈的余震，但是也不能总不回家，所以鼓起勇气回了家。虽然在车里一晚都没有睡着，可能是因为紧张和某种兴奋我一点也不困。

首先，呆在家里也没有用，我决定徒步到角

田市役所收集消息。平时从我家用 15 到 20 分钟就能走到，可是人行道，车道又是隆起，又是坑，非常难走。

打听消息的市民把市役所挤得水泄不通。我看到了一直关照我们青年会的工作的工作人员，可他们都在忙着接待来访的居民们。“不知道什么时候来电！”“派出供水车供水！”听到的都是近乎怒喊的声音。在各小学，公民馆避难的人名单被贴出，让我感到虽然是在内陆地区，但也发生了与家人，亲戚走散了的情况。

后来从旧角田女子高中门前路过时，丧葬车从我身边开过。我边走边想丧葬车怎么会开到这儿时，几辆自卫队的车开进了女子高中。后来得知，那些车是运送邻町亘理町，山元町遭遇海啸的尸体的，这个现实简直是太悲惨了。

回家的路上看到附近的家庭餐厅排起了队。我一边想着还没有来电怎么排起队来了，一边走近一看，原来是在买可以用煤气加热的冷冻食品，炸鱼，炸鸡等搭配起来的盒饭。从昨天晚上我和母亲就没吃饭，再加上附近的一位亲戚，我买了三份，从没奢望能吃到热饭，所以还是感到非常高兴。

晚上吃了些家里有的干果，灯油炉旁睡下了，余震还是不断袭来，让我过了一个不安之夜。

第二天 13 日早晨，母亲让我出去找些吃的来，我就骑着车出发了，这样可以转得范围大些。市役所聚集了更多的市民，工作人员们贴出了哪家超市几点开门等的消息。这两天我用车载电视看了一个小时的新闻，因为情绪会低落，我尽量不听原子能发电站的消息（内容也难懂）。情况的严重是后来才知道的，那两天我只是担心在外边跑会受到什么程度的放射能照射。

3.　3 月 14 日（周一）～15 日（周二）

14 日，周五从单位回来的时候，领导说过周一一定要来单位，虽然我心里不大愿意用汽油，但是也担心单位的状况，所以不得已开车去了单位。到了单位大概有一半的员工已经到了。我正在和同事们说这 3 天的情况，开完会的领导们过来跟大家说，最紧要的是确认安全，所以要求大家分头联系没来的同事，确认安全与否，周三再来单位。因为还没有来电，单位没水开不了工，所以我就想“到公司报道太浪费汽油了”，大家说下次骑车来，然后就分头回家了。

从单位回家的路上，附近的加油站排起了长队。我听说地震当天由于停电关门的加油站现在给每辆车加 20 升，3000 日元的油，一直营业到汽油供应完为止，所以也排起了队。后来也排过几次队加油，那天是第一次。那天排了 2 个小时的队终于加上油了，那以后听到些假消息，有几次去没开门的加油站白白地排了队。第 2 次以后再排队加油排 3，4 个小时已经是平常事了。汽油已经非常紧俏了。

14 日这天也有好事。从地震当天就一直没有信号的手机（那时母亲和我都是软银的手机）变成时有时无的微弱信号，陆续受到了将近 100 条邮件。那天我还收到了会长打来的事务局长平安无事的电话，我高兴得跳了起来。我记得我当时非常高兴，挂了电话以后我的心脏剧烈地跳动着。

迎来了地震后的第 4 个夜晚，一直用手电筒的佐久间家开始用上了蜡烛。之前我觉得用蜡烛会煽动不安情绪，所以并不愿意用，可点上蜡烛以后心情变得非常明朗而且温暖，这给我留下了非常深的印象。睡觉之前我说希望尽早恢复电，母亲说希望尽早恢复水。

15 日，我去了角田市役所，听到了一个传闻。有人问：“听说快恢复供电了。”市役所

的人回答说："还不清楚!"。我刚好认识那位工作人员所以就问了问，于是工作人员就向我吐露了苦衷："确实快恢复了，但是要是说明天恢复可是却不来电的话，我们会被指责说在撒慌，所以不得不这样答复"。得知恢复供电近在眼前，在回家的路上我的心情变得非常愉快，做好了明天上班的准备。

4.　3月16日（周三）～3月20日（周日）

说实话周一加的油如果可能的话不想用车，但是我还是开着车去了单位。我琢磨着要是从哪儿弄来水就可以开工了吧?不过电还没来机器动不了。那天只是确认了从周一开始新收集的平安与否的消息，一个半小时后就回家了。邻町已经来电了所以从周一开始工作。

我直接就回家了，路上发现了一个变化。在路过离我家最近的路口时"信号灯在闪…"我在车里自言自语。我急忙回到家，从屋里传来了母亲以外的声音…电视时隔5天能看了!虽然图像和信息净是我不愿意看到，听到的，但我感到踏实了许多。那天终于回到自己的房间就寝，感到又与普通的生活接近了一步。

从第二天到周日，我一边为周一开始的工作做准备，一边在加油站排4个小时队加油，去货架空空的便利店买食品，我觉得做的事情都是和生活有直接关系的。只是还没有恢复供水，我只能用从供水车打来的有限的一些水来擦拭身体，还没法洗澡。

5.　3月21日（周一）以后，以及……

从这一天开始工作了。时隔10天重返工作岗位，虽有些损伤但无大碍，水是从附近的池塘抽过来开的工。有从避难所来上班的同事，对于象我这样住在内陆的，家里的房子没什么大损害的人来说，还是没法开口问他们海啸的情形。这一周虽然其间断了几次水，但是已经可以洗澡了，又能象往常一样洗澡了，这使我感慨万分。

重新开工后过了3天，至今没想过的，不，应该说是潜意识里不让自己想的事情浮现出来了。"得考虑青年会的事情了…"从高中毕业后17年了，可以说青年会的事情没有一天离开过我的脑子。可是，从那天开始10天来，青年会这三个字从我的头脑里消失了。当然确认了事务局长平安无事，收到了全国各地的朋友们发来的邮件得到了鼓励也是事实，可是我却没有考虑到实际开展活动这件事。

另外我的处境与往年不同。地震发生前在2月的县理事会上，决定从4月由我担任宫城县团的会长。想干那个，也想干这个，那个地方这么改一下等等，每天我总在想着这些，可一下子什么也考虑不了了。当然发生了这样的事情也顾不得想这些，可是我在这之前也想过在非常时期青年会需要发挥自己的作用。让我顾不得想这些的原因是这17年来没有离开过我的"工作"的存在。的确在我20多岁的时候曾经想过，"要是不工作只搞青年会的活动也能生活下去就好了。"然而只离开工作岗位10天，我发觉我对生活的危机感非常强烈。我需要保护家人，在不知道工作什么时候能再开始的时候，我意识到了我顾不得考虑原本是业余活动的青年会的活动。所以当工作又重新开始后几天，逐渐都稳定以后我才能又开始考虑青年会的工作。

这次我的家乡遭到如此的灾害，这10天是非常重要的时期，它让我对青年会，对自己的人生再做思考，因此我提笔把它们集中地记录了下来。虽然是一次痛苦，严峻的经历，但我相信它对今后一定会有帮助。最后我要感谢地震发生以后全国各地的朋友们给予我们的支持和鼓励，我向大家保证今后还会在宫

城努力开展青年运动。

佐久间　祥平（Sakuma・Syouhei）
　宫城县角田市常住　职业：公司职员
　1976 年出生　宫城县角田市人
　宫城县青年团联络协议会会长

研修会にあたって

辻　智子（進行）

青年団や青年に限らず、私たちはいよいよこれから原発とどのように向き合っていかなければいけないかを考えなければいけないところに来ています。そのような現在地点において、先ほど、「原発は必要だろうか？」「必要だったと思うか？」というストレートな問いがありました。この問いを受けとめて私たちが学習の場ですべきことは、「必要か、必要ではないか」ということの答えを出すこと自体というより、この問いを各自が考え判断するための材料や根拠、視点を出し合ってみることなのだと考えます。こういう視点から考えるとどうだろうか、ああいう視点から考えてみるとどうか、というように、一人ひとりがこの問題と向き合って自分の意見なり、あるいは一票を投じる際の自分の意見なりを持つための判断の根拠や材料や視点というものを、いかに広げて持てるか、そのなかで自分は何を重視するのか、と悩み考えることです。実際には、出し合えば出し合うほど矛盾することも多いのですが、そのなかで自分は何を優先したいか、何を一番大事にしていきたいと思うかを問うことが必要になります。それぞれが自分の価値観や判断をもとに何かを「選択する」＝「捨てる」ことをしなければならない場面があるわけで、その際の自分の前提となるような学習＝思考の試行錯誤が決定的に必要なのだろうと思います。

具体的には、先ほどの分科会で出された風評被害の問題であったり、報道の問題であったり、（風評は事実と異なってという意が含まれると思いますが）実態としての放

射能の被害の問題であったり、そうした問題から見えることを整理していくことになると思います。ただ、難しいのは、原発や放射能の問題というと、どうしてもそれを理解する知識や事実を把握する術を「専門家」(専門家と言ってもいろいろな立場や意見があることを前提とした上で)に教えてもらうということにならざるをえなかったりして、「素人」には近づきにくい、手が出せない、そういう難しさがあります。けれども、そういうものに対して、どこでどういう手がかりをつかむことができるか、自分が信頼できると思える情報をどこに求めていけばいいのかという見きわめをすることも重要です。そうしたことも含めて、この問題についてもっと学びたい、学ばなければいけないっていうのが、少なくともここで皆さんが共有している感覚なのではないかと思います。

これからの進め方ですが、まず志賀さんに30分ほどお話をいただきます。志賀さんは『生きる』2号に震災に直面した時のことを書いてくださっていますが、2頁ではとても書き尽くせないとおっしゃっていました。今日は、そこのところをもう少し丁寧にうかがっていきたいと思います。その後、福井県出身の山田絵美子・日青協常任理事から、少ない時間ではありますが、地域青年団の立場から福井県の原発の現状と、それに対して今、どのように考えているかということをお話ししていただきます。

未来の陸前高田を考える

岩手県陸前高田市・松田　恵美子

1．現在の仕事や生活について

私は現在、震災前と変わりなく仕事が出来ています。震災当初は出荷も出来ず、会社のつてを頼って支援物資を運んできたトラックに持って行ってもらったり、内陸の遠野市の営業所に持って行ったりしていました。変化があったとすれば震災後、宅配業者が統合して集配の時間がかなり早まったくらいです。現在の生活についても、震災前とほとんど変わりなく過ごせていると思います。私の家は内陸側にあるので、津波の被害は受けずに済みました。買い物なども欲しいものも手に入るようになりましたし、震災を機に辞めたお店もありますが、震災前からあったお店も再開しています。

2．市青協の活動について

陸前高田市青協の主な活動は、10月の『市青協青年芸能祭』の開催と、『私達が思う陸前高田！』の定期的な開催です。

青年芸能祭は、平成25年度で第57回目を開催することができました。地元の青年会や地域の郷土芸能、舞踊のほかに、今年も宮城県の黒川郡連合青年団の方々の合唱と今回は岩切青年団に神楽を披露していただきました。これからもみんなで力をあわせて開催してきたいと思います。

「私達が思う陸前高田！」は、陸前高田市の戸羽市長の「若者の意見が聞きたい」というお話をきっかけに開催しています。25年度は、『防災』をテーマに活動してき

ました。「防災」を様々な視点から考えていこうという議論の中で、例えば観光客にとって避難路はわからないのではないか？障がいのある方はどのように避難するのか、また障がいを持っていない人はどのような形で避難を手助けすることができるのか？など、活発な意見交換がされました。

今回のフィールドワークでは、その二つの視点を掛け合わせて、一本松からの移動（避難）について、障がいのある方・高齢者の方の立場から考えてみようということで、車いすと高齢者歩行体験を行いました。そこで見えた問題点を提言書としてまとめ、戸羽市長にお渡ししました。後日、提言書の問題点にあげたことの対策を講じていただきました。防災編もお渡ししました。次年度も、定期的に開催し、未来の高田について若者の考えを届けて行きたいと思います。

３．桜ラインのその後

陸前高田の方で震災の年にＮＰＯ法人「桜ライン 311」を立ち上げ、津波到達地点に桜の木を植え、ここまで津波が来たというのを後世に伝えようという事業をはじめました。私たちがやっていた時はまだＮＰＯをとっていなかったんですが、やっていくうちにＮＰＯ法人の資格を取るという話になりました。現在は大隅町というところに事務所を構え、３月に春の植樹に取り組む計画に立てています。また、桜ライン 311 のドキュメンタリー映画「あの街に桜が咲けば」を製作し、１月に２回ほど市内で上映会が行われました。今後製作した人たちが全国をまわり、いろんなところで上映するという話もしていました。

桜ラインの取り組みは、津波をかぶったところに 10 メートル感覚で桜の木を植えていくというものです。170 キロの線上を１万 7000 本の桜でつなぐという壮大な取り組みで、品種も３種か４種くらいを、並べないでばらばらに隣接しないように植えていっています。現時点では 647 本を植えました。

４．震災を機にＵターンした青年のこと

『桜ライン 311』代表の岡本翔馬さんにお話を伺ってきました。

震災当時、東京の方で建築の仕事をしていて、地震が発生した時はビルの７階におり、船底にいるような長くゆら～とした感じの揺れを感じたそうです。その後、ＴＶで釜石・気仙沼・名取市の津波の映像を最初に見たそうです。関東で陸前高田市の映像が流れる前に陸前高田の方に戻られ、陸前高田の津波の映像は見ていないとのこと。陸前高田の方には、13 日の午前０時に東京を出発し、その日の夜に陸前高田に着いたそうです。横田町の方から入ったそうですが、竹駒町にある前立橋までは普通に来ることができましたたが、その奥からは瓦礫が広がっており『津波がここまできたのか！？』と衝撃を受けたそうです。この時初めて『陸前高田は駄目だろうな・・・』、『家族も無事ではないだろう』と覚悟したと話してくださいました。

陸前高田に戻ってから 10 日間程高田第一中学校で避難所の運営の手伝いをし、23 日位に東京に戻られました。東京にいる陸前高田の出身者に連絡を取り合い、集まって高田の情報をもっているか確認したそうですが誰もいなかったそうです。その後、

高田に入りたい人・帰りたい人向けのＨＰをつくり、必要な人に必要な情報を届ける仕組みをスタートさせたのがきっかけで『SAVE TAKATA』を立ち上げたそうです。

SAVE TAKATA を立ち上げた当初は身元の安否を確認する依頼が多く寄せられたそうです。それが落ち着いた時に、東京で支援物資を集めたので、現地で必要な所に届けてほしい・紹介してほしいとのコーディネーションの依頼が来るようになったそうです。支援者としては、本当に困っている人や場所に届けたいと思っているが、高田に来たことや縁が無く、現地の情報を発信している所なら何か知っているのではないかと思っていて、その声に応えて行くうちにきちんとした組織にした方が良いと思ったそうです。現地の人と支援者の間ではその時の価値観や判断基準が曖昧でうまくいかないケースもあったそうです。地元の価値観・支援者側の価値観をもっている人が中間に立ってやっていけばうまくいくのではないか・そのポジションにはＵターン者が一番良いと思い、その活動を本格的にきちんとやりたいと思い、４月に会社を退職・５月末に陸前高田に戻られました。

SAVE TAKATA の活動をしているときに『桜ライン 311』の活動もともにやっていたのですが、そのことを聞いた時にどのように思ったのかお聞きしたところ、「来たなー！！」と思ったそうです。その当時、なんらかの活動や団体を始めるのは基本的に外の人や NPO・NGO だったりしている時期でした。そのような活動は現地の人がやるべきだし、段々とやっていってくれればいい、と思っていたそうです。桜ライン 311 副代表の佐藤一男さんと前代表の橋詰琢見さんに声をかけられ、話を聞いて、地元の人が活動することが嬉しかったし、支えたいと思い共に活動することを了承したと話してくださいました。

桜ライン 311 の代表をやっていく上で、最初は戸惑ったそうです。どのように組織に貢献し、事務局をフォローしていけばいいのかが悩みではあるようです。その活動の中で、自分たちの目的が明確であるので、『悔しさや植樹で後世に残す』という部分を大きく外さずに活動出来ればいいと思うし、全国のみなさんから頂いた寄付や支援を貰った責任は大きくあるので、絶対に完成させたい・出来ませんでした、ということはしたくないとも話してくれました。

桜ラインの取り組みを通じて、岡本さんは桜が地元の人と支援者を繋ぐ役割をしているのではないかと感じているそうです。桜の植樹には何度も来られている方がいるとのこと。自分の植えた桜がどのように育っているのか・自分が見た町がどのように復興に向かっているのか・地権者やスタッフがどう立ちあがっていくのかといったことが桜を通じて繋がっているし、桜ラインを通さずに地権者と支援者が個人的に連絡を取り合っているのを聞いたりすると、そのように感じるとお話してくれました。

今後の抱負としては、何があっても 17,000 本の桜のラインを完成させること・本当に長くやれる組織をつくること、とのことでした。

活動を続けて行く上で、桜の木の管理等を含めると長い期間、資金もかかるのでそれに耐えうる組織をつくっていかなければならないと思っているそうです。そして、きっかけは震災だけど、人と人とがつなが

り、定期的に訪ねて来てくれる人や連絡を取り合える仲が出来たりするのは生きる糧になるとも話してくださいました。そのように人を繋ぐのは桜ラインだと思っていて、そのような例をたくさんつくりたい、そして出来るだけ多くの人の出会える場をつくりたいとも思っているそうです。地権者と支援者の間がされる側・する側からお互い気を許し合い、その中で関係性を築いていける、開けた気持ちのいい組織をめざしたいと話されていました。

私も理事として名前を連ねているので、その思いに少しでも役に立てるように参加出来る時には参加したいと思います。

「桜ライン 311」の取り組みはこちら
http://www.sakura-line311.org/

北海道・東北ブロック研修会で発言する松田さん

松田　恵美子　（まつだ・えみこ）
岩手県陸前高田市在住　職業：会社員
1986 年生まれ　岩手県陸前高田市出身
岩手県青年団体協議会
陸前高田市青年団体協議会事務局長

東海新報　第16779号　平成25年(2013年)10月1日(火曜日)　日刊(月曜日休刊)　(2)

体験で「課題」に理解

一本松周辺でキャップハンディ

陸前高田

陸前高田市青年団体協議会（菅野学会長）主催の「私達が思う陸前高田！」は29日、高田松原・奇跡の一本松周辺で行われた。参加者は一本松から避難する際の所要時間や課題点を把握しようと、車いすでの移動などを体験。段差や横断歩道などでの難しさを感じ取りながら、今後の復興やまちづくりへの意識を高めた。

同会はこれまで、震災からの復興を目指す市の方向性などを若い世代同士で語り合う場を設けてきた。主に防災面が中心となった先月開催時に、奇跡の一本松には連日多くの観光客が訪れる一方、津波注意報・警報時における避難のあり方が話題となっていた。

高田一中が避難先として想定される中、車いす利用者や高齢者らが実際に要する時間などを把握しようと企画。大船渡市立根町の県立福祉の里センターが行っているキャップハンディ体験を現地でできることになり、この日は20～40歳の男女15人が参加した。

車いす移動と、重度の白内障を想定した視界が体験できるアイマスク装着して歩く班に分かれて体験。このうち、車いす移動では国道45号沿いの駐車場から一本松まで、20～30分程度要することが分かった。歩道は舗装されて一方で各地には被災の爪痕がいまだ残る中、参加者は段差への配慮や道路横断など、健常者の立場では見えにくい注意点に理解を深めた。

この日は休日とあって県外来訪者や団体も多く、混雑時における移動の難しさも実感。市は「ノーマライゼーションという言葉の必要のいらないまち」を掲げている中、誰もが住みやすい環境づくりに向け、細かな気配りへの重要性も再認識した。

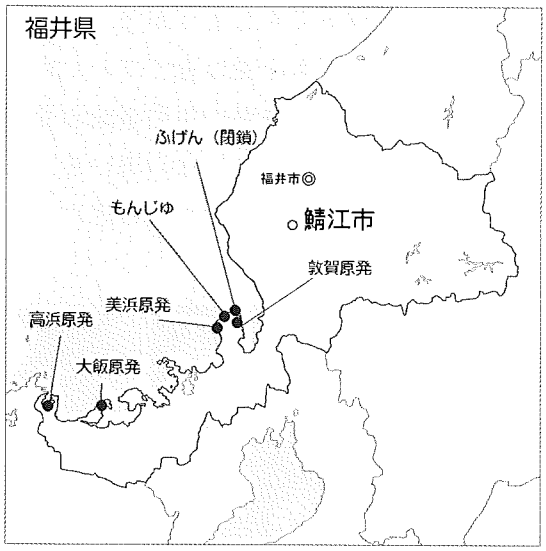
参加者にアドバイスを送った県立福祉の里センターの中村裕也指導員は「車いすでも避難時は焦らず確実に行動することが大切なほか、前段階で避難経路やどう逃げるかの把握も重要。このように、まず体験することも大事」と話す。同会では今回の体験内容を今月以降のまちづくりや防災討議の場につなげるほか、第2回の体験会開催も今後検討する。

奇跡の一本松までつながる歩道上で車いす移動を体験＝陸前高田

2013年10月1日付け　東海新報より

青年団の一人として

福井県鯖江市・山田　絵美子



■福井県の原子力発電所

私は福井県鯖江市に住んでいます。鯖江市は、ほぼ県の中央に位置し人口約６万７千人の小さな都市です。一番近い敦賀原発までは30ｋｍに位置する所です。

福井県には原子力発電所が 15 基あります。日本に 54 基の原発がありますから全国の３分の１が福井県にあるわけです。

福井県は戦災と福井大震災とにみまわれて壊滅的な状況に陥りました。そこからの復興は大変だったそうです。特に嶺南（原発立地地域）には企業も少なく、財政的にも大変でした。インフラ整備も進まず地元の活性化をどのようにするかすごく悩んだそうです。その時に出てきた話が原発誘致だったそうです。原発の交付金で少しでも地域を豊かに出来るのではないか、自分たちの地域を活性化出来るのではないかとの期待から、原発誘致に至ったそうです。1970 年から敦賀市に１号機が建設され、２号機ふげん、もんじゅ、美浜町に１、２、３、４号機が建設。その後 1974 年から高浜町に１、２、３、４号機、1979 年からおおい町に１、２、３、４号機の合計 15 基の原発立地県になりました。

■東日本大震災を経て

今、福井県に住んでいて、東日本大震災をどう思ったのかということですが、福島県の原発がまさかあのようになるとは思っていませんでした。原発は安全と言われていて、私たちも信じ込んでいました。福島県の原発事故があってから、私たちも危機感を持ったかと言われたら半信半疑だと思います。福島県の原発事故のことを思えば脱原発でしょう。しかし、現状は、そこで生活している人たちにとって原発が無くなることは、雇用が無くなることになります。また原発関連で仕事をしている多くの人々の雇用も無くなるということになります。

今回、福島県であれだけの被害があり放射線が排出され、原発は危ない、脱原発だと、私たち福井の青年団も訴えなければと思う反面、原発が立地している団員の仲間を思うと、どうしても青年団活動として脱原発を訴えることは出来ませんでした。

日本の全原発が停止したため電力不足になり、大飯原発を再稼働するかどうか人口約９千人のおおい町が審議することになりました。審議の結果、昨年（2012 年）、再稼働を決定しました。再稼働を決定したことによっておおい町の方たちは、全国各地からメールや手紙、約３万通におよぶ非難の声が届いたそうです。一時の利益で再稼働するのかというような声もあったそうです。脱原発は分かる、気持ちの中ではすご

くそうしたい。でも地元の我々の雇用は、生活は、地域を守るためには原発を再稼働しなければならなかったのです。

福井県も、今、脱原発か再稼働かでゆれています。福島県の原発事故を受け、福島県の方々の話を聞いて、原発立地の敦賀市、美浜町、おおい町、高浜町の方々も、脱原発を訴えなくてはいけないのではないかと、少しずつ声をあげ始めているのですが、福井県全体としては原発再稼働の動きのようです。

先日も新聞で、敦賀原発の敷地に活断層があるのかないのかで話題になりましたが、福井県民としては今ごろ右往、左往しないで、もっと建設前に充分に確認してほしかったです。果たして安全性の面で信頼出来るのか、真実味が伝わってこないですね。活断層があるのかないのか結論が出ていないのでは再稼働は出来ませんが、それでも県としては１日も早く再稼働したい意向のようです。本当に難しい現状です。

■青年団として

青年団として、どうしたらいいのか話を持てないでいます。福井県としては原発再稼働を推進しているように思われますが、福井県の青年団として、私たちが一人でも多くの福島県の方々と話をして、本当に原発が必要なのかどうか考えなければなりません。原発がなくなった時の代替エネルギー、また脱原発によって失われた雇用は、廃炉による廃炉ビジネスによって確保され、地域が経済面でもうるおうことが出来るのかどうか青年団としても、もっともっといろんな方々の話を聞き、原発をどうするのが正しいのか少しでも考える力をつけていかなくてはいけないと思っています。

どうせ言っても変わらないだろう、どうせ言っても再稼働するんだから、というような声が私の周りからも多く聞こえてきます。しかし、言ってもしようがないではなく、これから子どもを産み育てていく私たち青年が、今回の福島県の原発事故を受けて、私たちの思いを、みんなの思いを、１つでも多く出し合い話し合って行きたいと考えています。

発言する山田さん

山田　絵美子　（やまだ・えみこ）
福井県鯖江市在住　職業：会社員
1976 年生まれ　福井県鯖江市出身
日本青年団協議会常任理事

これは座談会（2014 年２月１日）の報告（テープ起し）を元に本人によって文章化された記録である。

私の「生きる」
ー大事なものは自給する、備蓄する、
頼らない生活へー

群馬県高崎市・湯浅　直樹

■はじめに

未曾有の大震災で数多くの被害にあわれた方々に、心よりお見舞い申し上げます。あまり震災に関係ない話と思われるかもしれませんが、私にとっての「生きる」を記します。

この原稿の締め切り迫る４月３日、私と妻は仙台におりました。それは三男の大学の入学式のためでした。学長のあいさつの始めに、本校の学生が震災で亡くなったこと、校舎も被害があり今でもプレハブで授業をしていることなどを知りました。

そういえば、三男の思わぬ合格が決った翌日の３月 10 日も、アパートの予約で仙台に来ていました。事前に大学よりアパートが非常に見つけにくいと知らされておりましたが、難をきわめ、大学の合格同様に一旦はあきらめかけるほどでした。それというのは、震災による家屋の倒壊、避難者の受け入れ、復興のための作業者の受け入れ等のためとのことでした。

入学式から帰宅した日の翌日、４月４日の朝から弁護士の所へ行きました。後で記しますが、「原子力損害賠償紛争解決センター」（以下ＡＲＤ）への和解仲介手続きをすすめるためです。

■子どもの頃の夢

私の家は代々農家で、私が小学生の頃は、米・麦・養蚕と養鶏をしていました。その頃の私の農業のイメージは、今でいう３Ｋ（臭い・汚い・かっこ悪い･･･）で、農業は大嫌いでした。父にも、もう農業の時代ではない、農業はやるなと言って育てられました。

その頃、私の好きだったことはプラモデルづくりで、バッテリーでモーターが回って物が動くのに興味がありました。白黒テレビで「鉄腕アトム」を見ていた頃の夢は、大好きな電気を起こすことであり、中学２年の「立志の誓い」では「自分で使う電気は、自分で起こす」と書いてタイムカプセルに入れたほどでした。また、その頃不思議だったのは、おもちゃの車はバッテリーでモーターで動くのに、本物の車はガソリンでエンジンで動くことでした。

その後、電気が大好きな私は、電気工学を学びました。就職先の第一希望は「東京電力」でしたが、願いかなわず、一般の電気メーカーに勤務することになりました。

■今の私の仕事

大好きな電気の仕事につき一年、毎日の単調な家と会社の往復に飽き力を余らせる日々が続いた時に「青年団」と出会い、私はのめり込んでいきました。特に合成洗剤の追放運動に始まり、食品添加物や農薬の問題、ひいては環境問題に興味を持ち、同時に農業の大切さを知りました。それからは就農を希望するようになりましたが、父の猛反対に合い、結局父が亡くなり就農できるまでの 15 年間、自分の農業への夢はふくらみ続けました。

就農してから震災までの 18 年間は、梅と椎茸の栽培・加工・販売、今で言う「６次

産業化」の「走」でした。なぜ過去形なのかは、後で記します。

梅は化学合成農薬や化学肥料を使用せずに栽培し、国内外の14種類の自然塩だけで添加物を使わずに加工し、日本中の自然食の人たちに販売します。椎茸は地元榛名山麓の天然木と地下80mまでボーリングして得た天然水で栽培し、主に乾椎茸に加工し、梅干し同様自然食の人たちに販売していました。

■青年団の運動から

青年団でもう一つ興味があったのは、平和で安全な地域づくりでした。もう30年以上前のことですが、広島や長崎の平和集会に行き、平和の大切さや戦争の恐ろしさを学ぶようになりました。また、原爆と原発は仕組みが似ており、もしもの事故の時には大きな被爆が出ることを知りました。

その頃、人工衛星に太陽光発電のエネルギーを使用していることを知り、私生活の中でもソーラー電卓が出始めました。私自身も太陽光発電を意識するようになりました。その後、チェルノブイリ原発事故が起き、原発反対の思いは強くなり、太陽光を始めとする自然エネルギーに対する興味も強くなりました。

そしてその後、人生が変わるほどの出来事が続きました。平成3年、生まれたばかりの次男が何万人に一人という難病にかかりました。それから3年間は「生きるの、死ぬの」という状況で、いつものど元に短刀を突きつけられている思いでした。

平成4年の地球サミットの時、日本青年代表団としてブラジルに行く機会があり「環境＝いのち」と思うようになりました。また、帰りにホームステイした日系のユバ農場では「自給生活」にあこがれました。

平成5年に父が亡くなり、私は就農しました。平成6年には、やれることは手を尽くした次男が亡くなりました。その時から私は「病気は悪い食べ物がつくり、健康は安全な食べ物がつくる」と思うようになり、私の残りの人生は「安全な食べ物づくり」にささげると決めました。

平成7年1月17日、日青協の「ソウル理事会」から帰る朝、自宅にたまたま電話し、阪神淡路大震災を知りました。その時異国の地から見た日本は食料やエネルギーを海外に依存しとても不安な国に見え、私は「大事な物は自給する」、具体的には「食料・水・エネルギーの自給」ということが頭の中でまとまりました。

韓国に行った私は、今度は北朝鮮に行きたくなりました。平成8年、次男に代わり三男が生まれたばかりで家族が反対するなか、日青協の派遣で行く機会を得ました。滞在中、米不足や電力不足を目の当たりにしました。帰国後すぐに、全額借金で30年越しの夢である太陽光発電を設置、同時に薪ストーブも入れ灯油も全廃しました。平成9年には80mボーリングして、天然水を得ることができました。その頃は就農していましたので大事なもの、「食料・水・エネルギーの自給」に近づきました。

■あの日から

平成23年3月11日、午前中に三男の中学校の卒業式を終え幸せな気持ちでいる時に、あの大地震が起きました。過去にまったく体験したことのない大きな揺れで、やっと買ったばかりの薄型テレビが今にもテ

レビ台から落ちそうでしたが押さえることもせず、これはもう築50年のこの家は崩れ落ちると判断し、家族全員家の外へ逃げ出しました。結果、家は壊れませんでしたが、敷居が５cmほどずれて、床に穴があきました。タンスや冷蔵庫はすべて止めてあったので、倒れませんでした。落ちたのは、神棚の水の入ったコップだけでした。

その後、世間では水・米・懐中電灯・電気・ガソリン等の不足が起きましたが、我が家はというと阪神淡路大震災以降「自給と備蓄」という考えの元、いつも通りに近い生活をしていました。水は井戸が使え、米は備蓄があり、非常灯は各部屋に設置、「計画停電」には昼間は太陽光発電の自立運転機能を使い、夜は自作の蓄電池を使用しました。ガソリンはというと、震災の一年前に 40 年越しの夢であった「電気自動車」を導入しており、スタンドの長い行列の前では指を差されました。

ただ仕事の方は思わぬ事態になり、特に椎茸は大打撃となりました。原発発生後、生梅・梅干し・生椎茸・乾椎茸ともに売り上げが半減してしまいました。後から分かったのですが、梅は風評被害、椎茸は放射能による実害でした。より安全な食べ物を求める自然食の人たちを相手にするだけに大きく影響を受けました。

その年の 12 月、乾椎茸から 1433 ベクレルの放射能を検出し、知事名で出荷停止となりました。平成 24 年３月、今度は椎茸のホタ木から 530 ベクレルが検出され、移行率２倍で生椎茸から約 1000 ベクレルが検出される恐れがあり、出荷停止となりました。やむなく「天然木椎茸の廃業」を決意しました。年末までに椎茸ホタ木置場用の杉林 150 本・倉庫 30 坪・浸水槽４ｔ・乾燥機２台、そして椎茸ホタ木 7,000 本の廃棄も完了しました。椎茸への投資額は私の代だけでも約 3,000 万円にのぼります。福島第一原発から約 200km も離れているこの地においても、こんなことになるなんて驚きと悲しみでいっぱいでした。

東京電力は請求よりも少額ながら賠償してくれましたが、平成 25 年５月に「椎茸の廃業は経営判断であり、原発事故との因果関係はあるとは考えられない」とすべて却下されました。10 月、有機栽培の梅は「事故から一定の期間が過ぎても風評が残るのは商品の特性によるものではなく事故との因果関係は確認できない」と賠償を打ち切られました。一旦は途方に暮れましたが、とにかく東京電力はお金を出したくないということがよく分かりました。

■これから

もう自分自身ではどうすることもできないことが分かり、ＡＤＲに７月、和解仲介手続きの申し立てをしました。平成 26 年３月に口頭審理があり、５月には和解案が提示される予定です。

ところで、私には平成 23 年の後半に、10 年計画で自然素材で自然エネルギーの自宅を新築する夢がありましたが、多くの家をなくした人たちのことを考えると、敷居がずれた古い家でもあるだけいいとあきらめました。しかし、一年後、もう五十代も半ばだし、母が元気なうちに、三男が大学に行く前に、ローンが借りられるうちに、面積を小さくしてでも、単価を下げてでも、家をつくることを決心しました。それでも自然素材と自然エネルギーの利用は崩さず、

群馬の杉とヒノキ・シックイを使い、自然採光と自然通風をめざしました。

太陽光発電・太陽熱温水器と、薪ボイラーによる暖房と給湯、名付けて「梅（バイ）を燃（も）すボイラー」や昔なつかしいカマドも設置しました。水は地下80mの天然水です。野菜は家の前の畑にあり、梅干しは売るほどあります。「停電でも、断水でも、しばらく暮らせる」ことをめざしました。

そして、今工事中です。農家にはたくさんの屋根があります。あいているすべての屋根に太陽光発電を設置し、電気を起こしたくても自分の屋根を持っていない人の分までも電気を起こします。でき上がれば合計で約 36kw、一般家庭約 10 軒分です。私は太陽光発電による売電を、椎茸に代わる仕事の一つにしたいと思っています。

最後に、今までの「生きる」と違い、私自身の半生の「生きる」になってしまったことをお詫び申し上げます。またこんな大災害が起こらないことと復興が大きく進むことをお祈り申し上げます。

私自身、今年の２月 14 日の豪雪では２棟の農舎をつぶしてしまいました。災害は避けれないものかもしれませんが、「自分にとって大事なものは、自給する、備蓄する、頼らない」を念頭に、椎茸なき後は「超こだわりの梅干し屋」をめざしていきます。

湯浅　直樹　（ゆあさ・なおき）
群馬県高崎市在住
職業：ゆあさ農園園主　湯浅太陽光発電所所長
1958 年生まれ
群馬県群馬郡榛名町（現高崎市）出身
元日本青年団協議会　副会長
（日青協歴:90～92 年常任理事　93～94 年副会長）

――無農薬・無添加・無原発――

一昨年12月、乾椎茸から1433ベクレルの放射能を検出し知事名で出荷停止となりました。昨年3月 今度は椎茸のホダ木から530ベクレルが検出され、移行率2倍で生椎茸から約1000ベクレルが検出される恐れがあり出荷停止となりました。

やむなく「天然木椎茸の廃業」を決意しました。年末までに椎茸用の杉林150本・倉庫30坪・浸水槽4ヵ・乾燥機2台、そして椎茸ホダ木7000本の廃棄も完了致しました。

福島第一原発から200kmも離れているこの地においてこんな事になるなんて、驚きと悲しみでいっぱいです。

なお、梅もキウイフルーツも「不検出」ですので、安心してご利用下さい。(ゲルマニウム測定法にて 検出限界値3.0ベクレル)

昨年も地球の環境保全とお客様方の「美容と健康」を目指す「ゆあさ農園」をごひいきにして頂き、心より感謝申し上げます。これからも石油・電気と電磁波の少ない、そして頼らない暮らしと農業を目指します。

就農19年、台風・地震・噴火そして異常気象が増々(?)正常化(??)しつつある今日、「安全・新鮮・格安・美味」で環境にも配慮した農産物を全国のお客様にお届けしてまいります。変らぬご愛顧の程よろしくお願い申し上げます。元旦

――全国発送致します――

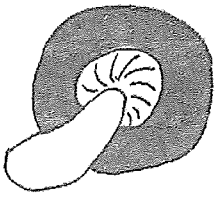
通	塩梅干し	通年
特別栽培	生梅	6月
特別栽培	キウイフルーツ	11~3月

ソーラー発電と地下天然水の
ゆあさ農園
園主 湯浅直樹
TEL
FAX 027-374-2792
〒370-3345 群馬県高崎市上里見町2132

（日本青年館理事
太陽光発電所ネットワーク主任相談員
日本自然農業協会役員
日本有機農業研究会会員
全日本健康自然食品協会会員
国際自然医学会特別会員
日本CI協会会員
ACOH有機認証協会会員）

もう、椎茸の写真を撮る事はできません。

ありがとう



絵、園主　　椎茸

春
遠からじ

平成25年の湯浅さんの年賀状

生産者の苦しみ深く

現場発　上州リポート

福島原発事故とシイタケ栽培

廃業決める農家も

梅林を抜けた先の小さな杉林の中には、枯れて黒ずんだシイタケが残ったままの「ほだ木」が並ぶ。高崎市上里見町の「ゆあさ農園」では今春、シイタケを育てるほだ木から指標値を上回る放射性セシウムが検出され、同園主の湯浅直樹さん(54)は原木シイタケの廃業を決めた。原発事故から1年以上が過ぎた今、生産者の苦しみは深くなっている。

【書屋武真之介】

枯れたシイタケを無念そうに見つめる湯浅さん

湯浅さん方は先祖代々、この地で農業や養蚕を営み、約40年前からは原木シイタケとウメを中心に生産してきた。約20年前に家業を継いだ湯浅さんは徹底した無農薬栽培に取り組み、自然食にこだわる顧客を全国各地に獲得。冬でもシイタケを収穫できる特注ハウスを新設するなど、原木シイタケへの投資は湯浅さんの代だけで約3000万円に上る。

しかし、原発事故後は放射性物質を懸念して客足が遠のき、売り上げは半減。県内では基準値を超える放射性セシウムが検出されていないウメも、震災前に塩漬けしたものだけ販売している。「無農薬で安全性を売りにしていた分、影響が大きかった」。さらに追い打ちをかけるように今春、県の検査でほだ木から1キロ当たり最高530㍉の放射性セシウムが検出された。

原木シイタケは放射性物質を吸収しやすく、食品に新基準値(同100㍉)が導入された4月以降、ほだ木の指標値も同150㍉から同50㍉に厳格化された。県は新基準値導入に先駆け、1月から県内全域でほだ木の検査を実施。経過措置としてほだ木が同50～150㍉の場合はシイタケを検査して同100㍉以下なら出荷できるが、ほだ木が旧指標値を上回れば、その時点で出荷停止となる。

湯浅さんは「新たにほだ木を買っても、シイタケは少なからず放射性物質が検出される可能性がある。安全性に不安があれば再開はできない」と廃業を決めた理由を語る。指標値超のほだ木の受け入れ先はなく、同農園が有する約7000本のほだ木の大半は収穫も処分もされずに放置されている。本来なら4月が収穫期だったが、今年は育ったシイタケが徐々に枯れていくのをただ見ているだけ。湯浅さんは「手塩にかけて育てた我が子を見殺しにするようなものだ」と肩を落とす。

ほだ木が並ぶ同農園内の杉林も、シイタケ栽培に適した木陰を作るために湯浅さんの祖父と父が苗木から育てた。「この杉林も全部無駄になる。これからどうすればいいのか、まったくわからない」。

ピアノ買取
ぴあのぷらす　検索
0120(517)666
ピアノプラス

2012年5月15日付　毎日新聞より

震災から2年半

傷癒えぬシイタケ農家

廃業に補償なく 再出発の障害に

東日本大震災発生から11日で2年半。東京電力福島第1原発事故の影響は、県内でも色濃く、放射性物質を吸収しやすい原木シイタケは出荷制限や風評被害で大きな打撃を受けた。全国1位だった群馬の原木シイタケの生産量（11年度・1358㌧）は震災後、3割以上減少（12年度・911㌧）した。さらに、廃業した農家に対する東電の補償はなく、再出発に重い負担を強いられる生産者も少なくない。

【富屋武真之介】

高崎市上里見町の「ゆあさ農園」を経営する湯浅直樹さん（55）は5月末、東電から回答書を受け取った。農機具の資産価値や処分費用など数百万円を求めた損害賠償請求に対し、「廃業は経営判断で、原発事故と因果関係があるとは考えられない」などと、すべて却下されていた。

原発事故発生以後、出荷停止や風評被害などによる逸失利益の補償を受けたが、廃業費用は自己責任だというのだ。湯浅さんは「原発事故がなければ廃業なんてしない。まったく理解できない」と怒りを隠さない。

約20年前に家業を継いだ湯浅さんは無農薬栽培など「安心安全」にこだわってウメや原木シイタケを生産し顧客を獲得してきた。シイタケへの投資額は湯浅さんの代だけでも約3000万円だという。しかし、安全性が売りだった分、放射性物質が不安な顧客は次々と離れた。

放射性物質の影響を受けていない西日本のほだ木を仕入れたり、菌床シイタケに転向したりする方法もあった。それでも「地元のほだ木から作る原木シイタケにこだわってきた。その方針を曲げても顧客は戻らない」と廃業を決めた。

湯浅さんはほだ木置き場にしていた自宅裏の杉林も伐採した。杉林はシイタケ栽培に適した木陰を作るため、湯浅さんの祖父と父が苗木から育てたものだったが、「シイタケをきっちり清算して前に進みたかった」と話す。

東電からの賠償金を杉林のあった土地の整備費に充て、梅林を広げるつもりだったが、計画は行き詰まった。杉林のあった土地は整備できないまま今も切り株が残り、雑草が伸び放題になっている。

湯浅さんは今後、損害賠償を求めて原子力損害賠償紛争解決センター（原発ADR）へ仲介手続きを申し立てる予定だ。

「機材も廃棄してしまって後戻りはできないし、このままでは前にも進めない」

湯浅さんは途方に暮れたように切り株を見つめた。

杉林のあった土地には雑草が生い茂っている＝高崎市上里見町のゆあさ農園で

2013年9月11日　毎日新聞より

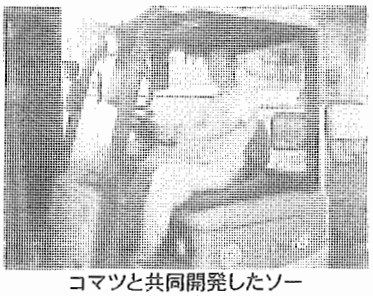
風評被害をはね返せ

ゆあさ農園　売電などに活路

買取制度のスタートで、注目が集まる自然エネルギー。高崎市上里見町で無農薬・有機栽培・無添加の梅干を生産する湯浅直樹さん（ゆあさ農園代表）は16年前から太陽光発電を開始し、太陽熱やバイオマスを含めたエネルギー自給に注力している。福島第一原発事故による放射能汚染では思いがけない被害を受けたが、売電利益などを生かす次の経営戦略を練っている。

湯浅さんは95年の阪神・淡路大震災を契機に、エネルギーの自家生産を強化。計10・5キロワットの太陽光発電設備を設置し、自家用と原木シイタケ栽培ハウスの開閉に使うほか、太陽光発電で充電する電動リフト・電動草刈り機・電気自動車を10年までに相次ぎ投入。

これにより、車と農機具で月平均3万円掛かっていたガソリン代が月500円に。また当初から行っていた売電も、09年11月に買取価格が約2倍に引き上げられ（10年固定）、11年は年間45万円を売電できた。



コマツと共同開発したソーラーリフトに乗る湯浅さん

エネルギー自給ではこのほか、太陽熱温水器と、梅のせん定枝などを燃やすまきストーブを活用。自宅の給湯と、ハウスを含めた暖房をまかなってきた。

また農園と自家用の水は、日量100トンの豊富な井戸水を利用している。

そんな循環型農業を展開してきた湯浅さんに大きなダメージを与えたのが東日本大震災による福島第一原発事故。売り上げの3割を占める原木シイタケは、基準値を上回る放射性セシウムが検出され、新たな原木の入手も困難なため継続を断念。主力の梅干もセシウム不検出にかかわらず、食の安全に敏感なこれまでの顧客から敬遠され、震災以前に仕込んだ梅干でしのいでいる現状だ。幸い10年ものは評価が高い。

「原発から200キロ離れているのにこれだけの影響が出るとは。農家として循環しないものは駄目だと思うが、子どもたちのことを考えると、原発だけはなくしてほしいですね」と語る。

そんな中でも、意気消沈ばかりしていられない。次の策を練る。太陽電池パネルの増設は有力候補の1つだ。

「農家は倉庫など建物が多いから、屋根にどんどん設置して売電すればいい」。原木シイタケに代わる作物も模索中だ。（松本英子）

計10・5キロワットの太陽光発電設備を搭載

2012年9月13日付　ぐんま経済新聞より

第2章　まなぶ・つたえる・つながる

津波被害で何もなくなった久之浜に向かって、全国の理事が一日も早い復興を願い活動していくことを誓った(撮影：2013年10月19日)

「あいちから」活動報告

「あいちから」実行委員会

■あいちから発足までの経緯

2011年3月11日の震災発災から愛知県団として何か行動を起こしたいと考えていましたが、募金活動や東北の食べ物やお酒を取り寄せての飲み会、東北物産展を単発的に行っただけで、自分たちに何が出来るかを考えているだけで一年近くが過ぎてしまいました。年が変わり2012年の1月か2月ごろ、たまたま聞いていたラジオの番組の中で自分の住んでいる岡崎市の花火屋さんが復興支援の一環としてメッセージを書き込める『星に願いを』という花火を作っていると放送で流れたので、この花火にメッセージを書いてもらって福島に届ければ少しは喜んでもらえるのではないかと考えました。ただ、発災当初から何か取り組むのであれば10年スパンの長期の活動になることは県団内での確認事項として話し合っていたので、県団の活動として行うには負担が大きいのと青年団関係者以外の人たちも巻き込んでいきたかったため、発案者の自分が代表となり実行委員体制で活動することにしました。

■あいちから福島での足跡

① 2012年8月16日夜発～19日
あいちから花火project第1弾

② 2013年3月8日夜発～10日夜着
あいちから花火project第2弾

③ 2013年4月26日夜発～29日夜着
大野農園農園花見参加、物産展仕入れ

④ 2013年8月14日夜発～17日夜着
夜明け市場視察

⑤ 2013年11月8日夜発～11日夜着
ふくしま道の駅空の駅イベント参加

⑥ 2014年3月7日夜発～9日夜着
白石ファーム視察、久之浜花供養参加

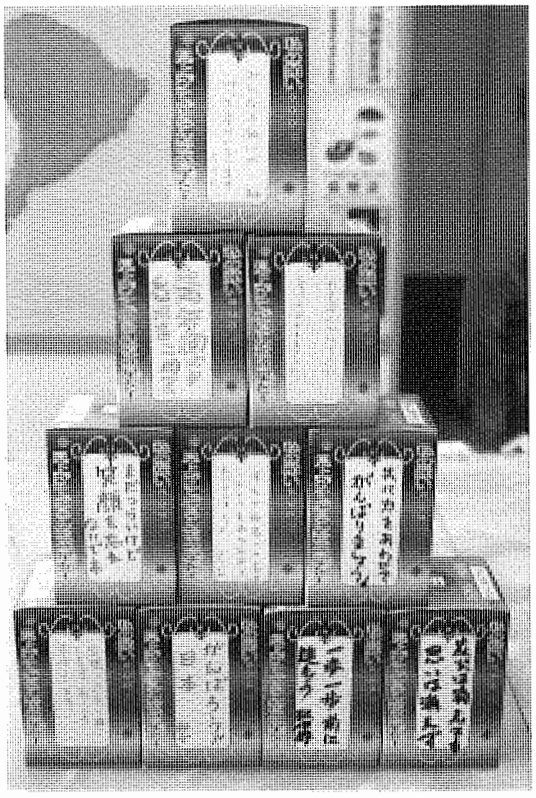
1．あいちから花火Project

この取り組みはワンコイン(500円)の寄付で『星に願いを』にメッセージを書いてもらい、2012年の夏に福島県に届ける活動です。

4月ごろからメッセージを集めると同時に地元青年団(矢作北北野学区青年団)を中心に千羽鶴を二つ制作し2012年8月17日～19日で福島県内の道の駅等に届けました。最初は花火なので震災孤児に渡せたらと思ったのですが、震災孤児がどこにいるのか調べようがなかったため、福島県内の養護施設に連絡してみましたが取り合ってもらえず、出発当日まで主となる届け先が決まりませんでした(福島県団の渡辺会長には青年会館でお会いして頂けるよう連絡が取れていたので、実質福島県団だけが確定した届け先でした)。福島には自分と家族(妻、息子×2)とあいちからメンバーの井上さん(17日のみ同行)の5人で向かい、道中で届け先を考えていたところ、道の駅に置いてもらえば県内外の多くの方の目にとまるのではないかとの結論になり福島県内の道の駅を回ることとなりました。

ガイドブックを頼りに、『道の駅たまかわ』『道の駅ひらた』『道の駅ばんだい』『道の駅羽鳥湖高原』『道の駅はなわ』『道の駅ふるどの』『道の駅よつくら港』と回りメッセージ花火を置いてもらう事が出来ました。

同時に宿泊した『ホテルミルニュイ福島』(福島市)『ホテルサンルート白河』(白河市)にも置いてもらいました。



花火展示風景

最初に訪ねた『道の駅たまかわ』で普段は東京のアンテナショップにいるので、不在である駅長がたまたまいて話をさせてもらうことができました。「原発問題があって福島全体がだめなように言われているが、実際には、本当にだめになってしまったところ、今はだめなところ、そして何も問題のないところもある。それが福島県ということで全部がだめなような風評があるので、実際に足を運んで自分の目で真実を見極めてほしい」「一年半が過ぎて震災や原発問題に対しての報道等に温度差が感じられるようになってきた県内では報道されていても、福島から離れれば離れるほど報道されなくなっていて、人々の記憶から忘れられつつあるのではないか？このままでは福島が日本の中で取り残されてしまうのではないか不安だ」(※一年半前の記憶なので言い回しなどは定かではありませんがニュアンスとしては上記のような内容の話だったと思います)と言われていたことが深く心に残りました。自分たちの活動の趣旨を伝えたところあっさりと受け入れていただけたので、この後もうまくいくと心軽やかに次の『道の駅ひらた』に向かい、駅長に取り次いでいただき趣旨を話させていただいたところ、非常に不審がられて20分くらい叱られてしまいました。その後、その場で企画書のようなものを書くように言われて書きました。後々、話を聞くと震災後、復興支援を語った詐欺や詐欺まがいの話が多くあったようで自分たちもそのたぐいと思われたようです。今でも駅長と会うとその話でひとしきり盛り上がります。誤解が解けた後は、『道の駅ひらた』がふくしま道の駅交流会の事務局だったため、駅長名義で自分たちが訪問することを、他の道の駅にメールで連絡してくれたので、その後の流れがスムーズにいくことになりました。また、当駅の自慢の品々をふるまっていただくなど本当に良くしていただき、良い関係は現在進行形で続いています（自分たちの中では始まりの地として福島に行くときには必ず立ち寄る先の一つになっています)。

この時、今後自分たちが協力できる事がないか相談したところ、９月９日にいわき市の『道の駅よつくら港』で、“ふくしま「道の駅」フェスタ in よつくら港”があるから何かできないかと言われたので、実行委員会で話し合い連絡することを約束しました。(道の駅よつくら港は津波被害に遭い８月 11 日に再開し

たばかりでした)。

その後、『道の駅ばんだい』『道の駅羽鳥湖高原』『道の駅はなわ』『道の駅ふるどの』『道の駅よつくら港』とまわり、各駅とも駅長や不在のところ（ばんだい、よつくら港）は責任者代理の方と話をさせていただき、それぞれに花火を飾ってもらえることになりました。（道の駅よつくら港には現在も花火が飾ってあります。）

各駅の方々と話をさせてもらって、皆さん共通して言われていたことは、とにかく福島に遊びに来てほしいし、足を運んで現状を見てほしいという事と忘れないでほしいという事でした。(この時の話が原点となり年間最低でも３～４回、10年継続、毎回新しい人を１人以上連れていくといった自分たちの活動スタンスになっています。

２．あいちから横断幕 Project

９月９日の“ふくしま「道の駅」フェスタ in よつくら港”に花を添えるため、祝道の駅よつくら港復活の横断幕を作成し愛知県の青年団関係者や一般の方にメッセージを書いてもらい福島に送りました。

８月に伺った際に『道の駅ひらた』の高野駅長と約束させていただいたので、花火 project 終了後すぐに実行委員会を開き横断幕を作って送ることを決めた。横断幕作成後、愛知県青年大会のボウリング大会会場と豊橋市青年団フェスティバルの会場で福島県への応援メッセージを書いてもらい福島県に宅配便で届けた。

８月に約束して日程的に厳しい中、完成させてイベントに間に合うように送れた事で、高野駅長のあいちからへの信用度が深まったと感じられた。この件のその後のやり取りの中で2013年３月の『道の駅ひらた』復興祈念祭への参加協力に繋がったと思います。

横断幕を掲げている様子

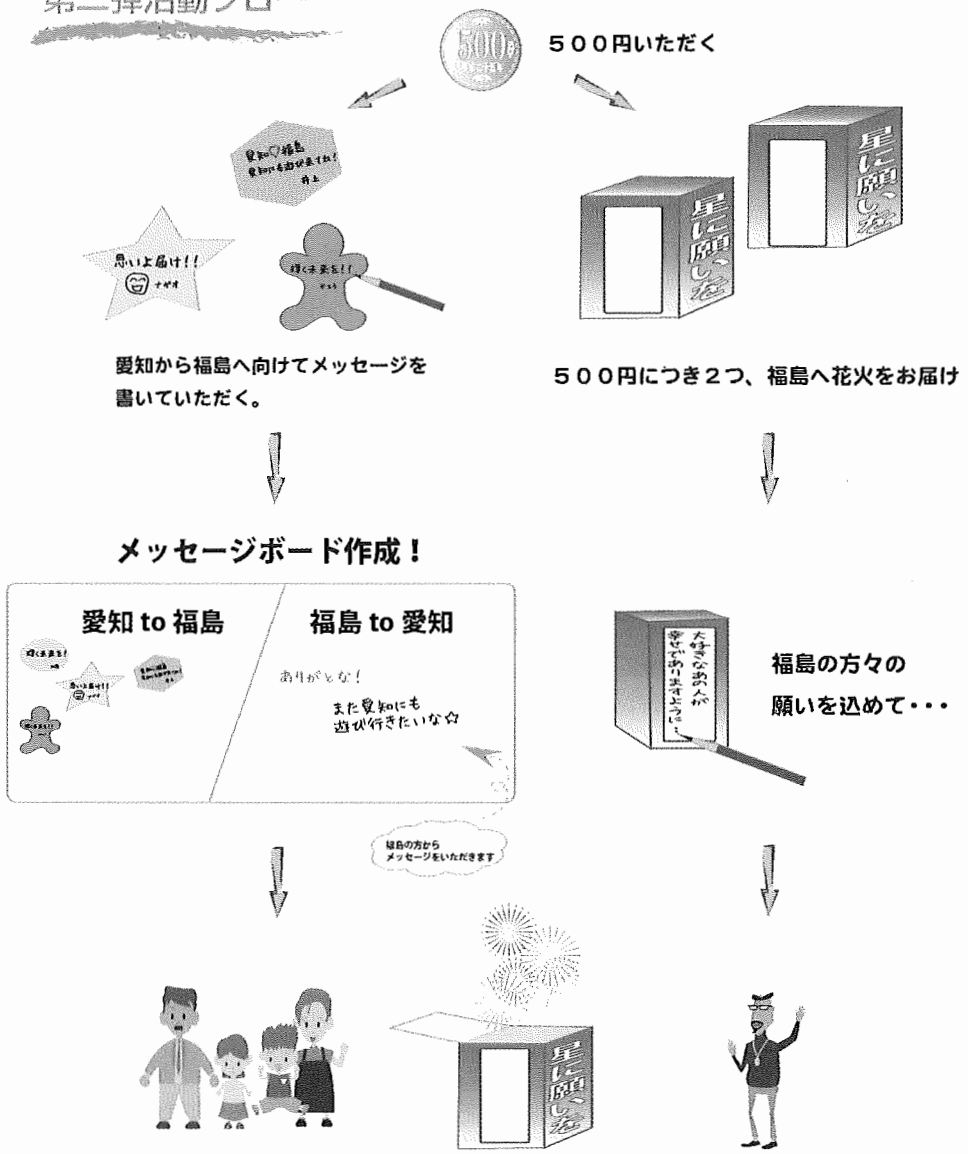
３．あいちから花火 project 第２弾

『道の駅ひらた』復興祈念祭参加にあたりワンコイン(500円)の寄付でメッセージカードにメッセージを書いてもらいボードの片面に貼り、イベント中、福島の方に残り半面にアンサーメッセージを書いてもらう事と貼りきれなかったメッセージカードをアルバムに張りメッセージアルバムを作成して展示する。花火『星に願いを』に福島の方に当日、夢や願い事を書いてもらい持ち帰ってもらいました。(詳細は次頁参照)

（執筆者：あいちから実行委員会
実行委員長　加藤敦也）

あいちから花火PROJECT

第二弾活動フロー



愛知と福島、想いがつながる架け橋へ

青森県の支援や避難者受け入れ

青森県青森市・工藤　晶信

青森でも、海沿いの２つの市と２つの町が被災しました。人的被害はほとんどありませんでしたが、港湾関係の被害がかなりあり、それも今日のニュースで確認したところ、今年の秋までに一つ完了するという報告がありました。平成 26 年度中には 95%以上復興できる予定という状況になっています。青森県内での被災の復興支援は､県内で民家は数軒、７，８軒が半壊被害だったので、青年団が大きく動くような復興支援というのはほとんどありませんでした。港湾関係だったので行政が中心となりました｡被災地からの避難者は、平成25年時点で752名という発表がありました｡そのうちほとんどが岩手･宮城からです。福島からの人数が､1 年ちょっと前で 60 何名ということですが、それが原発関係でどれくらい来ているかという情報が発表になっていません。やはり下北半島というのは、六カ所の核燃料サイクル施設、東通村の原発、大間原発、むつ市の中間貯蔵施設をつくっていますが、原子力にかなり関係が深い地域ということもあって、県の方でも原発関係で避難してきた人数を公表したくないようで、教えてくれませんでした。下北地域では、原子力関連の仕事が特に重要視されており、これらがなかったら地域を出て行く青年が数多くいます。

青森に避難してきてくれている方はほとんど県営住宅、市営住宅、雇用促進住宅などにほぼ入居しています。福島から来られていた方のほとんどが親族を頼ってきている方が中心で、震災被災者のための住宅に入っている人というのが福島からはそう何人もいないと聞いています。ほとんどが近い、岩手、宮城の方からの被災者である程度占められています。青森の原子力の関係で、弘前大学が、放射線医療の指定機関になっており、定期的に原発周辺の市町村に行って健康診断をしていると地元のニュースによく出てきます。その弘前大学の取り組みの一環として、福島の原発から弘前大学まで、東北道を中心に放射線量を計りながら通行してきて実際の発表とどう違うかという独自の資料も公開しています。その資料の中に、公表されている地域以外の放射線量が高いところの子どもたちの健康診断をした時、普通では考えられないような症状がでているという報道を１、２回して、それ以来、大学のＨＰ以外ではニュースで出ることがなくなりました。これは国の関係もあると思います。原子力に偏っているという青森の地域柄もあると思います。

今回の震災の被害が福島、宮城、岩手に比べたら、ほぼないような状態だったので、いろいろな支援をしてきましたが、残念なことに、青森県団として独自に動くことができませんでした。加盟団の方では、子どもたちの文房具の援助を行い、少額でしたが義援金も持って行って子どもたちのために使ってくださいと、東北町青年団体連絡協議会が月に１回活動をしています。今はだいぶ落ち着いてきたので、３ヶ月に１回くらいの頻度となったようですが、それでも行っていると聞いています。

座談会で発言する工藤さん

工藤　晶信　（くどう・あきのぶ）
青森県青森市在住　職業：僧侶
1973年生まれ　青森県青森市出身
青森県連合青年団副団長

これは座談会（2014 年２月１日）の報告（テープ起し）を元に本人たちによって文章化された記録である。

山形県と東日本大震災

山形県山形市・小関　新太郎

山形県にも避難してきている方がたくさんおり、平成26年１月現在6,177人の方が避難しています。当然ながら学校や体育館の一次避難所、旅館・ホテルの二次避難所にはもういません。現在は、民間アパートや公営住宅などに住んでいる方がほとんどとなっています。避難している方は一番多い時期で、１万3,700人くらいいましたが、徐々に減ってきており、現在では一番多いときの半分以下になっています。山形県の場合、宮城県からの避難者は423人とそれほど多くはありません。ほとんどが福島県からの避難者で5,700人くらいです。それ以外では茨城や千葉などから50人くらいおられます。知人を頼ってくるような方は全体のうち600人と10分の１程度で、山形県になじみのなかった方がほとんどです。県の主な支援としては民間借り上げ住宅の提供があります。これは、県や行政で民間アパートなどを借り上げて避難者に無償で提供するというものです。その間の家賃については県が負担しています。避難している方は避難先と実家を行ったり来たりする二重生活を強いられているケースが多く、避難生活は長期化しており借り上げ期間も一年また一年と延長されています。

そのため、最近は避難者同士のコミュニティの必要性もでてきています。民間借り上げ住宅にばらばらに入ることになるので、どうしても孤立、孤独になりやすいので、同じ悩みをもつ避難者どうしのコミュニティをどう

つくっていくか、アンケートをとらせていただき避難者が慣れない土地で生活していくうえで何が困っているのか、どのような支援が必要なのかというニーズを把握した上で、避難者どうしをつなげるとかカウンセリング、あるいは足りないもの、必要な情報などを提供するという支援が必要になっています。

地震が起きた時は、庄内地域を除く県内ほぼ全域が停電して、物資も不足し、２，３週間コンビニには商品がなく、ガソリンもありませんでした。ガソリンスタンドに行列になるような状態で、通勤できず仕事を休んだ人もいました。新幹線も１カ月以上運休していたため、東京に行くこともできませんでした。それが落ち着いて４月くらいになってから、山形県連合青年団で何かできることはないかという話を団長として、山形県団の場合は、組織として動くということはできないので、直接現地に行ってボランティアをするのがいいだろうという話になりました。ボランティアセンターというのが、災害があれば立ち上がるので、東松島とか、そういったところにボランティアセンターが立ち上げられているかを調べ、そこに行って、指示された場所でがれきの片付けをしたり、泥がたまった側溝の泥出しをしたりというボランティアを３回くらい行いました。岩手の陸前高田の青年団で毎年行っている青年芸能祭の開催が決まり、山形から出してくれないかという話がきたので、山形大学の花笠踊りの学生サークルを派遣しました。物資を送ったりというのは小野寺団長個人でやっていたと思います。現在は特に支援活動はしてはいません。

日青協第２回理事会で発言する小関さん

小関　新太郎　（こせき・しんたろう）
山形県山形市在住　職業：地方公務員
1980 年生まれ 山形県南陽市出身
山形県連合青年団副団長兼事務局長

これは座談会（2014 年２月１日）の報告（テープ起し）を元に本人たちによって文章化された記録である。

それぞれが何をすべきか考えていく

秋田県大仙市・齋藤　和彦

秋田県内では震災による人的被害は大きくはありませんでしたが、住宅被害や公共施設の被害が若干ありました。被害内容は主に停電、水道などライフラインで、停電は３月 12 日、水道は３月 13 日までにすべて復旧しました。電気関係の復旧にともなって秋田県連合青年会でも何かしなくてはということで募金活動を行うことにしました。集まった募金については３月 19 日に岩手県の方に支援物資を送ることで確認しました。支援物資の方は、３月 18 日に物資の要望があったものを、軽油、タオル、練炭、衣類、軍手、ゴム手袋、食料品等を購入し、連合青年会ＯＢと事務局長が岩手県に行って、岩手県のＯＢ・ＯＧの各１名と大槌町の青年と６名と盛岡で荷物の受け渡しをしました。実際、震災の１週間後の３月 19 日に行ったことについては、安全性の問題から、このタイミングで本当によかったのか、限られた支援物資で、かえって迷惑にならなかったかということも含めて、実際に行ってよかったものなのか、この判断で本当に正しかったかどうかは今でもわかりません。また義援金についても、県の連合青年会で日青協や赤十字の方に送りました。連合青年会の活動としては、即効性があるもので、これをもって活動は終わっています。

行政支援としては、避難者受け入れや災害廃棄物の受け入れ、職員の派遣、ボランティア活動の支援等が行われています。行政だけではなく、民間でもＪＡや商工会、各種団体が支援に取り組んできています。

避難者受け入れでは、雇用促進住宅や、旅館・ホテルの協力を得ながら行われました。仙北市では宮城県女川町竹浦地区の方が二次避難されていて、女川町では伝統芸能の獅子振りが行われていたが、津波で道具が一式流されてしまい、旅館のおかみさんが、獅子頭がなくて寂しそうだったということで、座布団や空き缶を用いて獅子頭をつくり、伝統芸能の復活は集落の復興ということで、獅子振りを続けています。震災年以降も市の産業祭に舞台発表を行っていただき、新しい獅子頭があっても、座布団獅子頭も復興のシンボル、絆のシンボルとして引き継がれ、交流が行われています。

東日本大震災がきっかけではあるが、伝統芸能を通じた交流であれば、青年団が何らかの伝統芸能の支援をできればよいと思いますが、このような活動も行っているということも含めて、青年団員各自が今何をできるか、何をすべきかを考え、今後の活動の支えにしていければと思っています。

座談会で発言する齋藤さん

齋藤　和彦　（さいとう・かずひこ）
秋田県大仙市在住　職業：地方公務員
1980年生まれ　山形県仙北市出身
秋田県連合青年会会長

これは座談会（2014 年２月１日）の報告（テープ起し）を元に本人たちによって文章化された記録である。

いわて復興スタディツアー
静岡県青年団連絡協議会

１．事業の目的

この事業は、東日本大震災の被災地である岩手県に赴き、現地での様々な体験を通して、地域や仲間、自分について改めて考えることにより、視野の拡大・資質の向上を図り、地域で活動できる青年の養成を目的とし開催しました。実施にあたり、事前学習会を実施したほか、今回の学習を多くの青年とともに共有しようと、事後報告会を実施しました。

東日本大震災から２年半が経過し、震災が風化し始めた今だからこそ、震災の記憶と傷跡が残る被災地を訪れ、震災の現場を自分の肌で感じることから学べることがあるということ、また、被災地を訪れることが復興の一助になるという思いから、静岡県団として、「いわて復興スタディツアー」という新規事業の開催に至りました。加えて、新たな県下青年の巻き込みや青年団の周知、地域青年の育成などの要素も盛り込みました。

訪問先については岩手県陸前高田市にしました。昨年度の静岡県青年問題研究集会で岩手県の震災の基調講演を聴いたことや、日青協をはじめ青年団の全国ネットワークの特徴をいかし、岩手県を支援したこと、また、招待の声をかけてもらえたことなどから選定しました。

全体を通して、参加者一人ひとりが震災の現実に向き合い、多くのことを吸収したことで、自己の振り返りと今後の取り組みについて考えることができました。また、改めて自

分の地域を見つめる機会にもなりました。

新規事業ということもあり、ツアー当日の研修内容の決定や参加者の募集という点では難しさもありましたが、みんなの思いを形にする青年団の事業立案の大切さを改めて思いました。また、被災地から学びとれることが多く、大変有意義な研修を行うことができました。

これからも被災地に関心を持ち、災害について意識や知識を高めていきながら、自分たちの地域活動にいかしてもらい、また、被災地の現状や訪問する大切さを伝えていくように、働きかけていきたいと思います。

２．事前学習会

（平成 25 年 9 月 29 日・静岡県青少年会館）

事前学習会では、参加者の緊張をほぐすとともに、東日本大震災についても触れながら、自分や地域のことを改めて見つめ、ツアー当日に向けて意識を高めていくことを目的に実施しました。

研修では、役員も一緒になり自己紹介と東北について学べるアイスブレイキングを行ったことで、参加者の不安を和らげ、東北地方に意識を向けることができました。また、写真を用いた地域考察や自分の住んでいる地域を紹介し合う研修を取り入れたことで、地域に興味を持ってもらうきっかけとなりました。

東日本大震災の学習では、訪問先である陸前高田市の映像を鑑賞し、被災前の街の様子や震災当日の様子、その後の復興に向けての取り組みを学びました。また、日本青年団協議会が発行した震災時の様子や被災地の青年団員の思いを綴った『生きる』を読み、被災者の思いを知ることができました。映像や冊子から感じ取ったことを話し合いながら、被災地に思いを馳せると同時に、自分の気持ちや考えを整理することができた大切な時間となりました。

最後の時間では、陸前高田市の方との文化交流と激励の意味を込めて披露する「港かっぽれ」を練習し、ツアー当日への期待を高めることができました。

３．スタディツアー

（平成 25 年 10 月 11 日～14 日
・岩手県陸前高田市内）

陸前高田市出身で岩手県青年団体協議会会長の泉田将治さんが温かく出迎えて下さり、現地調整やその後の市内視察等にも協力をいただいたことで、充実した研修となりました。

目の前に広がる広大な荒地や奇跡的に津波で残った一本松を初め、津波が浸水した高さを記した会社のビル、外観だけ残ったアパート、津波が川を遡上した最大到達点や桜ライン 311 の最初の植樹地となった浄土寺等、約６時間にわたり案内していただき、その光景に衝撃を受けたのと同時に、津波の恐ろしさや自然の力の凄さを痛感しました。参加者が様々な思いを巡らし、被災地の現実を目の当たりにする時間となりました。

夜には、北海道大学の辻智子准教授に、これまでの震災に対する取り組みや『生きる』の編集に携わった話などをしていただき、震災に関連する様々な考え方や視点、地域コミュニティの大切さなどを学ぶことができました。

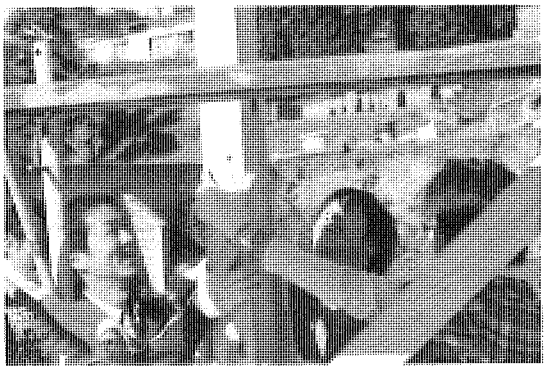
その後に行われた交流会では、岩手県青年団体協議会の佐々木訓さんも大槌町から駆け付けて下さり、楽しく交流しながら、県を越

えた青年のつながりを築くことができました。

翌日には陸前高田市内にある長洞（ながほら）地区仮設住宅「長洞元気村」を訪れ、地元の女性会の活動拠点となる工房の建築のお手伝いをしたり、仮設住宅で昼食をいただきながら、地元の方とふれ合い、震災当時の話や現在の様子、気持ちなどを聴くことができ、学びの多い貴重な体験となりました。参加者が地元の方と積極的に話す姿も随所に見られ、地元の方の生の声を聴く大切さを理解し、行動に移していました。お礼に「港かっぽれ」を披露することで、静岡の元気を届けることもできました。地元の方の優しさと前向きに生きていく力強さを感じることができた大変有意義な時間となりました。

次の研修では、陸前高田市青年団体協議会が主催する青年芸能祭を鑑賞し、普段では見ることのできない東北の芸能や舞踊を見ることで、視野の拡大を図ることができました。震災前と会場が変わるなど様々な困難がありながら、一から自分たちの手で事業を創り上げ、実行している姿に感動を覚え、自分たちの活動にいかせるヒントを学ぶことができました。

このツアーを通し、参加者一人ひとりが、地震や津波に対する意識や震災に対する考え方、地域の大切さや自分や青年団活動のことなど、様々なことを振り返ることができました。これは、現地を訪れることの必要性と地元の方の声を聴く大切さを学んだからこそ導き出すことができました。



長洞元気村で建築のお手伝い

スタディツアーの最後にまとめた参加者の感想です。

○桜ライン311の桜の植樹の場所が印象深いという話が出ました。復興がまだあまり進んでいなくて、復興とは何だろうという話になりました。ルールがあってしばられているという泉田さんの話が印象に残りました。静岡とは状況が違うし、なかなか想像がつかない部分があるなと感じました。力になりたいという気持ちはあります。

○辻先生のお話を聞いて、都心と地方の格差があり、行政に任せていてはだめだと分かりました。桜ラインのお話を聞いて、今の自分たちにはできないくらいすごいことで、被災しないと分からない強い思いがあるのだと感じました。また、自分たちの近所付き合いを見直さないといけないと思いました。

○長洞村では、住んでいる人たちがとても優しくあたたかい方々ばかりでした。自分たちの手で建物をつくり、仮設住宅で集会などを開いている姿を見て、復興は行政に任せきりにするのではなく自分たちの手で行なうからこそ、辛いことがあっても明るく過ごすことができ、そうして笑顔になっていくことが復興なのかなと思いました。そんな姿を見て、

応援したい、また訪れたいという意見がありました。村長さんの話の中で印象に残ったのは、「地震＝津波と思え」という考えが浸透していて、それは地域のコミュニティで日ごろ話し合っているからこそできるということ。実際、自分たちの地域を考えると、地域住民や自治会との関係にほとんど参加することなく話し合いがあまりないのが現状なので、まずはそういったことを知っていくことが大事なのかなという話になりました。長洞村を訪れて、逆に僕たちが元気をもらいました。

○青年芸能祭ではたくさんの演目の中でも伝統ある芸能がたくさんあるのを見て、私たちも清水だと夏のお祭りだとか、島田も秋のお祭りだとか、地域での音楽活動とか、自分たちが地域で大事にしている活動をもう一度見直すことが必要だと感じました。個人的には、自分の住んでいる地域で昔から大事にされているものは何なのか全然知らないので、勉強していきたいと感じますし、県青年祭でも自分たちにできることもあるなと思ったので、来年は何かやりたい。今まで見ているだけだったのですが、盛り上げ役になっていけたらと思いました。

４．事後報告会

（平成 25 年 11 月 24 日・静岡県青少年会館）

ツアーを終えて１ヶ月半が経過した中で、各自が感じていることを整理し、これから自分たちがやるべきことや、今後の生活に活かしていくことを見つける目的で実施しました。

午前中はツアー当日を振り返りながら、もう一度自分の気持ちや考えを整理しまとめること、また、その感じた思いを多くの方に伝えるための発表の方法を検討し、学んだことをいかに伝えていくのかを考える時間となりました。

午後には静岡県内の防災の取り組みを学ぶために、県地震防災センターを訪ね、地震・津波体験と講義を聴く時間を設けました。静岡県の地震想定やこれまでの大震災の経験から学べること、やっておかなければならないこと等を知ることができ、災害への意識と知識を高めることができました。事後報告会を機に、また気持ちが新たになり、これから自分ができることや取り組んでいきたいことが整理されました。また、地域との関わりの大切さも再認識できる機会ともなりました。

また、参加者にツアーの報告の機会を設け、被災地の現状を他の事業参加者に知ってもらうことができたことも、震災を風化させない機会として有効な時間となりました。

自主制作映画「Message」の取り組み 3.loveline 岡山→東日本実行委員会

語り手：仲田　俊範さん
（「3.loveline 岡山→東日本実行委員会」実行委員・岡山県青年団協議会監事）
保住　裕士さん
（「3.loveline 岡山→東日本実行委員会」実行委員）
聞き手：廣瀬　純子
（日本青年団協議会常任理事）

――そもそも3.11直後から3.loveline が立ち上がるまでの経緯を教えてください。

仲田　その日僕は福山で仕事をしていて、携帯の電波が入らないとは感じていましたが、地震のことは知りませんでした。帰りのラジオで地震がすごいことになっていると知って、夜になってからテレビをつけました。最初に見たのは気仙沼の海が燃えているところ。ガソリンスタンドの看板の柱に木造の家屋がぶつかって潰れていくところとかを見ていて、これはすごいことが起きている、日本沈没じゃないかと思った。

その次の日の3月12日には、役員の一人が「募金しないんですか？」とメールで言ってきて、10人くらい集まればいいなと、声をかけられるところだけかけました。募金箱も手づくりしました。3月13日の日曜日に岡山駅前広場に行ってみたら、100人以上集まった。ツイッターで呼びかけたのが広まって、どのルートで来たのかよく分からない人も多かったです。

――他に募金活動をしている団体はなかったのですか？

仲田　その時はなかった。その日の昼くらいから道の向こうでお寺の関係の方が始めていましたが、知っている範囲では僕たちが一番早かったと思います。実際に募金活動をしていたのは2時間ちょっとくらいですが、106万8455円集まりました。その次の日の月曜日に日本赤十字社に送って、集まった金額は県団のホームページにアップしました。その次の週にももう一度募金活動をして、それは日青協に渡しました。

その後、岡山県青年館が主体となって、夏に高校生ボランティアを中心に陸前高田市に派遣しようとなりました。正直、県団がそこまで関わるのは難しいだろうと考えていましたが、想像以上に参加者が集まり館だけでは手に負えないので、仕事を休んで一緒に行くことになりました。高校生、大学生、大人含めて約60名がバス2台で17時間かけて行きました。それで行って帰ってＤＶＤを見て、「ああ良かったね、よくやったね」と言っていました。

その頃には震災の報道も減っていました。当時「生きる」の取材を受けた時に辻先生に陸前高田市の青年芸能祭など現地の話を聞いて、「1回行って終わりなの？」といった話もして、桜ラインのことも知りました。「被災地の青年団が頑張って何かやろうとしている」のを応援できたらいいなと思い、それが3.loveline の始まりです。陸前高田にボランティアで行ったメンバーの大学生から上の世代を中心に、「もう一度何かしない？」と人を集めました。桜ラインを紹介して「何か応援できることないかな」と。だから3.loveline

の名前の中には「ライン」が入っています。

――3. loveline ってどういう意味ですか？

保住　あの時、キーワードは「T」だった。Tとは「東北」のT、「つながる」「続ける」「伝える」活動をしたいとのT。また、「3. 11」をからめた名前にしたかった。そこでみんなで順番にブレーンストーミングのようにキーワードを出し合っていったら、「3. loveline」を出してくれた大学生の男の子がいたんです。「これはいいね」って一瞬で決まりました。「l」（英小文字のエル）が「１」（数字のイチ）に見えるじゃないですか。岡山の青年と東北地方の間で絆をつくって続けていこう。時間が経つとどうしても忘れるけど、それを風化させずに続けていこうという思いをこめて。俺はその日の前に新年会でチラシを渡されて誘われたんですよ。

仲田　3. loveline の最初の活動日は 2012 年３月 11 日の日曜日。会場の関係で募金活動ができなくて、でも岡山駅前広場は使いたかった。だから通行人の方に呼びかけ応援メッセージを横断幕に書いてもらい桜ラインに届けようとなった。岡山からも現地に行って頑張った若い人たちがいるのを知らせるために、2011 年８月にボランティアで行って撮った写真をパネル展で紹介しました。

それでも、「ここで終わっちゃダメだから、次は何しよう」とアイディアを出し合った。次に集まったのは５月くらいでした。その頃までは県団が中心にやっていましたが、県団の中でこれからの 3. loveline の活動について話し合った時、定期的に集まって活動するとなると県団事業と並行するのが難しいとの話になり、続けて来ることができるボランティアと県団役員数名で実行委員会形式で取り組むことになりました。定期大会でその承認を得て５月から始動しました。その最初の集まりに来たメンバーの中には、前の年に被災地に行っていない子が多かったです。

保住　１回目から残っているのは岡崎さんと俺くらいよね。

仲田　「やりたい」という思いはみんなにあった。１月くらいに立ち上げた時から来ていたメンバーが主でした。成人式の実行委員会の子たちもいました。

当時、会館がやっている県の補助事業の「ちょこっとボランティア」がありました。ボランティア情報がメルマガで届くものです。呼びかけにはそれを使いました。行けるんだったらまた高田に行きたいという人もいた。新しいことをやったらまた新しい人が来て、面白いですね。

――今、3. loveline が外に発信している媒体は何ですか？

仲田　団体としては、ホームページが最近形式を変えてブログ形式になりました。それとフェイスブック、公式ツイッター。あとは各々のＳＮＳですね。今の企画を始めてから僕のツイッターのフォロワーも増えました。流せる情報は全部流そうと頻繁に更新しています。そうして人を集め、2012 年８月に前年と同じようなかたちで岩手に行きました。１回目に行った時は岩手県団に連絡して泉田さんには対応してもらいましたが、僕一人が 30 分くらいお話を聞かせてもらった程度だった。今回はそれじゃダメだから、岩手県団の高橋さん（当時県団会長）にお世話になり、交流会などもやった。

宿泊した遠野市では穴のあいたバケツでジンギスカンをやってもてなしてもらいました。

遠野の会員で市役所職員の方に、災害が起こった時に遠野市が果たした役割についてお話いただいて、その後交流会でした。

――講演を聞いて、どうでしたか？

仲田　復興の進み具合についての質問に対して、「進んでいないのも事実だけど、何とか進ませようとして頑張っている人がいるのも事実です」と言われたのは心に残っています。それは本当に事実だと思う。

――この時のボランティア活動ではどんなことをしたのですか？

仲田　２年目には瓦礫は大分片付いていて、津波で埋まってしまった水路のどぶだし作業が主でした。陸前高田のボランティアセンターの方に「ここを掘ったら水路があるはず」と言われて、あるのかないのか分からない水路を掘っていった。地面には塩害があるはずなのに草は生えていて、掘るのは大変でした。本当にU字溝が見えた時には「本当にあったんだ」って。15人で作業しました。

まず１日目に作業して、中途半端で悔しいから３日ともここに来ようと思いました。ボランティアセンターで「明日もこの現場でやらせてもらっていいですか」と聞いたら「本当ですか」と意外そうに言われました。続けると思わなかったみたいです。３日目には土嚢も積んで、水も流れました。その時は、香川の「かつけん」で土壌のつくり方と積み方を学んだのが役に立ちました。だから、ボランティアセンターの人が巡回してきた時も驚いていたようでした。なんかすごいことになっていると。

保住　１回目に行った時には、正直、作業前と作業後では「きれいになっているね」くらいの違いでした。でも２回目は、はっきりと違う。水があるのとないのでは。

仲田　水が流れ出した時は、感動しました。

保住　瓦礫の撤去も、果てしないけれど重要な作業でした。僕らは「思い出アイテム」とか呼んでいましたが、元の持ち主が帰ってきたら嬉しいんじゃないかというものを一生懸命掘り起こして、ボランティアセンターで洗えそうなものは洗って、プロに任せたほうが良さそうなものはそのままにして。自分らの勝手ですが、達成感の違いがありました。

仲田　60人もいると、持ってこないでくださいと言われているものまで持ってくる人もいた。確かに届けてあげたい気持ちは分かるけれど、今さら帰ってきても困るものもあるから難しかった。１年目の時は送られてきた物資を置き場がないから持って帰ってくれと言われました。手袋とか衣類とか。持って帰ることもボランティアだと言われて。

１年目も２年目も僕らはずっとカメラをまわしていて、いいのかなという気持ちもありましたが、ボランティアセンターの方は「持って帰って伝えてもらうことも大事。状況を伝えてほしい」と言ってくれた。それで、岡山に帰ってきて、ここで終わってはダメだと思ったのです。

――やっぱりキーワードは「続ける」ですね。

仲田　そう。さあ、次は何をしようと。最初から年間スケジュールはなくて、一個終わったら次のことを考えています。大体、夏休みくらいと３月くらいに何かできればと思っています。だんだん報道も減ってきて、入ってくる情報も減っている。だから、忘れられないために何ができるのかなって。チラシを配ってもお金がかかるだけで受け取ってもらえないのではないか。そこで誰かが「ポケット

ティッシュがいいんじゃないか」って言った。

保住　使えるからもらってもらえるよね。ティッシュに活動をアピールするチラシを入れました。他のボランティア団体もそれを見れば「他でもやっているところがあるんだ」と思ってもらえるかなと。

仲田　ただ、ティッシュだとチラシに比べて情報量が少ないので、ホームページのアドレスのＱＲコードを貼って配りました。

保住　過去のボランティアの瓦礫撤去の写真も載せました。「まだ僕らは続けている、みんなもやろうよ」と呼びかける意味をこめて。それが 2013 年３月 10 日です。11 日は月曜日だったから。

仲田　忘れちゃいけないのは３月 10 日だってインターネットで誰かが言っていた。被災地の仮設住宅などで暮らしている人たちも３月 10 日の晩までは、当たり前の明日が来ると思って、自分の家で暮らしていたことを忘れちゃダメなんだって。それを僕は見て、だから３月 10 日にやるんだってこじつけました。

――その時はどこで実施したのですか？

保住　岡山駅前は使えなかったのです。たまたまその日、観光スタジアムでＪリーグのファジアーノ岡山の試合がありました。スタジアム前で配るのはダメでしたが、敷地の前だったら良いと言われ、そこで配る班と駅前地下の班に分かれてティッシュ配りをしました。とりあえず電話するのはタダなので、色々なところに電話で配っていいか聞いて分散しました。ただ、風が強く雨も降り出したので早めに切り上げました。

仲田　思ったほどホームページのアクセスは増えていませんでした。むしろ東京で配った時には、仙台とか東京からのアクセスが増えました。

保住　その日はたまたま反原発のデモ行進をしていました。うちのチームの女の子がデモの前から順番に配っていきました。

――その次の活動はいつですか？

仲田　2012 年 12 月に陸前高田のボランティアセンターが閉所しています。また行こうという話になっても、陸前高田だとボランティアの受け入れ先がない。どうしようかと。その頃にはやっと福島に入ることができるようになっていたので、福島に行く可能性もありました。なんとなく、みんなの中では「作業はもういいんじゃないか？」という気持ちがあった。

保住　人から聞いた話の中で「もう被災者って呼んでくれるな」といった現地の声があった。できることはボランティアで撤去しに行くことがすべてなのか、他にもあるんじゃないのかって。例えば募金ではなくて現地の商品を買うとか。それで、旅行に行こうと思った。宿泊してごはんを食べるだけでもお金が落ちるから、いやな言い方ですけれど。雪が降る前に、10 月か 11 月に行こうと考えた。レンタカーとかを借りて交代で運転しながら行こうという案があったのと、飛行機で行って現地でレンタカーを借りる案などいくつか出ましたが、人数が集まらないし、僕も農業で忙しい時期だったので、年内には結局できませんでした。

仲田　２回、日程を変えて募集しましたが反響なし。計画していたメンバーは行きたいと思っていましたが、それだけで行っても意味がないし。

保住　「旅行というのはどうなの？」と思っている人もいたと思います。

――現地に行って、現地の人が頑張ったものを見るとか触れるとか、そこで自分たちが食事することで現地の人に還元するという部分がなかなか伝わらなかったのでしょうか。

保住　そう。ただお金を渡すのではなくて、等価交換するのは復興していないとできないはずだから、それをしに行こうと思ったのです。

仲田　いつまでも義援金で生活してもらうわけにもいかないし、現地の人もそれを望んでいるわけではない。ともに歩む良い関係を築いていくために行こうと思った。でもそれはうまく伝わらなかった。あまり広く募集すると、団体旅行になってしまい、旅行代理店の資格などが必要になる。それで身内の募集になってしまいました。

保住　計画している時はみんながノリノリで止める人間がいない。家に帰って冷静に議事録を見たら「ヤバいよな。誰がここまで運転するんだ」とか。

仲田　飛行機案になって、９月の終りに３泊４日、７万円くらいで行こうとしていた。でも７月末くらいが締め切りで、その時に何も反響がなかったのでやめようと。とりあえず仕切り直しで10月に座談会をし、５人が集まりました。「どうしようか」「でも行きたいよね」って。行ったことがあるから今どうなっているのか気になって。「行くためにはどうしよう」と考えた。

１回目２回目に行った時につくった映像を見ながらだと、いくらでも話せるんです。ただそれを自分たちの言葉だけで伝えていくのは難しいし、自分たちの記憶もどんどん風化していく。映像ならいつまでも残る。「伝える、つながる、続ける」にピッタリとはまる。たくさんの人に見てもらうために僕たちが現地に行こうと今回の企画が決まりました。

仲田　４月くらいに映画を撮ると言ったら「どこにそんなお金があるのか？」と却下されました。案としては良いかな、やってみればいいかなとずっと思っていた。

――これをするために映像制作の技術は覚えたのですか？

仲田　映像制作の経験者はメンバーの中に１人、他に１回目２回目にも同行してくれてビデオをつくってくれたセミプロの岡崎さん。あとは全員素人です。テレビでちょっとしたロケでも使うようなカメラを 10 万円くらいで買った。もう後戻りできないよって。シータという全方位いっぺんに撮ることができるカメラも買った。最初はプラネタリウムで上映するので、高田の風景が広がって見えたらいいなと。

――機材の資金は？

仲田　現状では自腹です。ビデオカメラは買い取ってもらいます。編集のパソコンは持ち寄ればどうにかなるけれど、メインのカメラは買った。レンタカー代とかは県団でみて、その代わり飛行機代とか宿泊費とか人数によるものは個人負担にしてもらった。だから 3.loveline で残っていたお金と個人負担で大体半々くらい。協賛金も募集して、もらったところは映画のエンドロールで流そうと思っています。今はＯＢの方や個人的な知り合いにお願いしていて、10 万円弱くらいは集まっています。

今、企業にも一社お願いしています。話を持っていきやすいところから持っていっています。今は「僕ら素人ですが映画つくっているのでお金ください」とも言いづらい。でも、

今回やれば実績ができるので、もし次につくるとしたら話を持っていきやすくなるのかなと思います。

――取材はどうでしたか？

仲田　１月17日～19日に７人で行きました。泉田さんに企画を説明して、陸前高田の青年団、桜ライン3.11にもつないでもらいました。

保住　どういう風景を撮る、どんな画を撮るとかを決めようとしても事前には分からなかった。行く前にここだけは行こうと決めたのは、インタビューする場所と、自分たちが作業した３つの場所。あの場所はどうなっているんだろうって気になったから。前に撮った映像データとも比較できるし。

――比較してどうでしたか？

保住　俺らがやったことは意味があったんだなと思った。要するに復旧が進んでいた。

仲田　１回目に行った場所は、震災前に工事が終わったばっかりで、田んぼを大きくして米をつくり始めようとしていたところだった。それからすぐに津波が来て、米を１回もつくらないままダメになってしまった。映画で行った時には、土壌入れ替えをして、塩があまり入っていない土を入れて、田んぼを再建する工事をしていたようです。

――その場所は2011年３月10日に戻りましたか？

保住　田んぼだけ見ても、まだかなあ。地質が元に戻ったのか僕らには分からないし。でもそのすぐそばの畑では野菜を育て始めていました。作物ができるようにはなりつつあるのかなと思いました。

仲田　１年目も、塩害で何もできないのは分かっているけれど、植えないと塩が抜けないから、枯れるのを覚悟で植えている人もたくさんいた。

保住　１年目には田んぼ以外にもう１箇所行き、山間部の林道の瓦礫を撤去しました。そこに行ったら、かなり木は伐採されて造成されて、「復興のための道路をつくっています」という看板が出ていました。僕らが作業したことによって進んだのかは分からないけれど、少なくとも僕らが瓦礫を撤去したところに道路がつくられている。良かったです。何かやろうとしていることは素人目にも分かったので。

仲田　一番分かりやすいのは、一本松のまわりの旧市街地だと思います。一年目は車などが積み上げられて瓦礫の山でしたが、二年目に行ったらかなり量が減っていて土の山になっていた。今年行ってみたら、山がなかった。

保住　瓦礫がさっぱりなくなっていて、土を段々に積んでいた。土地の高さを全体的に８メートルくらい盛り上げるんだって。８メートルって軽自動車２台半分ですよ。だから山を削っていた。

仲田　正直、僕らにはあの土地に悲しい思い出がない。その立場から言わせてもらうと、ワクワクする。新しいことが始まっている感じがして。世界初のベルトコンベアの橋で、時速60キロで土を運ぶ。山を切り出して、そこに高台の住居をつくる。そんな世界でも類を見ない工事が始まっていた。ものすごいスケールの大きな何かがあそこで始まっている。行政との関係でなかなかうまくいっていないところもあるみたいですが。

保住　映画の尺は20分。実際に撮ったのはみんなのカメラを合わせて22時間くらい。アングル違いとかで同じシーンを撮っているのも多いのですが。

仲田　22時間を20分にする作業がやっと始まったところです。3月11日まではずっと、金曜日の仕事が終わったら集まって合宿しています。まずはチラシとポスター、インターネットなどで流す予告編をつくりました。予告編はもう公開しています。映像編集ではパソコンのスペックとか互換性の関係で色々苦労しました。今日、おおまかなシナリオができました。シナリオに合わせて映像を編集して、ナレーションを入れて音楽を入れる。何とか間に合わせます。

――でき上がった映画は3月11日だけ公開するのですか？

仲田　いいえ、その後も上映できる場所を探して順次やっていきたいと思います。若干の代金をいただきながら、色んな人に見てもらいたい。全国どこにでも行きます。今想定しているのは、公民館とかチャリティイベントの一部を借りるとか、学校の授業に取り入れてもらうとか。大きい会場で人をたくさん入れるのは厳しいと思います。

――なぜ20分になったのですか？

仲田　有名な俳優が出ているわけでもないし、出ている人を知らない人は20分以上だと飽きてしまって、大事な部分が伝わらないかもしれない。身内のレクリエーションにするつもりはないので、ちゃんとお金を払って見てもらえるものにしようと思っています。もしお金を取れない場合は募金箱だけ設置してもいいかなと思っています。儲け目的でやっているわけではなく、制作費を回収したいのと、欲を言えば次の資金にまわればいいなと思っています。今回の上映会が満席になったとしても5万円くらい。幼児のお子さんは親の膝の上で見てもらうかもしれないけれど。

伝えたいのは、人と人、岡山の青年団と陸前高田の青年団の人のつながり。今回、最初は少しお話を聞ければいいかなと思って陸前高田市青年団体協議会にお願いしましたが、結局一日朝から晩まで案内してもらって、飲み会の席も手配してもらった。鍋がすごく美味しかった。岩手のみなさんには何回お礼を言っても言い足りないくらいです。僕らにできることは伝えていくことだけ。できたものを見てもらいに現地にも持っていけたらいいなと思っています。

――本当にありがとうございました。

陸前高田での取材の様子

忘れてはいけないあの日のこと

北海道夕張郡長沼町・田村　芳克

震災発生直後、道青協としてどう対応するか検討している段階で、加盟団の方で動きがあったので、道青協もそれと同時進行するかたちで、まずは義援金の募金活動を開始しました。当時は被災地の道路もまだ復旧していない状況で、お金よりも食べるものや生活に必要な物資が不足していた中、道青協はこれからどのように支援していこうかという話が出始めました。そんな時に宮城県青年会館から北海道青年会館の方に炊き出しに使用するたまねぎやじゃがいも等日持ちのする野菜が欲しいという連絡があり、募金で集まったお金の一部を使い野菜を準備し、宮城の青年会館に送りました。その後、青森、岩手、福島の仲間にも魚等の食材を送らせてもらいました。

翌年には、青年祭・青年大会両実行委員会の協力を得て、東北の日本酒やせんべい等を道青協で買い上げて北海道青年祭、全道青年大会で被災地応援ということで販売をしました。本当にわずかな額ではあるが、少しでも東北のお金の流通に貢献できれば、そして東北のものを口にすることで、北海道の参加者も震災を忘れないようにしたいということで実施しました。その際、桜ラインのPRも行い、若干ではありますがストラップの販売のお手伝いもしました。

その後、全道青年研究大会の社会部門で震災をテーマに取りあげ、分科会参加者と話し合いました。震災当時、学生で福島の郡山にいた参加者もいて、その時に感じたことなどを話してもらい、みんなで共有した。震災が起こった時はみんなすごくショックを受け、何かしたいと思いました。時が経って、震災の津波の映像を繰り返し見るのは本当につらい、でも忘れちゃいけない。でも見るのはつらい。という話があったが、それって映像を見直さなきゃ忘れたってことじゃないのではと話し、常に震災の話をしているわけではないけれど、みんな心の片隅には震災のことを思っているよねということで、決して忘れているわけではないよねっていうのを確認できました。

その中で感じたのは自分たちに何ができるのか、どんなことをすればいいのかわからないというのが今の率直な一人一人の思いではないかということです。

今年度の道青協定期大会で理事から「北海道として何か取り組むことはしないのか」という意見が挙げられたが、道青協の事業として取り組むのは残念ながら厳しい状態だったので、執行部で何かできることを考えていきたいという回答をしました。そのことがきっかけとなり、執行部役員有志で岩手、宮城の被災地視察を実施しました。道青協の公式事業ではなく、あくまでも非公式事業として東北の行けるところを視察に行こうと今年の１月５、６、７日の日程で訪れました。メンバーは田村副会長と私（吉田）と渡部局長、鈴木常任の４人で、岩手県の大槌町、陸前高田市、宮城県の南三陸町、石巻市を見るという日程を組みました。

６日に盛岡を出て、レンタカーで海岸沿いまで行きました。大槌に向かう時、ルートが

分からず山の方から降りていったところ、ちょうど仮設住宅がたくさんある地区を通ることができ、かなりの数の仮設住宅や仮設の会社を見ることができました。市街地に到着すると、想定はしていたが思っていた以上に復興がまだまだ進んでいない状況でした。津波で流された後の状況がそのまま残っていて、瓦礫だけが片付けられただけという印象を受けました。佐々木訓さんに案内してもらい旧大槌町役場や避難所にもなった公民館等を見せてもらいました。その後、陸前高田に向かいました。暗くなってしまったので途中の海岸線の状況を見ることはできませんでしたが、到着してからは泉田会長にもお世話になって、陸前高田の青年団の方と交流させていただきました。夜の陸前高田は真っ暗で、空が広く星がきれいだというのが印象的でした。その時はわからなかったのですが、翌朝明るくなってみると、その理由が分かりました。大槌町と比較すると瓦礫の撤去がかなり進んでいたので、宿の窓からみた陸前高田は建物も植物も何もない、本当に何もない、すべて流されてしまったという景色でした。しばらくの間呆然と外を眺めてしまいました。朝から津波で流された海岸付近の状況を見学し、高台に建てられるという住宅の場所やその土砂を運搬するための橋、防潮堤の予定地等を確認して、南三陸町に向かいました。

宮城では知り合いの方に案内をしてもらい、まず南三陸町の旧防災庁舎で合流し少し話を聞きました。津波から逃げ遅れた友人のことを話してくださいましたが、被災した人はみんなそれぞれに報道されないような小さな震災の物語があるのだということを伺い、「あんな津波がくるなんて誰一人として思ってもいなかった」という言葉が非常に印象的でした。途中の戸倉地区では実際にどのように津波が押し寄せてきたのかを映像と比較しながら説明してもらいましたが、私たちが訪れた日はとても波が穏やかでこの海に津波が来たとはとても信じがたいような様子でした。その後、石巻市の旧大川小学校に移動。大川小学校についてはどうして被害が大きくなってしまったのか単純な疑問をもっていましたが、実際にその場を訪れてみると、直接海に面していない地形で北上川も直接見えない山の下にあるという立地は、多くの子どもたちが津波の犠牲になるなど到底予想できなかったというのも理解できました。また、校舎跡を見ていると引き波の力がどれだけすごいのかを今でも感じられることに驚きました。

実は、今回の旅は12月末の役員会の時に話が出て、急遽決まった話でした。早くから計画していたものではありませんでしたが、都合をつけ実際に視察が実現でき本当によかったと思います。個人的には、学生の２年間を仙台で過ごしたということもあり、震災が起きてからずっと気になっていましたがなかなか行くことができていませんでした。震災からもうすぐ３年というところで、道青協の役員で実際に現地を訪れ、今の状況をこの目で見ることができてよかったです。被害の様子や被災地の状況を北海道で聞くことがあったり、テレビを見たり、本を読んだりすることはありますが、やっぱり実際に現地に行って見る、被災した地元の人にお話を聞くことが、北海道で聴く話とは全く別のものだというのを実感して戻ってきました。これから他の役員も含めて加盟団の仲間たちにも今回の訪問のことを伝えていきたいと思っています。

座談会で発言する田村さん

田村　芳克　（たむら・よしかつ）
北海道夕張郡長沼町在住　職業：建設業
1976 年生まれ 北海道夕張郡長沼町出身
北海道青年団体協議会副会長

これは座談会（2014 年２月１日）の報告（テープ起し）を元に本人たちによって文章化された記録である。

県団旅行 in 宮城

福井県連合青年団

９月 13 日～15 日にかけて、私たちは宮城県山元町へ行った。

昨年の全国青年問題研究集会で、「青年団の成り立ちは社会活動から」ということを聞き、今まで地域活動をメインとしてきたが、今おきている社会問題、東日本大震災後の現在に目を向けてみた。今回の目的は、社会問題に対する第一歩として、東日本大震災から２年たった今の状況を、メディアを通してではなく、自分たちの目で直接見たり聞いたりすることとした。さっそく宮城県団の佐久間会長に連絡を取り、齋藤緑さん（元日本青年団協議会副会長）に特別講師をお願いし、今回の旅行を計画した。

宮城県の山元町で見たもの全ては、現実ではないように感じるものばかりだった。街はにぎやかな普通の街に見えたが、まだプレハブ小屋のままの役場を見て、ここも被災地なのだと感じながら車を降りた。

被災したいろんな場所を見ることができた。

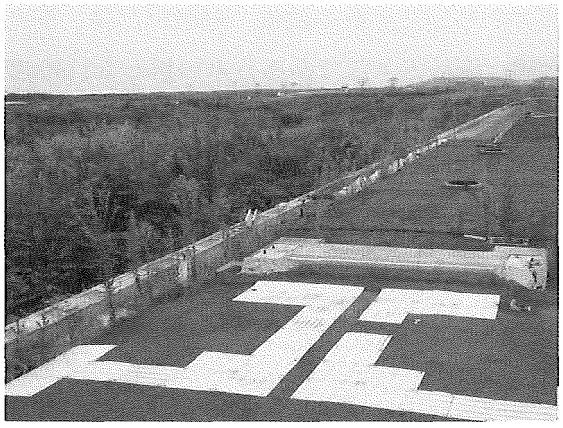


写真１

一番悲しかったのは、同町の坂元駅の風景だ。駅や住宅街があった場所が見渡す限りの原っぱだった。住宅街だったなんて信じられない光景だった。

原っぱの中に浮かんでいるコンクリートのプラットホーム（写真１）だけがここに何かあったことを証明しているようで悲しくなった。家を失った方が大勢いることは報道でも知っていたことだが、この光景を見てそれが事実として深く脳に刻まれた感じがした。

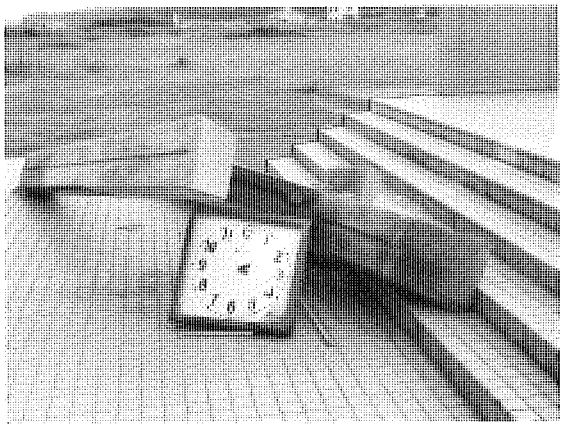


写真２

中浜小学校を見た時、まず目に飛び込んできたのは倒れた大時計だった（写真２）。３時すぎを差したままグニャリと曲がった時計を見て怖くなってしまった。学校の中はどこもかしこも信じられないくらい荒れ果てていた。天井から出た無数の鉄線、剥がれた壁、割れた鏡、流れてきたであろう木の根っこ、90度に曲がった鉄柱。震災の事実に、経験したことがないほど心を痛めながらも、どこか頭でっかちになっていた自分に気づいた。どこか遠くで起こっていることのような気がしていたのかもしれない。こんなことが起こり、被災した方の心は大丈夫だろうかと初めて真剣に思った。東北の方々の心は今、壊れてしまっていないのだろうかと思ったら立ちすくんでしまった。

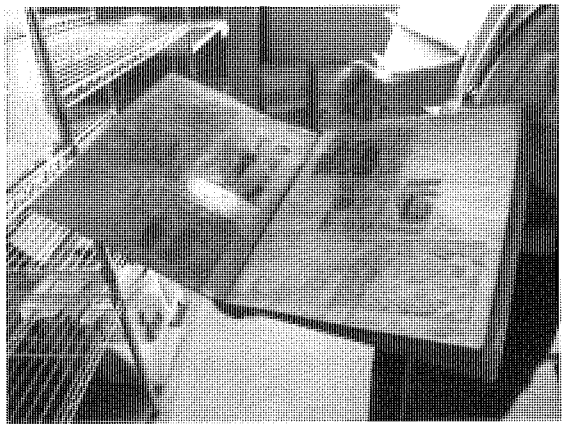


写真３

被災した場所から写真を拾い集め保管している所もあった。管理者の方は、「この間、写真の持ち主が写真を探しに来たんです」と言って一冊のアルバムを見せてくれた（写真３）。それは結婚写真だった。訪れたのは新婦さんで、新郎さんは被災して亡くなったそうだと話してくれた。涙がこらえられなくなってしまった。こんな悲しみが今でも被災地には溢れているはずだ。

そして、齋藤緑さんの話を聞いて子どもたちの心のケアもとても重要だと思った。子どもの心には悲しみや悲惨さが大人以上に染み付いているだろう。

だが、迎え入れて下さった宮城県団の方たちの明るさや活動に驚いた。みなさん、震災時の出来事を伝えようとたくさん話をしてくださった。辛く大変だった出来事を伝えようとしてくれたことに感謝している。震災時に情報を伝えるために開局した「りんごラジオ」にも感動した。２年以上経っているので、プレハブ小屋ながらも中は立派なラジオ局になっていた。あれからずっとこの街の人のために活動しているこのラジオ局を見て、いざと

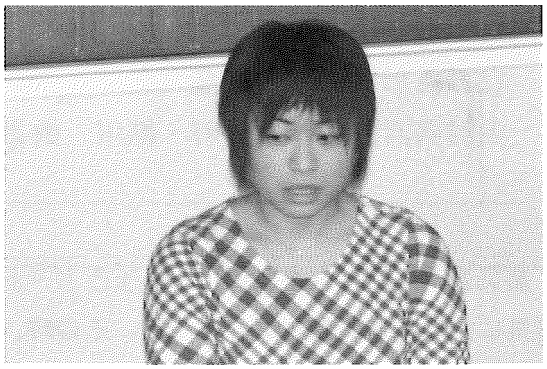
いう時、人の命を守ったり人の心を慰められるようで在りたいと思った。またこの目で見た被災の事実や、ここで教えてもらったことから自分の街を守ることを考えてみたいと思った。

今回参加して、テレビや新聞で見聞きすることだけではなく、現状を知るために現地に行き、そして現地の方から話を聞くことがとても大切だなと改めて感じた。ぜひ来年度も企画して、できるだけ大勢の青年の人たちに経験してもらいたいと思う。

私のまわりの支援活動

山形県西置賜郡飯豊町・細川　由貴

震災当時、私は京都にいて、ちょうど一ヶ月後に山形に引っ越してきました。その時、私が引っ越してきた町では毎年マラソン大会をしていましたがそれが中止になり、青年会主催でチャリティマラソンという形でできないかと例年より１ヶ月遅く６月に開催し、運営費を除いたものを義援金にするという活動をしました。私ではありませんが、青年会議所のメンバーや、県内の若手の農業者のネットワーク、お寺のお坊さんの集まりとか、いろんなところの若い世代の団体が連携しながら現地に行っての活動をいろいろしており、知り合いもかなりそこにかかわっています。ＮＰＯが中心ですが、置賜は福島と距離が近いので週末の保養の受け入れや、実際、こちらに住んでいる方のコミュニティづくりという話もあり、その運営の手伝いをしている人もいます。昨年度、今年度に、宮城県団のみなさんにもお世話になりながら視察研修に行ったり、東北大の石井山先生にご協力いただいて『生きる』をテーマにした勉強会を隣町の青年会で取り組んだりしました。



座談会で発言する細川さん

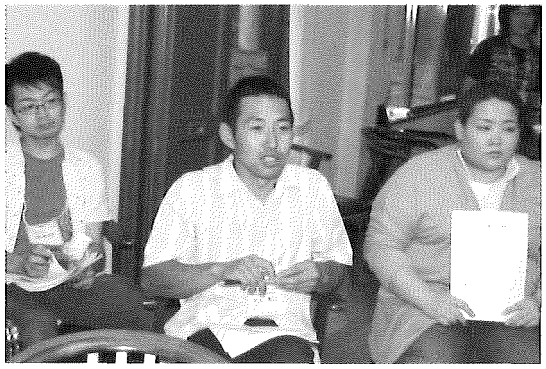
細川　由貴　（ほそかわ・ゆき）
山形県西置賜郡飯豊町在住　職業：公民館職員
1987 年生まれ　静岡県浜松市出身
山形県連合青年団事務局次長

これは座談会（2014 年２月１日）の報告（テープ起し）を元に本人たちによって文章化された記録である。

北海道・東北ブロック研修会
北海道・東北青年団連絡協議会

2013 年６月 29～30 日、福島県猪苗代町で平成 25 年度･北東ブロック研修会＜ワカモノしゃべくり研修ホクトーーク!!＞が行われた。幹事県は福島県連合青年会、参加者は全部で 29 人で、内訳は、北海道２人、青森２人、岩手３人、宮城３人、秋田１人、山形２人、群馬３人、福島６人、日青協役員３人（福井１人・北海道２人）、日青協事務局員２人、講師２人だった。この中には、東日本大震災の津波被害を受けた東北沿岸地域から来た人､『生きる』第１号・第２号に震災の体験手記を寄せた人も含まれている。

研修①（29 日 16 時～18 時 40 分頃）は､『生きる』第２号を活用した分科会として、福島を中心に今回の研修会参加者が書いた手記を共有した上でグループ討議と全体討論が行われた。研修②（29 日 18 時 45 分頃～19 時 40 分頃）では、福島県連合青年会ＯＢで浪江町出身の志賀重夫さんの講義と福井県出身の山田絵美子さん（日青協常任理事）のコメントを受けて全体討議が行われた。



福島や被災地の現状について

～『生きる』手記をもとに～

いくつかの手記をあらためて読みあった上で、３つのグループに別れ、そこで各々が思ったことや疑問を率直に出し合っていった。そこで出た声を「地震と津波」「原発・風評被害」「震災後の活動」の３つに分類し整理した。その概要を以下に列記する。

【地震と津波】

・地震がすごく長く感じた。逆に津波が来るのが速かったと思った。

・当時、津波が来ていることを知らなかった。

・地震直後、停電、情報なしのなかで、どうして津波が来ると分かったのか。

・各地の地震の体感はどのようなものだろうか？

・地震後の行動、活動は？

・一瞬の判断、生死を分けたものは？

・避難行動を知っていたのか？

・消防団は地震に対する訓練を、どのくらい、何をやっているか？

・どこまでが消防団としてやること？市民としてやること？

・震災の際に、これ（物）があってよかったと思ったものは？

・避難所での生活とは？人間関係はどうだったのか？

・実際の仮設住宅の暮らしは？その中で青年団は何ができるのか？

・震災後、青年会のことを考えたり活動を再開したのはいつ？どういうきっかけ？

・当時、青年団が行えたことは？出来なかったことは？

・震災時における個人と公人（消防団・公務員）の役割と判断を誰がどこですべきか？

・福島の原発事故の現状は？

・福島の沿岸部の状況は？地震、津波被害？

・大震災を経て、良かったものは？

・震災から２年経過して気持ちや記憶の持ち方に変化は？

・報道と現実との違いは？（テレビ、ラジオの報道と違うなと思った）

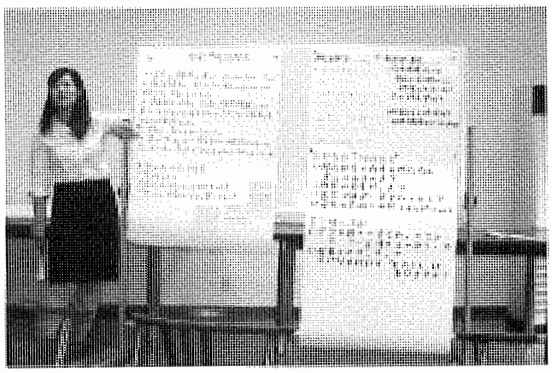
・今、やっておくことは？

・青年団活動をやっててよかったことなど感じたことは？

・自分が同じような状況になった時、どう行動するか？

・忘れてはいけないと思う反面、思い出したくないとも思う。記憶の持ち方を、今後どのようにとらえていけばよいのか？

・風化してしまう。忘れてしまう恐怖。歴史繰り返している現状の中、気の緩みで明暗がわかれた？時間がたつとどうなるのだろう？



【原発・風評被害】

・現実と報道の違いに驚かされた。今も！

・風評被害は今はどうなのか？あまり話題にならなくなったが、どうなのか？

・風評被害に対してのとりくみ方がすごい。自分達に何ができるのか。

・風評被害、たいへん。

・風評被害でいちばん悩んだことは？
・山形でも山菜などから出ることがある。
・消防団活動、浜通り（原発避難）されて来た方の受け入れをするのに「スクリーニング検査」をするように案内をした。
・（風評は）特に、気にしていなかった。
・店に出ているということは安全性が確認されていると思っていた。今はどうなっているのか知りたい。
・福島第一原発について周辺地域の方々が事前に安全性について認識があったのか？その対応策は？
・風評被害の内外の感じ方の違いはあるのだろうか？
・原発は必要だったのか？
・震災で誰が一番かわいそう？
・節電の意識、再生エネルギーについて。
・仕事とボランティアの区切りをつける「ものさし」はあるか？
・節電についての意識、再生可能エネルギーどうなのか？
・消防団は自分たちも被災しているのに、やらなければならない場合があるが、どうすればいいのか？
・放射能の恐怖と戦いながら、今、携わっていかないと終息できない現実がある。今も、そこで働いている人がいることをどう考える？

【震災後の活動】

・震災を経て一番、変わったこと？また一番、今何をして欲しいか。
・震災を経験して、気持ちが変わったことは？
・農業の復興はどれくらいできていると思うか？
・会津若松などで復興イベントするのも無駄ではないのか？
・他県の人や今の政治社会経済などを見てどのように感じるか？
・読んだり聞いたりしていろいろ考えたりはするが、何と声をかけていいのか分からなくなることがある。どんな言葉も他人事を言っているようにしか聞こえないのではと不安。
・ボランティアとして参加。
・被災地の名産品、特産品を取り寄せて青年祭で使用している。
・主催事業での募金活動。
・他県ではどのようなことをやっているのか、聞きたい。
・チャリティーコンサートで募金を集めた。
・避難訓練。避難の大切さについて伝えた（地震、津波）。
・資源、物の大切さを伝えた。
・被災地の人たちのために物資集め（服など）。
・被災地視察（現地の様子、現状を知る）。
・避難所での手伝い。
・復興活動（がれき撤去）。
・ボランティア活動。
・開店準備。
・文化祭、お祭、大会などの出演、開催。
・津波到達地点に植林、後世に伝える。
・市長との意見交換会。
・平常時から青年団を通して自然と養われていることがある？苦しい時こそ青年団やっていることで元気になり、周りに発信していけるのでは？

【全体討論より】

・もともとのコミュニティがあり、震災直後は助け合った。規律正しかった。学校では校

長先生がとりしきった。20～30代で動ける人もいた。誰かの指示でうまく行動することもできた。

・個人とは別に公人としての行動について、客観的に見て危ないという状況ならば周りがとめてあげなくてはいけないのではないか。例えば、強制力のある退避命令も必要な場合があるのではないか。

・メディアや報道の伝え方に問題がある場合もある。本人に確認してもらえればよかったこともある。

・被害や風評被害を判断する根拠が自分の手にない場合、何を頼ればよいか？メディアが疑わしいとすれば、自分で調べることだが、それには時間とお金と知識が必要だ。

・原発は結局、必要だったのか？資源がないから必要なのか？あってあたりまえなのか？

以上の分科会と全体での討論を受けつつ、研修②として志賀重夫さんの講演（本誌第１章参照）と山田絵美子さんのコメント（本誌第１章参照）が行われた。志賀さんの講演に先立ち、進行役の辻智子が次のような問題提起を行った。

「先ほど、『原発は必要だろうか？』『必要だったと思うか？』というストレートな問いがありました。この問いを受けとめて私たちが学習の場ですべきことは、『必要か、必要ではないか』という答えを出すこと自体というより、この問いを各自が考え判断するための材料や根拠、視点を出し合ってみることなのだと考えます。こういう視点から考えるとどうだろうか、ああいう視点から考えてみるとどうか、というように、一人ひとりがこの問題と向き合って自分の意見なり、あるいは一票を投じる際の自分の意見なりを持つための判断の根拠や材料や視点というものを、いかに広げて持てるか、そのなかで自分は何を重視するのか、と悩み考えることです。実際には、出し合えば出し合うほど矛盾することも多いのですが、そのなかで自分は何を優先したいか、何を一番大事にしていきたいと思うかを問うことが求められます。それぞれが自分の価値観や判断をもとに何かを『選択する』＝『捨てる』ことをしなければならない場面があるわけで、その学習＝思考の試行錯誤が決定的に重要なのだろうと思います。難しいのは、原発や放射能の問題というと、どうしてもそれを理解する知識や事実を把握する術を『専門家』(専門家と言ってもいろいろな立場や意見があることを前提とした上で)に教えてもらうということにならざるをえなかったりして、『素人』には近づきにくい、手が出せないと思わせる点にあります。けれども、それに対して、どこでどういう手がかりをつかむことができるか、自分が信頼できると思える情報をどこに求めていけばいいのかという見きわめをすることもまた大切になってくるのだと思います」。

つづく講演・コメント、質疑応答・全体討議は時間をオーバーし、そのまま交流会へと移った。そこではさらに自分たちの地域と青年団活動の現状も含めた意見交換が行われた。

（まとめ　辻智子）

「福島で学ぶフィールドワーク」の記録

10 月 19 日、日青協は福島県内での第２回理事会にあわせ、いわき市内で「福島で学ぶフィールドワーク」を開催した。被災地の視察や住民から体験を聞くプログラムに日青協執行部や加盟道府県青年団の役員など約 70 名が集った。

フィールドワークの実施にあたり、日青協は５月に開催された第 63 回定期大会で、加盟道府県青年団とともに事業概要について議論を交わした。元々機関会議である理事会を福島県内で開催するのにあわせてフィールドワークを計画したため、定期大会に出席した道府県青年団からは「理事会への影響はどうか」「審議自体が疎かになるのではないか」「なぜこのタイミングで福島でフィールドワークをするのか」と、反対の声も実際に聞かれた。当時執行部では、震災の記憶が時間とともに薄らぎつつあることに危機感を抱き、このような時だからこそ、次代を担う地域青年が震災の歴史と経験を継承していくためにも、福島県を訪ね、震災の実相に学び、地元の人々と交流し、福島からそれぞれが地域に戻った時に、今後の学びと実践を進めるきっかけを共につくっていきたい、と説明し理解を求めた。それでもなお反対の議論が飛び交う中、執行部からの呼びかけに対し、「現地を訪問することはよいことだ」「震災を風化させたくない執行部の思いをしっかり受け止めたい」と賛同の声が少しずつあがっていった。こうした声に後押しされ、福島でのフィールドワークと理事会は実現した。

19 日朝、ＪＲ東京駅で参加者を乗せたバスは、一路福島に向かった。震災直後住民の身体表面の放射性物質の付着量を測定するスクリーニングのために福島県に派遣された石井昌志常任理事は車内で当時の様子を報告した（詳細は右）。いわき市では「道の駅よつくら港」の白土健二駅長から道の駅の復興までの過程を学んだ。また、同市久之浜地区では、小学校内に建てられた仮設住宅の「浜風商店街」を訪ね、震災当時の様子を聞き現地の住民と交流した。フィールドワークの最後は、津波により被災した久之浜地区の沿岸部で「私たちの誓い」を参加者全員で確認した。

なお、フィールドワークは特定非営利活動法人 3.11 被災者を支援するいわき連絡協議会に当日の案内を含めコーディネートしていただいた。浜風商店街の訪問にあたっては、久之浜町商工会の協力を得た。

東日本大震災直後の福島県に派遣されて

石川県羽咋（はくい）市・石井　昌志

2011 年３月 11 日に東日本大震災が発生した時、自分は病院内で仕事をしていました。当初は緩やかな揺れに感じましたが、テレビに東北の状況が映し出されると、唖然となったことを覚えています。そして同時に能登半島地震を思い出し、医療派遣の可能性を考えましたが、被災地が石川県から遠いことから直ちに出動することはないのではと考えました。続いて飛び込んできたのは福島原発に被害があり、放射線が漏れ出ている可能性があるとのニュースでした。日本各地に医療派遣できる病院は多くありますが、被ばく医療に関する病院は少なく、県内には三病院、現状で派遣できる病院は当院だけ。さらに４号機の建屋が吹き飛ばされ、放射性物質が漏洩、近隣住民が被ばくしているとの判断から 15 日に派遣が決定し、16 日より福島で活動することになりました。

16 日は午前 10 時に病院を出発、石川県庁で派遣証明書を受け取り、福島県を目指しました。通行規制もあり、福島県に入ると道路は陥没や崩落している場所があり、車で７時間かけて慎重に現地に向かいました。福島県庁にある災害対策本部に到着し、明日からの日程の確認を行って、宿泊施設に入りましたが、電気はあるものの水道は遮断されていました。ベッドで寝ていても何度も揺れを感じ、疲れているはずでしたが、不安でなかなか寝付けませんでした。

17 日は、派遣先の西郷村（にしごうむら）に向かいました。役場横の本部でサーベイメーター（携帯用の放射線測定器）を使用して避難している住民や役場の方々が被ばくしていないか、放射線源は付着していないか等の検査を順次行いましたが、原発からの距離が遠いこともあり、異常な値が出る人はいませんでした。消防団員も多く検査しましたが、問題がないことがわかると安心した笑顔で「また各家を見回ってくる」と活動を続けていました。日が落ちてからの活動は危険であるため禁止されており、16 時には災害対策本部に戻りましたが、行く時はガタガタであった道が帰りには平らになっており、日本の土木技術の力と対応力を知ることができました。また各派遣隊からの報告では、双葉町の老人ホームから避難してきた寝たきりの老人がバスに置き去りになっていたことが伝えられ、助けられた命と助けることのできなかった命があるという、大規模災害ではどうしようもない厳しい現状を実感しました。

18 日は郡山市総合体育館での活動でしたが、体育館の窓はすべて割れており、防護服を着て行いました。郡山市には原発に近い南相馬市などから避難してきた人も多く、やはり問題がないとはいえ通常よりは高い数値が出ました。検査に来た子どもが自分の家の住所を書こうとした時、隣にいたお母さんが「そんな住所を書いてもそこにはもう何もないよ」と聞いた時は、無力さでいっぱいになったことを覚えています。災害派遣は基本的に２泊３日と決まっているため、この日で活動を終え石川の病院へと帰還しました。

今回、自分に何かできたかといえば何もできなかったのですが、放射線についていろい

ろな風説が飛び交い混乱のまっただ中で活動を行う中で、得たことがいくつかあります。その一つは顔を合わすことの大切さです。検査中には「おまえらは政府の手先だから、信用できない。どうせその数値も誤魔化しているだろう」と言われました。一般の人にどう説明していいのか分かりませんでしたが、「私たちは放射線についてそれなりに勉強しているし、ここの危険性も常に確認している。ここが安全だからこそ、私たちはここで活動している」と説明すると、「なるほど。確かにおまえらはここにいるな」と言って納得された顔になりました。実際に顔を合わせ、言葉を交わすことはテレビの中のどんな高名な先生の説明よりも説得力を持つことがあります。また、あらためて地域のコミュニティの重要さを感じました。いざという時、真っ先に動けるのは青年層であり、各地で率先して避難所の設営や高齢者の見回り、物資の確保や分配などを手伝っているのを見ることができました。災害時に気づかされたことですが、この二点は青年団であれば当然のことです。この当たり前のことを当たり前にできる青年団の必要性を強く感じる医療派遣活動となりました。

日青協定期大会で答弁する石井さん

石井　昌志　（いしい・まさし）
石川県羽咋市在住　職業：会社員
1976年生まれ　石川県羽咋市出身
日本青年団協議会常任理事

頑張る人の笑顔あふれる
～浜風商店街の訪問～

太平洋に面するいわき市久之浜町（ひさのはままち）は、津波と火災で町の商業地域が一瞬にしてほぼ壊滅的状況に陥った。だが、自分たちが元気になり、訪れた人も元気になる商店街をつくろうと、震災から半年を迎えた2011年9月3日、多くの人が立ち上がり、震災による仮設住宅商店街第一号として久之浜第一小学校敷地内にオープンした。現在は食堂や魚店や酒店、電器店など10店舗が入居し、地域の暮らしを支えている。現在も県内外から多数の訪問が続いている。

フィールドワーク当日、参加者は商店街のみなさんが用意したお茶やコーヒーのおもてなしを受け、当時の様子を聞いたり買い食いをしながら談笑したりと、限られた時間を住民とふれあった。商店街のみなさんは「本当に来てくれてありがとう。また来てくださいね」と大きく手を振りながら見送った。

■浜風商店街ウェブサイト
http://hisanohama-shops.com/

手をふって見送る商店街の方々

写真を見ながら震災の被害など語る

参加者から寄せられた感想

テレビだけでは分からなかったこと

岩手県青年団体協議会
松田　恵美子

テレビでは福島第一原発のことのみ大々的に報道されており、放射能や汚染水等の話はよく聞くが津波についての情報はほとんどなかった印象でした。それまで津波がどの規模で・どの位の被害をもたらしたのか把握していませんでした。申し訳ないことに、自分から情報を得るということもしておりませんでした。

フィールドワークに参加し、あの大震災から３年が経とうとしているのにもかかわらず、復旧にまったく手が付けられていないと感じました。自分の住んでいる高田は津波被害のあったところは更地になっていますが、福島久ノ浜の海岸では家の基礎や塀の一部などがそのまま残っているところもありました。

まずは目の前にある自分の青年団活動をやっていくだけで精一杯でした。陸前高田市では青年芸能祭の会場も流されてしまいましたが、何とか継続していきました。もしこれから自分たちに協力できることがあればしていきたいと思います。

我々はもう歩みはじめている

宮城県青年団連絡協議会
佐久間　祥平
武藤　順子

正直に言うと、今回の第２回理事会時のフィールドワークにはずっと疑問を感じていました。窮屈な日程になるのではないか。理事会は疎かにならないのか。理事は怖がらずに福島に入るのか。いわきの方々は我々の視察を快く受け入れてくれるのか。

今回視察した福島県いわき市の四ツ倉地区は、我々も震災後初めて訪れることもあって、隣の県とはいえ非常に興味を持っていました。もちろん不謹慎な意味ではありません。被災当時は、わざわざ被災地に行きたいとは思いませんでした。身近なところで眼に入ってきた光景だからです。しかし、復旧・復興が進んできている今、四ツ倉では当時からどのような変化があったのか気になったのでした。

当日、我々は北東ブロックのメンバーで昼食を摂りながら全国の理事を待っていましたが、やはりみんなの顔を見るまでは不安でした。ある程度の人数は集まったと聞いていましたが、当日キャンセルの可能性や、同じ北東ブロックの県として福島に対して良い印象を持って帰ってほしいとの想いなどがめぐりました。もちろんそれは我々の取り越し苦労に終わったと思っていますが、始まるまでの思いは複雑でした。

印象に残っているのは、当事者のみなさんのお話すべてといって良いと思います。我々も宮城でいろいろな受入事業を行なってきましたが、参加者に話を聞くとほとんどの方が「現地を見たこともそうだが、現地の方々のお話が心に残った」と言ってくださっています。

今回のフィールドワークの舞台となった福島県は、我々の住む宮城県、そして岩手県とともに被災３県とよく称されます。震災後約３年間そう呼ばれていますが、そろそろこの括りは外してもらえないかと思うことがよくあります。もちろんこの震災は忘れてはならないし、これから起こると予想される南海トラフなどの地震が起きた時の対応の参考にしていくことになると思います。

しかし、我々はもう前に歩みはじめているのです。今後は日青協として何らかのプロジェクトをやっていったらどうかと思います。それは被災地域中心の取り組みではなく、日本全体でできる取り組みです。未来の青年たちにつながるものを残していければと考えています。

もっと早く行けばよかった

群馬県青年■連合会
天笠　荘一

東日本大震災の当日、工場勤務の私は、夕方からの勤務を控え自宅の居間でテレビを見ていました。そろそろ出勤の準備を始めようかと思っていたときに揺れが来ました。最初、すぐにおさまるだろうとタカをくくっていましたが、さらに揺れがひどくなりいつもの地震と違うと感じました。築35年の木造の自宅がぎしぎしときしみ、もしかして潰れるのではと一瞬頭をよぎりましたが、様子を見ようと家の中で一番柱が密集していると思われる、家の中心に移動して柱に掴まっていました。

揺れがおさまって、家の状態を見ても特に被害がありませんでした。また、地震に伴い、停電が発生していた所もありましたが、自宅の周囲は停電がありませんでした。どこが震源地なのかと思いテレビをつけていたら、東北が震源地でかなり大きい地震であったと放送していました。各地の情報を映像で流していました。その中で、気仙沼漁港の様子で、海面が徐々に浮き上がってきた様子を見て自分が思っていた津波と違うなと思っていました。今から思うと津波の前兆だったと思います。

そこで出勤時間となり、会社に向かいました。太■の町はいつもと変わらないように思えました。会社に着くと、従業員は全て工場の外に退避したままで、聞けば停電で全て停止してどうにもならない状態でした。工場内の安全確認も出来ないため工場にも入れず、次の日に電気が来るのを待って、停電操作をするということでそこで帰宅となりました。

幸いなことに自宅は停電の影響を受けていませんでした。11日の夜、テレビでは津波の映像を繰り返し放送していて、昼間見た映像はほんの始めの瞬間でしかないことを思い知らされました。そして、気仙沼だけでなく東北の海岸線一帯全てがとんでもない状態であったと認識させられました。その夜は妙に興奮して眠れず、繰り返しテレビから流れる津波の映像を流していたと思います。

夜が明けて、昨日のことがなぜか嘘っぽく思えて、冗談であればと思いながらテレビをつけるとやはり津波のことを放送していて現実に引き戻されました。その日は、

とりあえず会社へ出勤して停電が復旧してから工場の停電操作を行い、稼働の目途が立たないので帰宅、自宅待機となり、二日後にまた連絡するとか、細切れで自宅待機を強いられました。

２、３日すると、インターネットやテレビで色々な支援や援助活動が少しずつ紹介されてきて、自分も何かできることがないかと考える日が続きました。会社は相変わらず自宅待機状態でしたが、二日ほどの期間で区切るのでまとまった時間がとれず、直接ボランティアに行くことをためらってしまっていました。そのうちに工場が稼働することになり、よけいに直接行くことが難しくなってしまいました。また、福島の原発事故を見て、自分が行っても何も出来ず足手まといになるだけだと思う一因になったと思います。結局、その時に出来たことは、日青協がまとめていた募金活動に募金しただけになってしまいました。

そのあとは、計画停電やら県団のことなどで、2011年は忙しく震災に関することは、後回しになっていきました。2012年に日青協が宮城県で研修会を開催したとき、震災後初めて東北に行きました。仙台市だけだったので多くは見られませんでした。

福島理事会で被害地域に行くのは２回目となりました。昼間の移動と高速道路から見る景色や海岸線を実際に行くことで多くを見ることが出来ました。もっと早く現地に行けば良かったと感じました。更地になっているところや仮設住宅を見て、まだまだ自分たちに出来ることが残っているし、継続して支援していくことが求められていると感じました。今は、自分に出来ることを探りながら、他の青年団員を巻き込み、少しずつでもいいから継続する協力をしていきたいと考えています。

大切なのはこれから

石川県青年団協議会
宮　義一

今回は震災後３度目の東北入りとなりました。１度目は2011年12月、元日青協副会長の山田美香さんと石川県青年問題研究集会の基調講演についての打ち合わせをするため宮城県を訪れました。海岸沿いの凄惨な状況、また山田さんの「家の二階に避難した時、家族を紐で縛った。流されても同じ場所で発見されるように」との話が今でも心に残っています。雄勝町や女川町では重機の音だけが鳴り響き、車のナビでここに何かあると教えてくれるが実際には何もなく、本当はここには建物があり人が生活していたのだなとあらためて思いました。

２度目は2013年７月、県団の社会活動の一環として岩手県陸前高田市を訪れました。震災から２年以上が経過していたが全く復興が進んでいませんでした。大きな街から優先的に復興が進んでいるとの印象を受けました。そんな中でも地元の青年団の津波の到達地点に桜の苗木を植え、後世に津波の悲惨さを伝える「桜ライン3.11」は、青年団だからこそできる事業であり青年団にあらためて誇りを持つことができました。

そして３度目の今回。凄惨な状況は２年半経っても復興がなかなか進んでいないと思いました。同じ町でも原発から30キロ内のギリギリの地では境界線をはさみ住んで良いところと悪いところがあったことには驚きました。ニュースなどでよく同心円の

ように表示されている立入禁止区域付近の住人は大変な生活をし、故郷を去った人も多数いるそうです。

よく被災地を忘れないでほしいと言われますが、そのことを強く感じました。2020年に開催するオリンピックに向け、日本中がある種のお祭り騒ぎになっている一方で、進まない復興があります。被災地の沿岸部には朽ち果てた家屋が残り、街中でも空き家が目立っていました。このことを忘れずに被災地の人の生活を少しでも元に戻すことができるよう努めなければならないと感じました。　そんな中でも、そこで生活する人は明るく前向きに暮らしていました。人の力強さ、たくましさを感じ、私たちも力をもらいました。

福島理事会の開催が決まった時、なぜ今更被災地なのかとの疑問を感じました。しかし結果的にみれば、参加した道府県のみんなは困難な現状を知ることができたと思います。大切なのはこれから（未来）であり、全国の青年団が何をしていくのかを話し合っていきたいです。そしてフィールドワークを通じて学んだことを県内の加盟団に今後も訴え続け、復興の助けとなる運動を展開していきたいと思います。

「キッカケ」つくり発信していこう

岐阜県青年団協議会
片桐　充弘

震災発生から２年半。時間が経つにつれ復興の報道が少なくなる中、今の状況は…。震災が起こるたびに考えさせられる「時間がたつと情報が入らなくなる」という現状…。そんな中で「福島で学ぶフィールドワーク」がありました。

個人的には、1997（平成９）年ナホトカ号重油流出事故、1995（平成７）年阪神・淡路大震災、2004（平成16）年新潟県中越地震など現地で見て復興支援活動を行なってきましたが、津波での災害は目にしたことがなかったのでどのような被害が出たのだろう、また福島第一原発の問題等の話も聞ければと思い参加しました。

いわき市久ノ浜地区で、生活感が残っている建物の跡、円形のまま45度に曲がっている水道管や門柱などを見て津波の恐ろしさを感じました。そのような中、プレハブで営業されている商店街などを見ると、被災地の人々の復興への想い、希望を感じとることができました。まだまだ一人でも多くの人たちの力が必要だとも感じました。

青年団として災害復興活動はおこなっていかなければならないと思います。自分の周りにも、現地に行きたくても行けない、何かをしたい、しなければならないといった様々な想いを持つ人がいます。今回の「福島で学ぶフィールドワーク」参加は、自分にとって被災地にいく「キッカケ」でした。青年団活動の経験者としていかに「キッカケ」をつくり発信し伝えるか。これが復興につながることだと思うので、全国の仲間の力を借り発信していこうと思います。

あらためて地震の備えを

静岡県青年団連絡協議会
朝原　桂子

福島でのフィールドワークのちょうど1週間前、私たちは県団事業で岩手県陸前高田市を訪れました。そのこともあり、岩手県と福島県の被害の状況はどれくらい違うのだろうと思っていました。

はじめの印象としては、岩手県と比べて津波の被害は大きくないように感じました。しかし、現地の方から火災での被害や原発による一時避難があったことを聴くことで、岩手県とはまた違う状況を知りました。

浜風商店街の方々が温かく迎えてくれたことは嬉しく思いました。また、商店街の中で写真を見ながら聴いた当時の様子はとても迫力がありました。震災の復興状況の情報などが少なくなりつつある中で、現地を訪れ現地の人から話を聞くことはとても勉強になり、有意義な時間となりました。

私たち静岡県団も東海地震に備えることを改めて学習する機会を設け、県の防災センターへ行きました。そこで静岡県でも防災に備えたセミナー等が行われていることを知りました。

毎年地域で防災訓練が行われていても、私自身中学生の時以来参加する機会がなくなってきています。地域との関わりをもっと持ち、もし地震が発生した時に的確に動くことができるように対策ができればと思いました。そして、地震に備えて自分たちにできることを日頃から考えておくことが必要だと思いました。

逆にこちらが元気をもらった

愛知県青年団協議会
神谷　幸典

参加する前は、震災から2年以上が経過し、原発にはいまだ近寄ることもできないが、その影響が薄い地域では復興が進み、元の居住地に帰ることが可能になっているのではと思っていました。

フィールドワークで印象に残っていることは、未だ家の基礎がそのままの沿岸部。そんな環境の中でも浜風商店街の方々もみないきいきとされていて、逆にこちらが元気をもらいました。みなさんには本当に歓迎していただき、こちらが恐縮しました。遠方からお邪魔することで元気を与えられているのかなとも思いましたが、このような方たちのためにも、支援活動を継続しなくてはとあらためて思いました。

その後、県内の加盟団の事業等に行く際には、写真を交えて自分の見聞を伝え、福島の現状を理解してもらうとともに、やれることを継続的にやっていこうと話しました。少しでも支援できるよう、福島の農園からジャムを購入するなどを始めています。また、3月には県団役員数名で福島に行く予定です。今後も現地の方々と直接話をする機会を設けていきたいと思います。

つながる想い

滋賀県青年団体連合会
藤原　麻美

今回が２度目の東北への訪問となった福島県でのフィールドワーク。当初、私は福島県での理事会開催に対し疑問というか、違和感というか…どこか腑に落ちない感覚を持っていました。東日本大震災から２年半、失われた日常生活を取り戻そうと懸命に努力しておられる中に『視察』などという名目で私たちが踏み入れてよいものなのか、被災地の方々の目にはどう映るのか。半年前、初めて被災地を訪れた時、自分自身の半端な覚悟と気持ちを痛感したからこそ、なおさら戸惑いがあったのかもしれません。

今でもその疑問が無くなったわけではありません。それでも今回福島を訪れ、本当なら話したくない、思い出したくないであろう体験を、私たちに懸命に伝えてくださった方々の想いとどう向き合うのか、自分なりに考えさせられる大切な時間をもらえたように思います。「マイクで話すのには抵抗がある」被災者の方のこの言葉が、今なお私の中に強く残っています。

震災後、「絆」や「つながり」の大切さが取りざたされましたが、震災から３年が過ぎようとする今、どれだけ日本社会に、そして私たち自身の中に残っているのでしょうか…。フィールドワークを通して、自分の中で何かが劇的に変わったかというとそうではないし、被災地へ度々足を運び何かができるわけでもありません。私たちにできること。それは自分たちの暮らす地域で日々をしっかりと生きることであり、気付かせてもらった大切なものを見失わないこと。微力だけれども確実に、心の中に刻んでいきたいと思います。

押しつぶされるかと思った

和歌山県青年クラブみなべ
中早　洋行

「憂鬱」一言で言うとこの言葉。今回参加するにあたって、今までどこか避けていたことと向き合わなくてはいけない。テレビで見るモノと自分の目で見るモノ、大したものでは無いかもしれない。でも、避けていてはいけない…この機会を逃すと当分ないだろうとも分かっていました。そんな不安が頭の中をグルグルしたまま参加していたと思います。

段々と現地に近づくにつれ、少しずつ違和感を持ちました。最初「田舎ってこういうモノかな」とも思いました。しかし、何かが違います。気になっていたのは「景色」でした。それは単に田舎のってモノじゃなく、うまく言えないけれど…見ているだけで涙が出そうで、堪えるのに必死でした。その必要はないのかもしれません。でも、自分の中で何かが違うと判断していました。もちろん少しずつ復興に向かってはいるが、やはり元に戻るのは本当に難しい。でも、直していかないと。そんなモヤモヤした状態でした。

今回、より深く地震に対する恐さ、その後の怖さを知ることができました。その恐怖に心が押しつぶされるかとも思いました。でも、見たもの、感じたことをありのまま

に周りの仲間に伝えることができたのは、今回参加した中で一番良かったことです。あれから地域の避難訓練はもちろん、色々なことに今まで以上に真剣に取り組めるようになったと思います。

これで終わりにするのではなく、現状維持ではなく、もっともっと貪欲に色々経験し、青年団の仲間だけでなく、より多くの人と関わりを持てるよう努力したいと思います。

文章の中に相応しくない言葉があったかもしれません。この場をお借りしてお詫び申し上げます。またこんな機会（福島で学ぶフィールドワーク）をいただいたことに感謝申し上げます。

あの時感じたことは絶対に忘れない

鳥取県連合青年団
中村　美香

私はフィールドワークに参加するまで、今福島がどうなっているのか全く想像がつきませんでした。それは、震災から２年半が経った今、メディアで現地の様子が報道されることが少なくなってきているからです。実際に現地を見て、テレビの映像で見るより本当に衝撃を受けました。復興しているのはほんの一部分で、今回私たちが訪れた久之浜地区の元々住宅地だったところは未だに荒地の状態で、完全なる復興まではまだまだ時間がかかると思いました。

正直に言って、青年団をやっていなかったら、こうして被災地に行くことはなかったと思います。誰かに伝えないと参加した意味がないと思い、自分が被災地で見てきたもの、感じたことを県青研の活動報告の時間をつかって参加者に報告しました。時間が経つにつれて記憶や想いは風化していってしまいがちです。私は今回被災地で見てきたもの、そのとき感じたことを絶対に忘れたくないと思いました。

自然の力の脅威

岡山県青年団協議会
渡邊　誠
青井　麻由美

岡山県青年団協議会では、過去に２度岩手県陸前高田市に災害ボランティアを派遣しており、その参加者の体験談などを聞くことにより、漠然とですが、被災地＝危険というイメージはありませんでした。しかしながら、今回のフィールドワークで被災者の方々と会うとなると、ちゃんと受け入れていただけるのかという不安はありました。

今回のフィールドワークで一番印象に残っているのは、津波でえぐられた山肌です。本当にこんな高さにまで津波が来たのかと自然の力の大きさに恐怖を覚えました。

岡山は災害が少ないというイメージもあり、残念ながら今のところ、地元で防災、減災に向けた活動などは行うことはできていませんが、なるべく早いうちに、減災のための勉強会など開催したいと思っています。

精一杯、生きていく

香川県連合青年会
十河　由人

震災後はじめて被災地に足を踏み入れました。映像では何百回も目に映った光景なのに、その場に立つと別世界のようでした。日常の当たり前の風景がそこにはありませんでした。あったのは、家の土台と海から陸の方へ傾いた錆びれた鉄筋だけです。

私は消防士として今までに何千回と悲惨な現場に遭遇しましたが、その経験の中でも見たことがない、すさまじい情景でした。自分自身に今、何ができるのか。全国の青年たちが被災しているのに。義援金というものだけで本当に良いのか。自分の生活・仕事等もある中で。

私は、見つけました。今、自分の置かれた状況の中で一生懸命「生き」、青年会活動を生き生きとしていくことが、全国の青年に元気を与えていけると確信しています。

今後、被災された仲間に会った時には「俺、頑張ってるよ」と笑顔で会話することが一番大事なことなんだと信じて。

参加者が主体者となる活動を

高知県青年団協議会
大﨑　博士

高知県青年団協議会では有志で結成する「高知県青年活動実践協議会にぎわいボニート（以下ボニート）」の活動を後方支援しています。ボニートは高知県の青年団員などの社会人や大学生など約 40 名が宮城県仙台市で開催される「みちのくＹＯＳＡＫＯＩまつりへの参加・名取市美田園第一仮設住宅への訪問」を主な活動にしている団体です。今年で 4 年目を迎えるこの活動と比較して感じたことを中心に述べたいと思います。

ボニートの活動と比較して感じたことは、今回のフィールドワークは場所を「見る」、話を「聞く」だけでした。これだとテレビなどメディアを通じて得る情報と大して変わらないのではないのではないでしょうか。「東北のみなさんは大変だな」としか感じることができず、あくまで参加者は参加者、受身であって、地域に帰ってからそれぞれの「実践」に繋がりにくいのではないかと思います。

ボニートは訪問した際、高知県の祭り「よさこい」を東北のみなさんとの交流の「手段」としていっしょに踊るなど活用することで、参加者が「主体者」となる工夫をしています。より身近に自分のこととして「東北」を感じるプログラムが、各参加者が高知県に戻ってから「主体的な行動」を発揮するのに一役買っているのではと感じています。

これは今回のフィールドワークに留まらず、全国の青年活動全般に言えるのではないかと思うが、地域のコミュニティの復活・維持の中で活動する際、そのプロセスで主体者として関わることができなければ、青年団の存在は結果的に「なくてもかまわないもの」になってしまわないでしょうか？

全国の青年活動を否定するつもりは全くありません。活動の内容ではなく、それが地域コミュニティとつながっているか、つ

ながろうとしているか。それが大切です。これから全国のみなさんとの意見交換を行なっていきたいと思います。

ボニートの東北訪問は、毎年10月の3連休に合わせてバスツアーを行っています。全国のみなさん、タイミング合うようでしたらいっしょに、いこうぜよ♪

寒い海辺と温かいコーヒー

長崎県青年団連合会
梅川　美沙乃

家があったことを思わせる住宅基礎の部分だけが残された、海岸線。たくさんの家族の温かな家庭の痕跡だけがそこにはありました。

震災当日、私はいつも通り帰宅した後にテレビの衝撃的な映像を見て、胸に突き刺さるような悲しい想いをしていました。あれから2年以上たった今、福島で私が見たものは「何もない状態」でした。何もない寒々とした風景に驚き、ただただ周りを見渡すばかりでした。

そんな中でも、浜風商店街では笑顔あふれる人々が元気にお店をされていました。明るく話をしている目の前のおばちゃんたちもきっとたくさんのつらい思いをしてきたと思うと、何を聞いていいのか正直分かりませんでした。「何があっても私らは生きていかなきゃいけないから」と話してくれたことがとても印象に残っています。いただいたコーヒーは今までで一番あったかく感じました。

人はそんなに弱くない

大分県連合青年団
阿南　貴詞

「現地で直接感じたい！　同じ日本に住んでいるのに、震災をいまひとつ実感できていない自分がいる…」との思いでこのフィールドワークに参加しました。前年、地元青年団の仲間が気仙沼を訪問したことも参加を後押ししました。

現地を訪ねて驚きました。言葉を失いました。そこにあるはずの生活が、津波により無くなっていました。自然の脅威は恐ろしいです。でも、人はそんなに弱くもありませんでした。商店街の方々は笑顔で迎えてくださり、辛いはずであろう震災の経験を私たちに元気よく語ってくださいました。自然の脅威も、人間の芯の強さも、現地を訪ねたからこそ感じられたのです。テレビ画面や写真だけでは伝わらないものだと思います。

参加後、地元青年団のブログで学習内容を共有しました。すると、気仙沼の青年団関係者より、「記事を読んだよ。素晴らしい内容だった」と、ありがたいお言葉をいただきました。

今後、震災に限らず多くの分野で、現地で学習することを大切にしたいと思います。また、学んだことをきちんと発信・共有していきます。

なんでもっと早く行かなかったのか

宮崎県青年団協議会
松田　裕明

今回の福島フィールドワークが被災地への初めての訪問となりました。

現地を見て、もうここまで復興したのかという想いと、まだまだ先は長いなという想いとが入り交じったのが正直な感想です。さらに、震災発生からそれまでメディアや東北の青年団を通じ様々な情報は得ていたものの、実際に自分で見て聞いて感じて、それまで自分の中にあった震災への捉え方が一変し、なんでもっと早くに足を運ばなかったのかと後悔しました。

今回被災された方々とお話しさせていただいた際に印象的だったのが、これだけの被害に遭われたにもかかわらず、みなさんの明るくしっかり前を向いて強い意思で復興に向けて頑張っている姿でした。震災当初は絶望し、明るい気持ちなんて持てなかっただろうと思うし、仮に自分がその立場だったら同じようにできるかなと感じながらお話しをさせていただきました。また、浜風商店街に立ち寄った際には、「よく来たね」とおもてなしを受けたことも印象に残っています。

このフィールドワークを行うと聞いた時、行くだけで何になる？と思っていましたが、行くだけでも現地の人に喜んでもらえることを知り、なぜもっと早く来なかったのかとまた思いました。妙な理屈なんか関係ない、即行動すべきだったと。

震災から３年が経ち、メディアなどで取り上げられる機会も減ってきていますが、現地ではまだ多くの方が復興に向け苦労されている現状があり、まだまだ自分にもできることがあるはずです。

震災を風化させないことも、我々ができること。なかなか現地に行くことはできなくても、自分にできることは即やっていこう。そう感じたフィールドワークとなりました。

強く生き抜く力

宮崎県青年団協議会
堀口　美穂

正直、フィールドワークに参加する前は「腫れ物に触る」ような気持ちがあり「大変だったろうな」という気持ちだけしかありませんでした。今回参加し、津波の凄さを知ることはもとより、心に傷を負った中でも強く、前に、そして一人だけではなく周りを巻き込みながらコミュニティをつくり上げていくみなさんの姿に「強く生き抜く力」を実感しました。

３月に地元団で行なう県団役員活動報告の中で、パワーポイントや資料などを用いて現地の状況報告を行う予定です。

地域でも伝え続けていく

鹿児島県青年団協議会
桐野　貴行
山下　真奈美

正直、福島県いわき市の状況を前日までよく分かっていませんでした。福島というと津波被害というより原発被害の印象が強かったため、実際の状況を知った時は、本

当に驚きました。

現地に行き、印象に残っているのは、少しずつではあるものの復興に向けての歩みを進めている地域がある一方で、当時と変わらない手つかずの沿岸部などがあり、今も励ましあい、助けあいながら生きている人たちがいるということです。

こちらが元気をもらうくらい笑顔で迎えてくださった浜風商店街のみなさん、まちが元気になるようにと奮闘している道の駅よつくら港の皆さん、そこに暮らす方々は２年半経った今でも、昨日のことのように震災当時の話をしてくださいました。忘れられないことであると同時に、忘れてはいけないことだと、改めて思いました。

震災を経て、鹿児島でも防災意識が高まり、自治体の防災計画も進み、まちの至るところに海抜表示がされるなど色々な変化がありました。ただ、現在では報道が減り、また実際に生活の不自由さは感じられないこともあり、鹿児島で暮らす私たちにとって、日々の生活の中で被災地のことを感じ考える機会は少なくなっているように思います。だからこそ、私たちが福島で感じたことを、鹿児島の仲間や家族など、身近な人たちに伝え続けていきたいと思います。

福島でもらった「お土産」

沖縄県青年団協議会
照喜名　朝尚

マスメディアだけではなく自分の目で被災地を確認したい。その想いで今回参加し、福島の地に初上陸しました。少しずつ復興しているという福島ですが、目に入るもの全てに度肝を抜かれました。

大地震で崩壊した家屋、津波にさらわれた建物跡地、そして津波の圧力に負けて割れた防波堤等々、目に映るもの全てが衝撃でした。高低差の少ない沖縄にもしこの規模の地震や津波がきたら大半が壊滅状態になるのではないかと思いますが、まったく想像が追いつきません。

現地の方々は口を揃えて言っていました。「こんな大きな災害がまた次にくる前に、皆さんが意識的に防災対策などの行動をできるように伝える。これが私たち被災者、被災地からのお土産です」と。

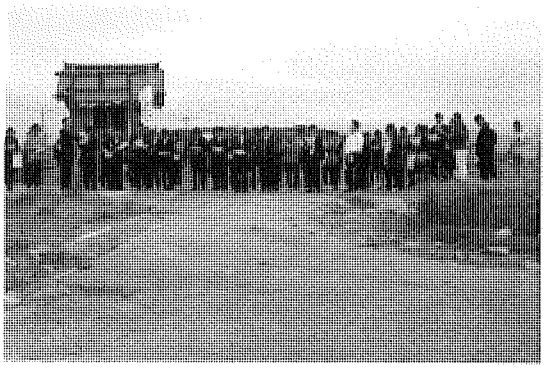
3.11のあの時から、防災対策をしている国民はどれほどいるのでしょうか。「自分たちの地域は地震が来ないと言われているから大丈夫」といった言葉を、ここ沖縄の地で耳にすることがあります。起きてからでは遅い。起きる前に今一度全体で考えなくてはいけません。

それから一番度肝を抜かされたのは、現地の方々の復興への情熱。笑顔いっぱいで僕らを受け入れてくれたことに、逆に元気をいただきました。本当に明るく元気に対応してくださり、当時のことも感情いっぱいで説明していただきました。

「必ず取り戻す！いち早く復興させてみせる！」。言葉にする前に、目や身体そのものから滲み出るこの想いがこれでもかというくらい伝わってきて、今僕にできることは「マスメディアのように飾らず、僕が目にしたこと、感じたことを、そのまま同志に伝えること。今、僕らが何をすべきなのか、そしていち早く継続的に出来ることを話し合うこと」だと考えました。

基地問題など色々な問題ばかりの沖縄ですが、ここ沖縄から、少しでも現地のため

になるような行動ができればと思います。また、現地で学んだ「不屈の精神」が自分の中に宿るよう活動していくことも今後の目標の一つになりました。一刻も早い東日本大震災の被災地の復興を祈念いたします。



久之浜で「私たちの誓い」を読む

私たちの誓い

激烈な地震、巨大な津波、そして原子力発電所事故。２０１１年３月１１日に発生した東日本大震災は、戦後最大の国難と言われ、未曾有の被害をもたらしました。震災直後、青年団は支援物資の協力や募金活動、現地でのボランティア活動など、復興に向けて幅広く取り組んできました。また、「被災の記録を残したい」と、震災を生き抜く青年たちの声を受け、支援と被災の記録誌「生きる」を発行し、多くの人たちにこの被災体験をつたえ、暮らしや地域を見つめ直すきっかけとしています。原発事故に対しても、めまぐるしく変わる情勢と向き合い学習を重ね、東京電力福島第１原子力発電所事故がいまだ収束しない中、原発は一度事故が起きれば取り返しのつかない事態を招き、地域の崩壊につながりかねないことを、体験と学習、議論を通して学んだ私たちは、すべての原子力発電を廃止する新たな態度を共に確認し合いました。

そして、震災から２年７ヶ月を経た今日、地域活動に取り組む私たちは、被災体験と原発被害の実相をより深く学び、学習と実践を更にひろげていくために、ここ福島県いわき市に集まりました。

今、私たちの目の前には津波により家並みが流され、更地には雑草が生い茂る光景が辺り一面にひろがっています。震災から時間を経てもなお、こうした厳しい現実が目の前に立ちはだかっていることを、私たちはまずもって受け止めなければいけません。今日、私たちは震災を経験した人たちから数々の貴重なお話を聞くことができました。押し寄せる波、ものすごい音とともに流されてくる多くの漁船、必死に逃げ何とか命が助かった人たち。しかし、気づいてみれば住まいや仕事、まちを失い心は砕かれていきました。また、原発事故による風評被害の現状についても知ることができました。連日深刻な報道が繰り返される汚染水漏れの問題は、世界中から懸念の声が上がっていますが、なによりもここに住む人々の暮らしを三重にも四重にも追い込んでいるのが事実です。先行きの見えない状況に絶望し孤立を深め、助かった命さえ落としてしまう震災関連死も一向に減っていません。「いつになったら明るい兆しが見えるのか」「早くふるさとにかえしてほしい」こうした不安や苦しみ、怒りは、福島だけのことではなく、原子力発電が立地する地域ではこれからも十分起こり得ることです。

厳しい現実に心を打ち砕かれながらも「自分たちが頑張らなければ」と、現実に立ち向かいよりよい地域の再建に向けて懸命に取り組む人たちの姿を私たちは見ました。共に支え合い、つながり合いながら現地で生きようとする住民や青年たちがそこにはいました。そんな姿に、私たちはたくさんの元気と勇気をいただきました。

私たち青年には、次世代の地域を担っていく責務があります。今日のお話を受けて、私たちは復興に向けてなにができるのか。また、原発に依存しないエネルギー政策や政治の仕組みができるよう、私たちはどのように社会に関わっていくのか、それを考えていくのは、私たち一人ひとりなのです。

一日も早い復興・復旧を願い、今日の出会いと学びをきっかけに、これからも震災の記憶を忘れることなく、それぞれの地域や家族、職場、学園で多くの人たち、多くの世代にこの事実をつたえていきます。そして、一人ひとりが私たちの暮らしや地域を見つめていくことを共に確認し合いながら、ここに私たちの誓いを表明します。

２０１３年１０月１９日

犠牲になられたすべての皆様の御霊に哀悼の意を表して

日本青年団協議会第２回理事会（福島）

第3章　広がる・広げる

震災の慰霊碑に献花し祈る中国青年代表団（撮影：2013年12月7日）

青年が地域を元気にする

東京都日野市・池上　洋通

まず初めに、沿岸部をはじめ被災した地域で活動する青年団に心から敬意を表します。３年前の厳しい状況を乗り越え、若いみなさんが地元にい続け、地域のために活動すること。このことだけでも、十分復興への力となっていることを被災地のみなさんにつたえたい。その上で、私たちが今後何をすべきなのか、まとめたいと思います。

１．被災地域の青年団に求められること

第一に、今の活動に自信をもつことです。みなさんはこの３年間無我夢中で活動してきたことと思いますが、復興の速度は驚くほど遅く、普段の活動に疑問を持ちはじめているという声をよく耳にします。しかし、そこで迷わないでほしい。震災後も青年団が地域にあり続けたことだけでも復興の一助になっているのです。大小問わず活動をすることは地域にとって、復興にむけてプラス以外の何ものでもありません。

第二に、もっと行政を使ってください。岩手県大槌町も福島県いわき市も、自治体自体が大きなダメージを受けました。大槌町は庁舎が全壊し町長も殉職されました。いわき市も近隣に東京電力福島第一原発が存在し、３年経過した今も対応に追われている状況です。しかし、行政は住民のために立ち止まることはできません。そこで鍵なるのが、青年団の出番なのです。行政も青年団も地域を支えるという点では向いている方向性は同じなのです。近年は被災地に限らず、行政の補助金廃止や支援の打ち切りは止む気配がありません。しかし、被害をうけた町が今後どのような町や地域をつくっていくのかを考えた時、行政と青年団は手を取り合って地域をつくっていく関係なのです。今、関係が出来ている青年団は今以上に関係を絶やさないようにすること。今関係がない青年団は、きっかけは補助金でも、復興会議でも何でも良いです。役場や市役所の青少年担当とお茶を飲むだけでも良いです。いずれにしても、もっと行政と近づき、利用するべきです。

第三に、地域のネットワークを構築する柱を担ってください。震災直後から、被災した各町での団体ネットワークが必要といわれて久しいですが、未だに個々での活動が多いのが現状なのです。是非、青年団には率先して、団体どうし、或いは個人をつなぐ役割を担っていただきたいと思います。今からでも決して遅くありません。「町の団体で知らない団体は無い」と言い切れる青年団をめざしてください。

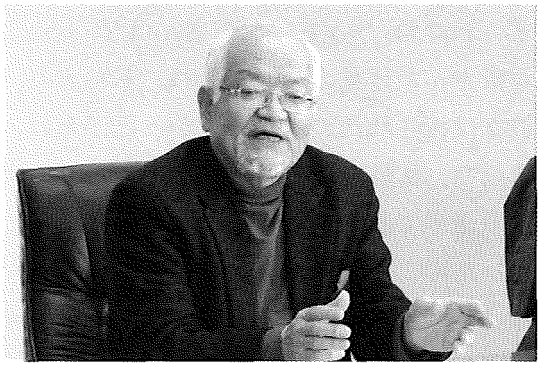
２．全国の青年団に求められること

震災から１年が過ぎたころから震災の風化が懸念されはじめました。３年を迎える今では、東北地域以外ではマスコミ報道も減り、現地の情報は、自らとりにいかないと得られない状況になっています。そこで、みなさんには是非、被災地の仲間の情報を発信する「マスコミ」になってほしい。発信するかたちはウェブでも、紙媒体でも何でもかまいません。みなさんの仲間の情報、そして仲間の町の情報を外に発信してください。今は発信するツールが無数にあることが、逆に情報がつたえにくくなっている一面も否定できません。とはいえ、情報は発信しないとつたわりません。使えるツー

ルを全て使って情報を出してください。それが、現地の青年の励みとなり、見ていてくれる人がいるという安心感につながるのです。小さなことですが、それが風化を防ぐことにもつながるのです。

青年団が被災した地域をはじめ全国各地で活動すること、これが被災した地域を明るくし、日本を明るくします。自然災害が多発するこの日本において、地域をベースに活動する青年団の存在意義は今後も増すことでしょう。自分たちの活動に自信をもって、被災地で、全国各地で今後も活動を展開してください。

日本青年団新聞 2014 年３月号のＦＯＣＵＳ「復興の旗印　沿岸部の青年団」で掲載した記事を転載した。



取材を受ける池上さん

池上　洋通　（いけがみ・ひろみち）
東京都日野市在住
1941 年生まれ　静岡県清水市（現静岡市）出身
自治体研究所主任研究員

震災に学ぶ

北海道夕張郡栗山町・澤田　康文

「ビンビンビン」と言いながら人差指で指すと「バンバンバン」と人差指で返してきた加藤国雄さん。これは仲間内で定着していた加藤さんとのコミュニケーションを取る一つの方法でした。震災一週間前の全青研において、当時日青協常任理事であった加藤さんと二人で分科会の司会を行うことになり、事前にお互いに「精一杯頑張りましょう」と確認しあったにも関わらず、当日は終始ほとんどを加藤常任に任せきりになってしまいました。改めて「ありがとう」と「ごめんなさい」を伝えようと、そして、自分が日青協常任理事に立候補することになり、同じ北東ブロックの加藤常任を頼りに頑張っていく決意を伝えようとしていた矢先の出来事でした。震災当日、加藤さんは大槌町の自治体職員として、役場庁舎前に防災対策本部を設営しようとしているときに津波の被害にあわれました。それから１年後となってしまいましたが、大槌町にある加藤さんのご両親が住んでいる仮設住宅にお邪魔する機会ができ、加藤さんの位牌に手を合わせることができました。加藤さんの温厚な人柄が親譲りであることを感じたとともに加藤さんの分も頑張っていこうと思いを新たにすることができたあたたかなひと時となりました。改めまして、これまでの加藤さんのご功績に心から敬意を表します。

いつどこで何が起こるかわからないのが自然災害であり、このたびの震災で日頃からの危機意識の高さや非常時に対する備え

がとても大切であることを痛感させられました。各地においても防災訓練や危機管理研修といった災害対策がさかんに行われるようになってきています。私も約３千人が働いている職場での避難訓練を体験しましたが、地上12階の建物で全員が外に出終わるまでに約45分間の時間がかかりました。これが本当の災害であった場合には、けが人が加わることになりますし、混乱も生じて、さらに多くの時間を要することが推測できます。そして、何よりも危険と感じたのは、危機意識を持って真剣に取り組む人が少ないということです。実際の災害でないと危機感の醸成はやはり難しいのですが、少しでも多くの人を真剣に取り組ませられるような工夫が大切であると切に感じました。また、このような訓練を継続していくことで体に覚えさせていくことも大事です。混乱する災害時は、防災組織を統率するリーダーも必要になりますが、これまで、避難所において青年団員が中心となった事例がいくつもあり、まさしく青年団活動にて培われたちからであります。そして、地域の「防災力」を高め、被害を最小限にするためには「自助」、「共助」、「公助」の３つの「助」のつながりが重要であり、青年団での経験がまさにこの３つの「助」をつなげ、育んでいるものと確信します。

昨今、震災時の記憶が薄れてきているのは事実です。そんな中、この「生きる」の果たす役割は大きく、私たちの暮らしや地域を見つめ直すきっかけにつなげていくことも重要です。

日青協理事会で立候補演説をする澤田さん

澤田　康文　（さわだ・やすふみ）
北海道夕張郡栗山町在住　職業：地方公務員
1976年生まれ　北海道栗山町出身
日本青年団協議会副会長

中国青年との学習交流

（財）宮城県青年会館加藤義弘常務理事（元日青協会長・写真前列右から３番目）を表敬訪問した時の記念写真

12月５日から９日、日本青年団協議会は中華全国青年連合会（略称：全青連）より青年代表団を招へいしました。今回受け入れした代表団は団長の張国来（ちょうこくらい）全青連国際部副部長をはじめ、リーダー養成や出版、施設関係者など中国の青少年教育の振興に携わる青年男女で編成されます。

代表団は地方プログラムとして宮城県を訪問しました。宮城県青年団連絡協議会の多大な協力のもと、地元の歴史や文化に触れるだけでなく、被災地の現状を学ぶ内容として、石巻市を訪問し被災した市立大川小学校を視察しました。宮城県青年団連絡協議会の佐久間祥平会長は、当時の津波の様子や同校の児童・教師の大半が犠牲になったことなどを説明、その後全員で慰霊碑に献花し、感想交流しました。

大川小学校の視察を終えた後に、代表団から感想をいただきましたので紹介します。

国をこえた支援のあり方展望したい

中華全国青年連合会国際部副部長
張　国来
［写真 前列の左から２番目］

今回の訪日では、日本の優れた災害経験を学ぶ機会となりました。

東日本大震災が起きた直後、私たちの団体でも日青協や宮城県の青年団の友人の安否がたいへん気になりました。同時に、今後日本がどのように復興していくのかという点も気になりました。私も宮城県にはこれまで何度も訪れたことがあり、凄まじい惨状を目にした時は、衝撃を受けました。

今回、日青協の招へい事業を通して、石巻市大川小学校を訪れることができました。現在の小学校、そして慰霊碑などを見ると、当時の状況がどれほどのものだったのかを知ることができました。それを考えると、心が痛みます。

自然災害は突然やってくるものです。しかし、そんな時に国をこえた支援活動ができるのではないかと思います。四川大地震の時に、日青協をはじめとする多くの日本の皆様が、四川や中国を支えてくれました。そして、東日本大震災では、中国も復興の手助けとなることができたと感じています。

改めて、被災した皆様の思いを馳せながら、震災の犠牲となられた皆様方に哀悼の意を表するとともに、このような機会をつくっていただいた日青協と宮城県青年団連絡協議会の皆様に感謝申し上げます。

両国で共有したい経験

中華全国青年連合会国際部幹部
李　小慧
［写真 後列の右から３番目］

自然に対して人間は無知であり、無力である。今回の視察では、改めてそのことを強く思いました。

今回宮城県を訪問し、佐久間会長の震災当時の様子のお話などを聞き、また、被災した地域を訪れ、直接自分の目で被害の甚大さをたしかめることができましたが、言葉では表現できないものがあります。大震災を経験し、今後日本国内はもとより、国をこえて日中両国が手を携え、復興に向けて共に歩んでいけたらと心から思います。

また、津波で被災した地域は、これまでも何度も津波被害を受けてきたと聞きました。大川小学校の建物の被害状況を見て、損害の大きさを痛感いたしました。児童や教師、学校関係者をはじめ多くの人たちが犠牲になったことは、痛ましい限りです。本当に残念でなりません。

いま、被災した地域、そして日本は復興に向けて歩んでいますが、東日本大震災の歴史と経験を教訓に、避難訓練の強化など対応の方法を検討していくことも求められるかと思います。そして、今回の学びを多くの人々と中国でも共有していければと思いました。

少しずつ高まる中国人の防災意識

中国少年先鋒隊事業発展センター弁公室主任
陳　強
［写真 後列の左から３番目］

今回、日青協の招へい事業を通して、東日本大震災の被災地の一つ、石巻市を訪れることができました。私は現在、中国で14歳以下の児童を対象にした活動「少年先鋒隊」のプロジェクトに関わっており、児童と接する機会が多くあります。その中で感じることは、中国の場合、建物対策とともに青少年への災害対策や防災教育が日本よりも遅れていると感じています。建物対策では、四川大地震以降に耐震性の研究も専門家の間では進められていますが、青少年や学生たちがどれだけ防災の意識・感覚を身につけていくのかという点では、まだ不十分かと思います。

また、私は2008年に団員の哈安邦さんとともに、四川大地震の救援活動に参加した経験があります。当時、莫大な金額が投資され、学校などの公共施設が建設されたことに、市民からは「なぜそこまでお金をかけて建てる必要があるのか」といった疑問や怒りの声もあがりました。中国では未だに貧富の差が激しく、こうした言葉が市民の中から出てくるのも当然なのです。このような市民の意識を変えていくには、時間が必要です。

一方、四川大地震以降に、学校独自で避難訓練に取り組むケースが増えてきました。こうした取り組みは、学校の校長先生の裁量にゆだねられているケースが大半で、義務化にはいたっていません。四川大地震により、人々の防災の重要性が認識されるようになったことは間違いありません。私は以前、日本の内閣府の招へい事業で避難訓練を体験しました。こうした訓練や日頃からの備えがやはり重要であると思います。

被災した地域が一日も早く復興することをお祈りするとともに、私たちができることはなにか考え、これからも協力していきたいと思います。

出版物で意識高めたい

中国少年児童新聞出版社総編集室幹部
李　雯璐
［写真 後列の右から２番目］

私は現在、中国少年児童新聞出版社に所属し、主に幼児・児童向けの書籍編集に携わっています。中国では防災や避難に関する出版物が少ないのですが、四川大地震や東日本大震災などを経て、今後はこうした災害に関する出版物も増えてくるものと思います。

大川小学校の視察を通して、防災教育の重要性を痛感しました。いつ起こるかわからない自然災害に対応するためには、私たち一人ひとりの意識を高めていくしかありません。これからは、私も編集者の一人として、子どもたちの防災意識が高まるような出版に力を入れていきたいと思います。また、読書を通して防災に必要な地域や技能が身につくようにしていきたいです。

四川大地震を思いおこす

中国青少年発展基金会希望小学校部幹部
哈　安邦
［写真 後列の右端］

私は、中国青少年発展基金会の職員として、貧困地域の教育環境の改善や就学を続けられなくなった児童の復学のために資金援助を展開している非営利社会公益プロジェクト「希望プロジェクト」に関わっています。この中で、2008年の四川大地震が発生した際に、陳強さんとともに復興支援活動に関わりました。四川大地震の時に、多くの子どもたちが犠牲となり、また多くの教育機関も崩壊しました。

そうした意味では、大川小学校の視察は四川大地震の時を思いおこすものでした。多くの児童や教師が犠牲となったことに、心からの哀悼の意を表します。中国では防災教育が日本に比べて進んでいません。私自身、日本の防災意識の高さには関心しています。

日本のみなさんは、今回の震災を教訓に、更なる防災意識と防災教育の向上に尽力されるでしょう。一日も早い復興を祈ります。

自然災害は世界共通の課題

内モンゴル天佐投資グループ会社取締役会長
奥　義兵
［写真 後列の左端］

視察を終えた今、なんとも言えない心の痛みを感じています。

私が思うに、日本は地震対策が優れているという印象がありました。しかし、津波対策がどの程度優れているのか、正直理解できていませんでした。今、被災されたみなさん、そして日本のみなさんは東日本大震災を経験し、地震対策とともに津波対策も重点課題に位置づけられていくかと思いますが、ぜひ、突然発生する自然災害を予測しながら、復興に向けて進んでください。私は早速中国に戻りましたら、私の家族や会社の職員、友人・知人など多くの人々に、今回の訪日での経験と体験、見たこと・聞いたこと・感じたことをつたえていきたいと思います。自然災害とどのように向き合うか、それは日本や中国だけでなく、万国に共通する課題だからです。

「生きる」そして生きていく

北海道紋別郡遠軽町　山中ちあき

あの震災からまもなく３年、当時のことを思い出したり考えたりすると、今でも震えに似たような感覚が身体の底から溢れ出す。

北海道で生まれ育ち、青年団と出会い、たくさんの出会いや学びを経ていく過程の中で東北の仲間たちとのつながりを紡いできた。

今だから、語れる（伝える）ことができるのではと思い、あまり人に語ることがなかった自身の 2011 年３月 11 日、その後の日々、そして、この「生きる」の取り組みへの思いなどを綴っていきたい。

【2011 年３月 11 日】

全国青研で休業した分の仕事を挽回すべく職場でパソコンにかじりついていた。当時の勤務先は測量設計の会社であったが、時代の流れに沿うように行政対応型の防災関連システム開発が主な業務となっていた。私は事務をはじめとする総務的業務を担当していたが年度末の納期が迫っていたこともあり、２月下旬からシステム開発業務も兼務していた。全国青研が終われば、追っかけ理事会が開催される。再び休業しなければならないため残業の日々が続いていた。

昼食を終え午後から業務に勤しんでいると何となく頭がクラクラし、車酔いに似た感覚になり仕事の疲れかと思っていた。15 時を過ぎた頃に同僚が「また宮城で地震だ！」と話していたのを聞き、取り急ぎ宮城県団長へ状況確認のメールを送り仕事を続けていた。早々に返信があり相当揺れた旨と県団役員の安否を確認中との内容であった。地震が起きたのは宮城県のみだと、その時点では思っており未曽有の被害をもたらした地震が起きたとは思ってもいなかった。

同僚の第一声から 30 分程経過した頃、社長から「大変だ！全員、社長室のテレビ前に集合！」と指示が出された。

テレビから流れてくる映像に絶句していた時、社長から「わが社が請け負っている業務とこの状況は必ずリンクしてくると思うから」とだけ告げられた。

宮城県上空から撮影されたものが放送されていた。飛行機で宮城県へ向かった際に何度も空から眺めていた風景がとんでもないことになっていた。「あの場所には、仲間の家があるかもしれない」そう思った瞬間、身体が凍りつきガタガタと震え出し、同僚から言葉を掛けられたが声が出なかった。自分の机に戻り、この状況を宮城県団長へ伝えなければと思いメールを送ろうと携帯電話を持ったものの手が震えて文字が打てず、ようやく打てた文章は「名取川の河口が大変なことになっている」だった。

宮城県に限らず、とんでもない規模の地震が発生したのだと、その映像を見た時に知った。正直、仕事は手につかない。時折、携帯電話に入ってくる仲間たちのメールに対応しながらも、自分自身の意識はどこかへ飛んでしまっていた。後で気づいたことだが、頭がクラクラした原因は低震度の地震が数分程、地元でも起きていたからだった。

この日は勤務終了後に地元の仲間と補助金を受けた事業の終了報告書を確認する約

束をしていたため残業をせず定時に上がった。また、３月中旬を過ぎれば週末の休みは返上して作業することが想定されるため、翌日からの土日は会社を休みにする旨の指示が事前に出ていた。

仕事を終えて仲間と合流したものの、互いにテレビから流れてくる映像を見ていたこともあり何を話しても上の空となってしまう。「提出期限は迫っているけど、今日は色々と対応することがあると思うから、書類確認は後日改めてしましょう！」と仲間から言われ、帰路についた。

帰宅すると神奈川県と埼玉県に暮らす父の姉妹とは安否確認ができている旨の話をされ安堵したが、長時間停電していることで色々な不具合が生じており、都内に通勤している息子と安否確認はできたものの、タイムリーに連絡が取り合えないとのことだった。

日青協事務局からも安否確認の連絡が入り、早々に緊急掲示板の立ち上げと職員は帰宅せず職場待機すると報告があった。北海道の状況については、早い段階で道青協から報告があったので、その旨を伝えつつ情報が入りしだい報告することで確認をした。

実はこの日、日青協で共に総務部で活動していた岩手県の加藤さんと夜に電話で打合せをする約束をしていた。全国青研時の常任理事会での議論を経て、改めて担当である加藤さんの考えを聞いて方向性を決めようと話をしていたのだ。やはり、年度末ということもあり、お互い仕事の上でも残業が多いため、翌日が休日となる金曜の夜に連絡を取り合うことにしていた。

加藤さんは行政職員なので打合せは厳しいだろう旨と安否確認を兼ねたメールを早い段階で送っていたが一向に返信はなかった。勤務終了後に電話をかけた時は呼び出し音の後に留守番電話サービスへ接続されたので、打合せは後日改めてしようとメッセージを残していたが、返事のメールも電話も入って来なかった。同じ総務部の役員から彼の安否について電話が入って来るが、それぞれに確認が取れていなかった。大きい地震が広範囲で起きているから仕事の対応に追われて連絡できる状況ではないのだと互いに判断し、彼からの連絡を待つことにした。

やらなければならないことがあるが何も手につかない。青年団関係者の安否確認については混乱を避けるため独自に対応するより日青協事務局で一括した方が良いかと考え、静かに自室に籠ってテレビで被害の状況を見ていた。時折、「こんな時こそリーダーシップを発揮すべきではないのか？」などと、叱咤する電話やメールを頂いたりもしたが、職場で見た映像が頭から離れられず、何もできなかった。

深夜になってから、行政庁舎自体が津波に襲われた所もあり、連絡が取れない自治体もあるとの情報がメールで入って来た。もしや、と一抹の不安が過るものの、加藤さんの無事を信じながら、この夜はなかなか寝付くことができずテレビを見て過ごした。

【2011年３月12日】

思うように睡眠できず、テレビから流れてくる情報に心苦しくなりながら朝を迎えた。関東に住む親戚の安否は確認できたものの、わが家には父方、母方ともに福島県

で暮らす親戚も多くいる。情報が混乱しないよう親戚の間で現地との連絡係を決めていたらしいが、停電等の影響で電話が混線し、思うように連絡が取り合えないとのことだった。

加藤さんからの連絡は一向に無いので何度か電話をかけてみたけど繋がらず「安否確認がしたいので連絡下さい」と定期的にメールを送っていた。

何もできない状況に苛立たしさはあるが、先のことを考え、前日にできなかった地元の仲間と打合せをしようと連絡を取り、夕方に私の親戚の事務所で落ち合うことにし、少し眠ることにした。

親戚の事務所へ行くと、住宅設備関連が主な業務のため、地震の影響で資材等の入荷が大幅に遅れるらしく、業者間で調整するやり取りが行われていた。また、対応中の住宅オーナーへは施工が遅れてしまうため、お詫びを兼ねた挨拶回りに奔走しようとしていた。親戚から「事務所の留守番を頼む！」と言われ、電話対応しながら仲間の到着を待った。事務所に入ってくる電話の大半は、施工中の依頼主からが多く「本当に工期通りに施工できるのか？」という問い合わせだった。やはり、年度末ということが色んなことに拍車をかけているようであった。

仲間と補助金事業に係る終了報告書の中身を確認し、加筆や修正を加え、提出の準備を終えた時には19時を過ぎていた。帰ろうと思い、外回りから戻って来ない親戚に連絡したら「もうすぐ事務所に戻るからウチで食事してから帰りなさい！明日も仕事は休みでしょ？」と言われ、仲間と一緒に親戚の帰りを待つことにした。

外回りから戻って来た親戚と遅い夕食をとりながら事務所に入った電話の件を伝えつつ色んな話を親戚から聞いた。地震から一晩しか経過していないのに、すでに資材等の流通は仮設住宅を優先するため一定程度の制限がかかっているとのことであった。地震の被害が１県に留まっていない現状は業界でも予測不能な状態であるため、早々に規制されたのではないかとのことだった。

結局この日の帰宅は深夜となった。

【2011年３月13日】

２日間の睡眠不足が祟り、昼近くに目が覚める。母から買い物を頼まれ、勤務先近くの地元では少し大きめのスーパーへ行った。大きな混乱も無く、いつも通りの日曜午後の少し混んだスーパーの光景だった。空いた棚も無く、本当にいつも通りであった。この光景が翌日の夕方には一変するとは思ってもいなかった。

夜になって神奈川県に住む叔母から乾電池を調達してほしいとの連絡が入る。簡単に手に入るだろうと思い、翌日の仕事帰りに買って来ると親に伝えていた。東北で暮らす友人からは店に行っても何も無い状態だと連絡が入り、日用雑貨を調達できないかとのことだった。これも簡単に調達、発送できると安易に考えていた。

【2011年３月14日】

休みが明け、職場では社長から予想していた通りの指示が伝えられた。

「月末が納期となっているが、行政からできるだけ早く納品してほしいと要望されたので急ピッチで作業を進めるように！今週の土日は休日出勤でお願いします！！」

週末は日青協の理事会で休みを申請していたので、とにかく作業のメドをつけるため、いつも以上の残業を覚悟した。

この日は叔母に頼まれた乾電池を調達しようと夕方に少し時間をもらい、前日に行ったスーパーへ赴いた。想像を絶する光景がそこにはあった。

お米・飲料水をはじめとする保存可能な食料品と乾電池等の日用雑貨類が商品棚から姿を消していたのだ。

大変申し訳ない話だが、友人から頼まれた日用雑貨は少々待つことができても、叔母に頼まれた乾電池は待つことができない。ここでの詳細は割愛するが、叔母の孫、すなわち私の従妹の子どもは生後１ヵ月の時に患った発熱と病院の処置不十分が起因し、１時間おきに機械での吸引が必要なのだ。もちろん体内には小さな器具が埋め込まれている。地震直後から停電が続き、十分な電力が供給されず、吸引器の充電が満足にできないのだ。急場を乾電池で対応しているとのことだった。加えて、計画停電が行われることもニュースで知っていたため、早々に必要だったのである。慌ててスーパーの状況を親へ連絡し、当分の間は残業で帰りが遅くなることを伝え職場に戻った。

親は私からの連絡を受けて、隣町へ乾電池の調達に向かい、何とか購入できた。

この日から月末まで、休日返上と残業の日々が続いたのである。

【2011年３月15日以降】

既刊の「生きる」で報告されているが、予定されていた日青協理事会をはじめとする機関会議は中止され異例の対応を執ることになった。

道青協では東北への支援物資は用意できるものの発送する手段が無く、様々な策を講じていたが、発送することができない日々が続いていた。

色々と懸念することは多々あったが、この頃は、とにかく仕事！仕事！の日々であり、外出といえば職場と自宅の往復であった。

気が付くと月末（年度末）を迎えており、仕事では何とか納品までに辿りつくことができていた。

震災以降、３月末まで満足な青年団活動をすることができなかった。仕事の忙しさを言い訳にはしたくないが正直なところ仕事の記憶しかないのだ。

唯一、記憶しているのは加藤さんのことである。安否が確認できるまで定期的にメールを送り、電話をかけていた。加藤さんの無事を伝えるメールが届いた時、岩手県の仲間にその情報は本当に確かなものであるか調べてほしいとお願いしていた。加藤さんの地元から発信された情報だから大丈夫だとの連絡を受け改めて安堵した。日青協の緊急掲示板には既に無事を伝える情報が流れていた。たとえ無事を伝える情報が流れていようとも、この時もう少し突っ込んだ調査をしていれば加藤さんのご家族に辛い思いをさせることはなかったと本当に後悔している。

この震災での教訓の一つに、明日という日が必ず来るとは限らないことを改めて痛感した。一日一日を大切に過ごすことの本当の意味をかみしめたのは言うまでもない。

【第61回日青協定期大会】

年度が変わった４月以降、仕事はある程

度落ち着いていた。日青協では新年度に向けて旧体制を中心に動き出した。第１回理事会（役員選挙）を経ていないため、新体制で臨むことはできないが、どのような対応を執ったかは既刊の「生きる」をご参照願いたい。

この定期大会は例年に倣ったものでの対応は難しいものであった。また、前段に開催された臨時理事会では議案が否決される事態も起きた。短い期間ではあるが、規約に則った運営ができないことのリスクを実感した。

微力ではあるが、定期大会までの間に被災した仲間たちへの支援活動に取り組めたことは、先人たちが築いてきた礎の賜物であると感謝している。

【日青協ができること】

定期大会を終え、会長という立場で私の平成23年度の日青協運動が始まった。会長への立候補を決心した時に描いていたビジョンは色々とあったが、震災を経てそれは大きく変化した。この年度は日青協も日本青年館も大きな節目を迎える重要な一年でもあった。そういう時だからこそ、前を向いて進んでいかなくてはならない。震災に遭った仲間たちが一日でも早く、いつも通りの生活（活動）ができるようになることが、一番の復興支援だというのを自分自身、念頭に置いていた。

日青協では、何度となく経験した震災をはじめとする災害への支援には様々な形で取り組んできた。もちろん、この震災においても、その経験を糧に微力ながら対応することができたと思っている。まだまだ不十分な支援であったと思うが、会長として務めた２年間は東日本大震災からの復興を方針の柱の一つに据えた。

「生きる」への取り組みは、日青協だからこそ、生み出せるものだと思う。まもなく、あの震災から３年目を迎え、日々のニュースで震災に関するものが取り上げられることも少なくなってきているからこそ、継続して取り組むべきことなのではないのだろうか。

【開けられない２本の瓶】

未だに開けることができない２本の酒がある。震災１ヶ月前の2011年２月11日、北海道・東北ブロック会議が宮城県で開催され日帰り行脚した。いつもなら、一泊二日の行程で臨むのだが、北海道での事業が重なり強行日程での仙台行脚だった。

会議を終え北海道へ戻る際、仙台空港の売店で好物の「すず音」という微発泡の日本酒を購入した。この時は期間限定品も発売していたので１本ずつ購入し、大事に自宅へ持ち帰った。

この２本の酒は自分が決めた節目を迎える日まで飲まず大切に保管していた。しかし、時間を置き過ぎると風味が損なわれる代物である。自分自身の次の一年が決まる日青協の理事会を節目と決め、その理事会から自宅に戻ったら飲もうと思っていたのだ。

その１ヶ月後に震災が起きた。何度も利用した仙台空港が津波に襲われていく映像がテレビから流れるたびに心が痛んだ。ひと月前には自分がそこにいたのだと思うと本当に切なくなった。

前述の通り、日青協理事会は中止となり、仕事に忙殺される日々を過ごし「すず音」

を開ける機会はなかった。というよりは、その２本の酒を見るたびに、あの日テレビで見た映像を思い出し、苦しくなってしまうのだ。

すず音は自分自身あの震災を忘れないためにも開けずに大切に保管しようと思い、現在も購入したままの状態となっている。

日青協定期大会で退任挨拶をする山中さん

【生きる、そして、生きていく】

この「生きる」の取り組みも第３号の発刊をまもなく迎える。同時に未曽有の被害をもたらした東日本大震災から３年の歳月が流れようとしている。第１号に取り組んでいた頃と現在では状況が大きく変化し、現地で生活する仲間たちの心の持ちようも変わってきていると思う。

先日、北海道で「生きる」の座談会が開催され同席させていただいた。その中身については、この第３号で詳細に報告されると思われるが、東日本大震災からの復興はまだ始まったばかりだとさえ思わざるを得ないと、改めて感じたところである。

声にならない心の叫び、そして願いや思いをすべて拾い上げ、昇華できるまで、この取り組みは続けていくべきだ。その手段や方法は、第１号から継続して関わってくれている仲間や諸先輩たちの考えや想いに耳を傾け、心を寄せて良く聴くことで形が見えてくると思う。一例ではあるが、継続して発刊するのであれば、年度ごとにテーマを据えて取り組んでも良いのではないかと考える。いずれにせよ日青協には、心から期待を込めてお願いしたい。

「生きる」ことは、本当に大切なことであるが、これからも私たちは「生きていく」のだから・・・。

山中　ちあき　（やまなか・ちあき）
北海道紋別郡遠軽町在住
1971年生まれ　北海道遠軽町出身
前日本青年団協議会会長

あとがき

まずもって、「生きる」第３号をこのような形で発行することができたのは、なによりも青年団の仲間や先輩たち、執筆にかかわってくれた方々、そして「生きる」の発行を待ち望んでいる方々等々、多くの皆様のおかげによるものです。改めて感謝申し上げます。

第３号では、第１号、第２号とはまた異なる、幅広い層の方々にかかわっていただき、多くの体験や本音、メッセージをつづることができました。一言で「体験をつづる」と言っても、決して容易ではありません。忙しさや文章を書く力、といったもの以上に、つづるということは、過去の記憶をふたたび思い起こし、向き合わなければならないことでもあるからです。今から 69 年前に被爆・戦争体験をした方の中には、二度とあんな思い出を思い返したくない、と口をふさぎ続けてこられた方も少なくありません。でも、そんな方々が自分の残り少ない命を戦争反対のために何ができるのか、それは体験を語ることであると自問自答を繰り返し、若者に被爆・戦争体験を語る取り組みをひろげるようになった事例もあります。今号の発行にあたり編集委員会が手記の寄稿を呼びかけた時に、誰一人として断ることなく、快く引き受け、書いてくださいました。それを考えると、つづられていることばの一字一句に、改めて体験の重みを感じます。

日青協は、「生きる」の取り組みを、次のように考えています。

「生きる」の発行を通して、被災と復興の記録誌というだけでなく、私たちの暮らしや地域を見つめ直すきっかけにつなげていくことも重要である。それは、つづり、読み、語り、きくという取り組みから、互いの学びと成長、そして地域づくりにつなげていく社会教育の実践でもある。

～「2013（平成 25）年度日本青年団協議会運動の総括」より抜粋～

今、私たちを取り巻く暮らしや社会は、めまぐるしく変化し続けています。そんな中で、「生きる」３号が完成した 2014 年を振り返ってみますと、東日本大震災から３年目をむかえた年でもありました。震災・防災について語る「語り部」の取り組みが少しずつ広がってもいきました。前年（2013 年９月）には、2020 年の夏季オリンピックが東京で開催されることが決まり、祝賀ムードが漂っていました。一方で、これにより復興への道のりが遠のくではないかと、被災した地域を中心に懸念がひろがりました。

この本を手にしたあなた、どうぞここにつづられている一人ひとりの声に耳を傾け、少しでも何かを感じ、仲間や家族、恋人、職場の同僚等々、あなたにとって身近な人に震災の経験をつたえ、ひろげ、共有していってください。もしかすると、あなたがこの本を手にした時、あなたのまわりに東日本大震災を経験した人がいないかもしれません。あなた自身が読み、つたえる立場から、つづる立場に変わるかもしれません。震災の経験を表現することが許されない社会になっているかもしれません。

どんな社会になろうと、どんなに時代が過ぎようと、経験と教訓をしっかり聞き、つたえていく場は必要です。そのために、「生きる」をぜひ活用してください。それが、震災や歴史を風化させない、私たちが歴史を継承していくことにもつながっていくのです。

2014 年３月

日本青年団協議会
社会部長　鳥澤　文彦

生きる　～東日本大震災と地域青年の記録～　第３号

編集・発行：『生きる～東日本大震災と地域青年の記録～』第３号編集委員会
（代表　辻　智子）
発　行　日：2014年５月４日
連　絡　先：〒160-0013　東京都新宿区霞ヶ丘町７－１　日本青年館内
日本青年団協議会気付
電話 03-3475-2490　ＦＡＸ　03-3475-0668
URL http://www.dan.or.jp　E-mail: shakai_josei@dan.or.jp
〒060-0811　北海道札幌市北区北十一条西七丁目
北海道大学大学院教育学研究院　辻　智子
※この取り組みに際し、科学研究費補助金（基盤（C）平成25～27年度「地域共同体の変容と青年集団―東日本大震災に直面して」課題番号25516016、代表者：辻智子）をききとり旅費等に活用させていただいた。